

中學國文諸教科書の唯一辭典

225
190

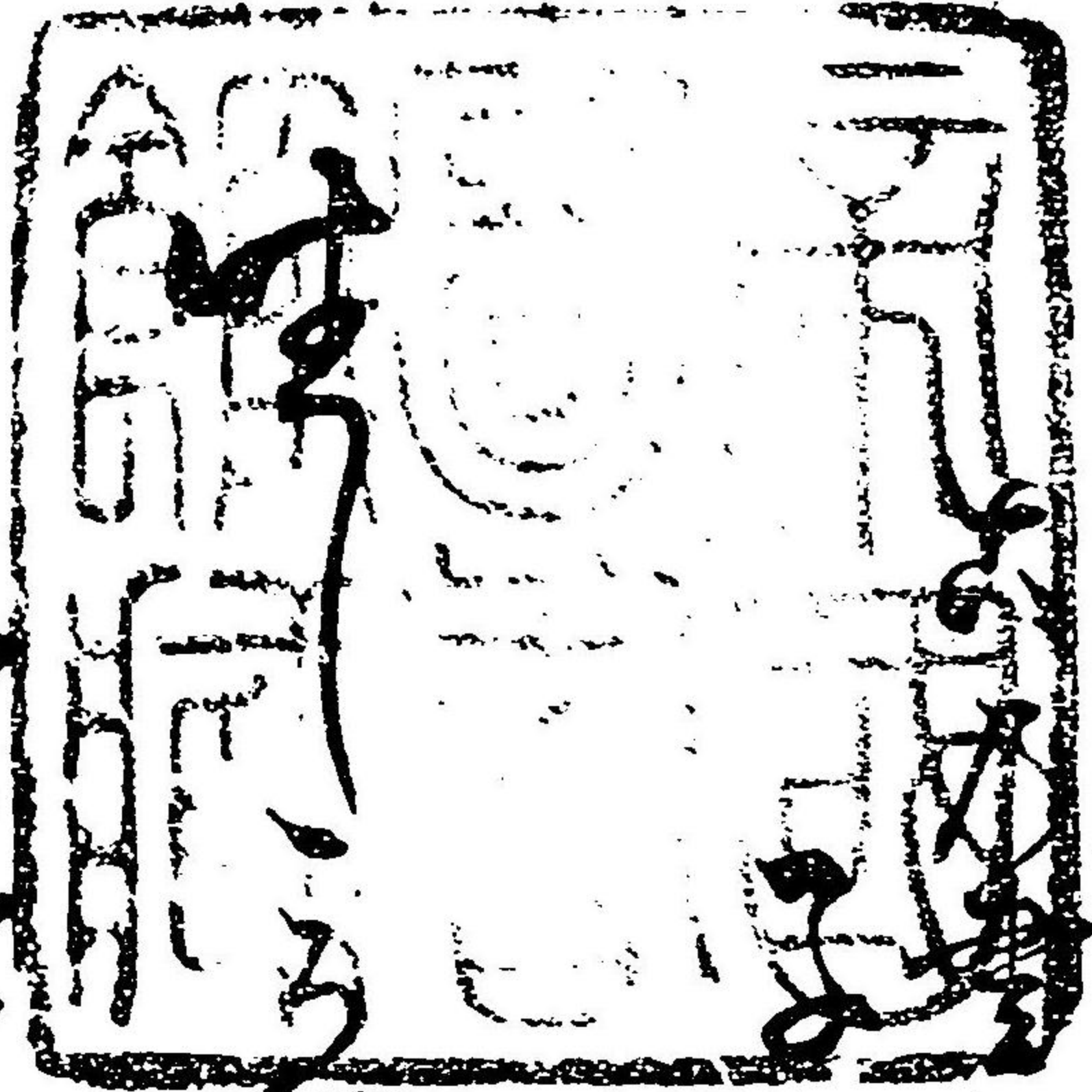
文學博士小杉楯邨先生題
早稻田大學講師赤堀又次郎先生序

中學四年國文熟語辭解

前華族女學校講師近藤正一先生著

東京 大學館發兌

特22
646



かねてより
 貴方の
 手紙を
 楽しみに
 読んで
 います
 こと
 甚だ
 うれし
 く思
 います
 貴方
 の
 健康
 が
 万
 事
 順
 調
 に
 進
 ん
 だ
 ら
 ば
 幸
 甚
 だ
 り
 ます
 貴
 方
 の
 手
 紙
 を
 今
 日
 受
 け
 取
 り
 致
 し
 ます
 貴
 方
 の
 手
 紙
 を
 今
 日
 受
 け
 取
 り
 致
 し
 ます



とくは
みねなまきし
とくは

とくは

文學博士松本



序

文

(一)

昔、釋昌住、新撰字鏡を著し、源順、和名類聚鈔を撰し、其後相
つぎて辭書の作多し、伊呂波字類抄、節用集、漢玉篇、和玉篇の
類、其中にても世に廣く行はれ、人に益を與へし事多し、近世に
至りて此類の書彌夥しく、或は讀書の爲に、或は作文の爲に各其
目的とするところによりて體裁も一ならず、先に余が友大西君、
實用地名辭典を出され、今又近藤君の「中四學年國文熟語詳解」を
公にせらるゝを見る、實に簡にして要を得、眞にかの中學の資糧、
藝林の津筏たるものといふべきなり、此書を手にするもの、卒業
の彼岸に到る爲に利益を得ること限りなかるべし、余もごより淺
學他の著作を批評する力なし、著者の求めにまかせて、一言をこゝ

(二)

に記し此書の成りたるよろこびを述ぶ

明治三十六年十月十日

瑠璃山房にて

赤堀又次郎

序

文

凡例

凡

一本書は中等教科用、國語、國文讀本中に採録せる文章の辭句を解釋したるものにして、専ら生徒が該科研究の備考に充つるを目的として編輯したるものたり
一書中、いろはの發音によりて次第したれば、搜攬の方法は、文章題目の首音によりて求むるものとす

例

(一)

一國文の教科書は一學年に二卷、五學年に十卷を讀み了るを通規とすれば、編者は搜攬上の便を計りて讀本二卷分を集めて一つとりとなし、五學年分を冊數、五つに分ちたるなり、則第四學年用讀本中の熟語成句は、この、一卷に集録せるものと知るべし

一本書は廣く各種の讀本中の文章に涉りて解釋を施したれども、最も主としたるは、多くの讀本中に於て良教科書として現に各地の中學校に採用せられ居る左の讀本につきて力を用ひたり

落合直文氏編

中等國語讀本

卷ノ七、卷ノ八

關根正直氏編

國文讀本

卷ノ七、卷ノ八

井上 賴園氏編
逸見 仲三郎氏編

中等國文

卷ノ四上、卷ノ四下

落合直文氏編

中等國文讀本

卷ノ七、卷ノ八

弘文館編

中等國文

卷ノ七、卷ノ八

一國語國文の字典は、世、もとより金玉の著に乏しからず、然れども初學者は其精細に過ぐるが爲に却て文義語勢の咀嚼に苦しむの憾なきとせず、故に本書は先づ文章語句の主旨大要に通せしむるを専らとしたれば普通文、口語文、書翰文、和歌に通じて一般に平易簡明の解釋を施したるなり
故に或は解釋の餘りに通俗に過ぐるものあるべきも、これ實に本書編輯の目的の存

する所にして、授業上の經驗は端なく編者を驅りて茲に至らしめし事を諒せよ

明治三十六年九月

編者識

いの部

目次

○一條信能卿の墓池原氏文
關根氏 頁 一

○今様歌五首白石千別氏作
關根氏國文讀本、七 一

○今様歌五首白石千別氏作
關根氏國文讀本、七 二

○今様歌五首妙音院入道外三氏作
關根氏國文讀本、八 二

○伊勢神宮の尊嚴池原氏文
關根氏 三

○國文讀本、八

○一系の皇統佐々木氏文、井上逸見
兩氏中等國文、四ノ上 三

○伊勢の平氏平家物語文、井上逸見
兩氏中等國文、四ノ下 四

ろの部

○老鯉松平樂翁氏文
弘文館中等國文、八 頁 六

はの部

○伴信友に與ふる書平田氏文
落合氏 七

○鉢木謠曲文
落合氏中等國語讀本、八 八

○春のけしき貝原氏文、井上逸見
兩氏中等國文、四ノ上 九

○花を詠める長歌海野氏詠
井上逸見 一〇

○花のさだめ本居氏文、井上逸見
兩氏中等國文、四ノ上 一〇

にの部

- 新田氏の真心久米氏文、○關根氏國文讀本、七……………二一
- 仁和寺の法師吉田氏文、○關根氏國文讀本、八……………二三
- 弘文館國文讀本、八……………二三
- 新田義貞北走太平記文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ上……………二三

ほの部

- 鳳凰堂小杉氏文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ下……………一三
- 芳山の畫讚秋山氏文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ下……………一四
- 保元物語○落合氏中等國文讀本、八……………一五

新院の御所各門門固の事……………一五

- 附軍評定の事……………一五
- 主上三條殿行幸の事……………一六
- 附官軍勢揃の事……………一六
- 白河殿義朝夜討に寄せらるゝ事……………一七

への部

- 平相國平家物語文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ下……………一八
- 平治の亂荒木田氏文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ下……………一九
- 平家物語○落合氏中等國文讀本、○弘文館中等國文、八……………八二〇

どの部

- 月見の事……………二〇
- 紅葉の事……………二二

東關紀行の一節東關紀行文、○落合氏中等國語讀本、七……………二三

- 登仙法師十訓抄文、○落合氏中等國語讀本、七……………二三
- 殿守の伴の御奴今昔物語文、○落合氏中等國語讀本、八……………二三

- 讀書の樂中島氏文、○關根氏中等國文讀本、八……………二五
- 讀法山崎氏文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ上……………二五

ちの部

をの部

- 治承の辻風鶴氏文、○關根氏國文讀本、七……………二六
- 中納言行平尾崎氏文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ上……………二六
- 温泉に行く人を送る加藤氏文、○井上逸見兩氏中等國文、四ノ下……………二六

わの部

- 渡邊華山高野長英の傳記の後に藤田氏文、○落合氏中等國語讀本、八……………二七
- 和歌に感興の益あり室氏文、○關根氏國文讀本、八……………二七

かの部

- 我國の美術佐野氏文 ○井上逸見三二
- 笠置山太平記文 ○落合氏三二
- 鎌倉時代に於ける余三三
- 感想落合氏文 ○落合氏三三
- 笠置城の防戦太平記文 ○關三六
- 夏夜人來安部井氏文 ○井上逸見三七
- 川中島戦圖に題す堀秀成氏文
- 賀名生皇居の事太平記文 ○落合氏三八

よの部

- 歌謠太宰氏文 ○弘文館中等國文、八三八
- 芳野の行宮正統記文 ○落合氏四〇
- 吉水院本居氏文 ○落合氏中等國語四〇
- 代々の惠佐々木氏文 ○井上逸見四三
- 吉野行啓小出氏文 ○井上逸見四三
- 吉野山の懐古權田氏文
- 義朝の敗北平治物語文 ○井上逸見四五

たの部

- 吉野拾遺落合氏中等國文 ○落合氏四五
- 後醍醐天皇吉野假宮の事四五
- 顯家卿の北の方の事四八
- 夜討曾我謡曲文 ○弘文館中等國文、八五〇
- よろづは頼むべからず徒然草文 ○弘文館中等國文、八五一
- 幼兒を諭す詞本居氏文 ○弘文館中等國文、八五一
- 短編四章落合氏中等國語讀本 ○落合氏五二
- 牡鷓を聞く記瀧澤氏文 ○瀧澤五二

- 鯉の圖に題す伴氏文 ○伴五二
- 魂祭の題辭清水氏文 ○清水五三
- 砧を聞く詞清水氏文 ○清水五三
- 忠度と俊成平家物語文 ○落合氏中等國語讀本、八五三
- 多田行綱の返忠平家物語文 ○關根氏國文讀本、八五四
- 短歌十首中山氏外數氏詠 ○關根氏中等國文讀本、八五五
- 忠度卿和歌を殘す源平盛衰記文 ○關根氏國文讀本、八五六
- 高木順が歌文の序中島氏國文讀本 ○關根氏五七

○篁の廣才尾崎氏文○井上逸見兩氏中等國文、四ノ上……五八

○篁朝臣を詠める平野民詠○井上逸見……五八

○大塔宮熊野落の事太平記文……五八

○落合氏中等國文讀本、七……五八

○高雄の紅葉高松氏文○弘文館中等國文、八、六〇……五八

○忠信吉野に留る義經記文○弘文館……六一

中等國文、八……六一

りの部

○空行く雁曾我物語文○落合氏中等國語讀本、七……六三

○想夫戀作者不明○落合氏中等國語讀本、八……六三

○そらるごころ五篇徒然草文○落合氏中等國語讀本、八……六四

雪の朝……六四

おも影……六五

過にし方……六五

見ぬ世の友……六五

賤しげなるもの……六五

つこの部

らの部

○恒良親王栗原氏文○關根氏中等國文讀本、七……六六

おの部

○宇治拾遺物語落合氏中等國文讀本、八……七三

伴大納言應天門を焼く

事……七三

河内守頼信平忠恒を攻

むる事……七四

大將つくしみの事……七五

のの部

○範頼に與ふる書源頼朝文○弘文館中等國文、八……七六

おの部

○頼山陽及び其著作その一

朝比奈氏文○落合氏中等國語讀本、七……六七

○頼山陽及び其著作その二

朝比奈氏文……六八

○頼山陽及び其著作その三

朝比奈氏文……六九

○頼氏楠公論栗原氏文○關根氏國文讀本、七……七〇

うの部

○宇治川の先陣平家物語文○關根氏國文讀本、八、七一

○宇治の道の記松平氏文○井上逸見兩氏中等國文、四ノ下……七二

○大瀧 〇本居氏文 〇關根氏國文讀本、七……………七七

くの部

○楠正儀の恩義敵を感じ

しむ 〇吉野拾遺文 〇關根氏國文讀本、七……………七七

○繪畫の論 〇中島氏文 〇關根氏國文讀本、八……………七八

○熊野紀行 〇小津氏文 〇井上逸見 〇兩氏中等國文、四ノ下……………七九

○訓點 〇山崎氏文 〇井上逸見 〇兩氏中等國文、四ノ上……………七九

○楠正行最後の事 〇太平記文 〇落合氏中等國文讀本、七……………七九

やの部

中等國文讀本、七……………七九

○夜學 〇中島氏文 〇關根氏國文讀本、八……………八〇

○八島の春 〇源平盛衰記文 〇關根氏國文讀本、八……………八〇

○山 〇伴氏文 〇井上逸見 〇兩氏中等國文、四ノ下……………八一

まの部

○正行朝臣吉野の宮に

參る 〇太平記文 〇關根氏國文讀本、七……………八二

○まことの歌 〇高崎氏文 〇關根氏國文讀本、八……………八二

けの部

○藝術家の逸話二章 〇今昔物語文 〇落合氏中等國語讀本、八……………八三

○月夜逗子より友人に寄する書 〇德富氏文 〇落合氏中等國語讀本、八……………八三

○元歴の地震 〇鴨氏文 〇關根氏國文讀本、七……………八四

○建武中興論 〇井上氏文 〇落合氏中等國文讀本、七 〇落合氏中等國語讀本、七……………八四

源平兩軍の優劣 〇源平盛衰記文 〇關根氏國文讀本、八……………八五

○經が島 〇荒木田氏文 〇井上逸見 〇兩氏中等國文、四ノ下……………八六

○元祿の大地震 〇新井氏文 〇井上逸見 〇兩氏中等國文、四ノ下……………八七

○源平盛衰記 〇落合氏中等國文讀本、八……………八八

義經鴨越に赴く事……………八八

〇弘文館中等國文、八……………九四

○富士山上のながめ 〇關田次筆文……………九四

○藤川紀行 〇八田氏文 〇井上逸見 〇兩氏中等國文、四ノ下……………九三

○福原の懐古 〇井上文雄氏文 〇井上逸見 〇兩氏中等國文、四ノ下……………九三

○古寺 〇中島氏文 〇關根氏國語讀本、七……………九二

○武を貴ぶ國風 〇久米氏文 〇關根氏國文讀本、七……………九二

○射る事……………九〇

鷲尾一ノ谷案内者の事……………八九

玉蟲扇を立て與一そを……………八九

ふの部……………九〇

玉蟲扇を立て與一そを……………八九

射る事……………九〇

この部

- 古戦場を過ぐ久米氏文、〇關根氏國文讀本、七 九五
- 小松内府父を諫む平家物語文 九六
- 國史を講究すべし山崎氏國文讀本、八 九六
- 弘安の役永井氏文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ上 九七
- 後三條天皇今鏡文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ下 九八
- 言靈井上逸見氏中等國文、四ノ下 九九
- 後醍醐天皇正統記文、〇落合氏中等國文讀本、七 一〇〇

ての部

- 天才の末路一、二、三、〇落合氏中等國語讀本、七 一〇五
- 朝鮮來聘使の禮新井氏文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ上 一〇六
- 尼法師一の福地氏文、〇落合氏中等國語讀本 一〇六
- 尼法師その二福地氏文 一〇七
- 安元の大火鴨氏文、〇關根氏國文讀本、七 一〇八
- 熱海日記藤原氏文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ下 一〇九

さの部

まの部

- 櫻短歌、〇落合氏中等國語讀本、八 一一〇
- 山家の興中島氏文、〇關根氏國文讀本、八 一一二
- 西光淨海を嘲る平家物語國文讀本、八 一一三
- 西行法師の歌を評す高崎氏文、〇關根氏國文讀本、八 一一三
- 漁村の夕暮中島氏文、〇關根氏國文讀本、七 一一三
- 木曾義仲の舊里を過ぐ池原氏文、〇關根氏國文讀本、八 一一四
- 木曾路の絶景池原氏文、〇關根氏 一一四

ゆの部

- 雪の景色林氏文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ上 一一六
- 雪見の詞藤井氏文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ上 一一六
- 夕立藤井氏文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ上 一一七

みの部

- 湊河の合戦太平記文、〇井上逸見氏中等國文、四ノ上 一一七

しの部

○叙事詩人としての巢
林子 坪内氏文、中等國語讀本、七……………一三八

○城墟感懷 久米氏文、中等國語讀本、七……………一一九

○小楠公 本居氏詠、落合氏中等國語讀本、七……………一二〇

○自然美 坪内氏文、落合氏中等國語讀本、八……………一二〇

○詩歌論 高田氏文、落合氏中等國語讀本、八……………一二一

○主上笠置山を落ち給ふ 太平記文、關根氏國文讀本、七……………一二二

○秋後の山里 吉田氏文、關根氏國文讀本、八……………一二三

○白拍子琵琶法師 吉田氏文、關根氏國文讀本、八……………一二四

○鹿の谷山莊の密謀 平家物語文……………一二四

ひの部

○美術の保護 その一、三宅氏文、落合氏中等國文讀本、八……………一三三

○美術の保護 その二、三宅氏文……………一三四

○人のすみか 鴨氏文、關根氏國文讀本、七……………一三四

○百鳥譜 横井氏文、弘文館中等國文、八……………一三五

もの部

○師賢公の事跡 伊能氏文、關根氏國文讀本、七……………一三六

○文字かく心得 本居氏文、關根氏國文讀本、八……………一三八

○淨海入道の憤怒 平家物語文、關根氏國文讀本、八……………一二五

○子路が人となりをめぐる 平田氏文、井上逸見兩氏中等國文、四ノ上……………一二七

○書籍を粗略に讀む人 平田氏文、井上逸見兩氏中等國文、四ノ上……………一二七

○新古今集 落合氏中等國文讀本、八……………一二八

○春秋の争ひ 室氏文、館中等國文、弘文……………一三〇

○自尊自卑の性 井上氏文、弘文館中等國文、八……………一三一

せの部

○前出師表 阪氏譯文、弘文館中等國文、八……………一三八

すの部

○陶山小見山の夜打 太平記文、關根氏國文讀本、七……………一三九

○資氏の遠矢 太平記文、井上逸見兩氏中等國文、四ノ上……………一四〇

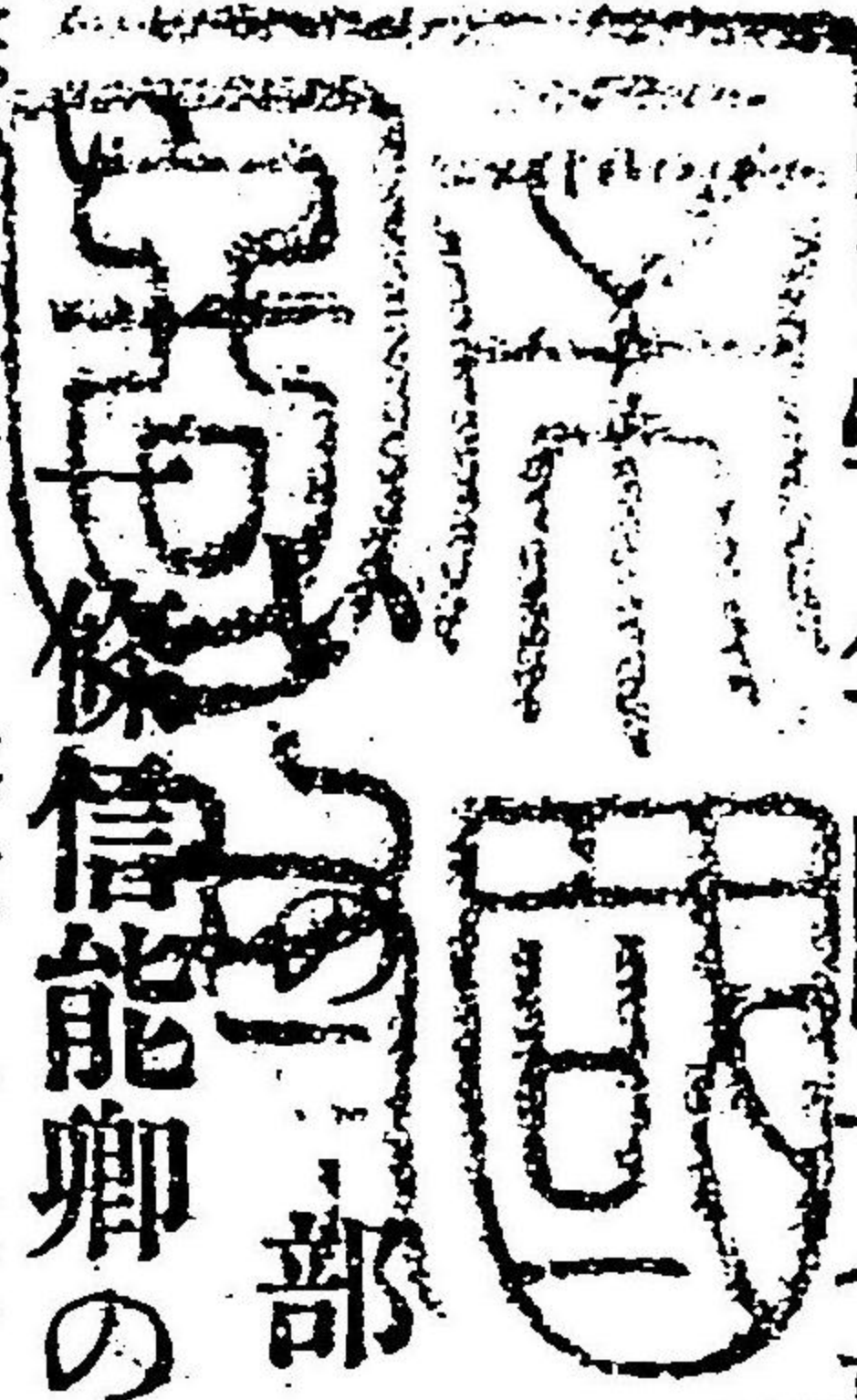
○相摸の戲を見てよめる歌 本居氏文、弘文館中等國文、八……………一四〇

目次終

中 學

四 學 年 國 文 熟 語 詳 解

近 藤 正 一 述



信能卿の墓

池原香釋氏文

○岩村いほむら郡あまがさき美濃國みの那な郡の長廉ながり ○一口いちくち地名 ○御軍みくさ皇軍すまみ ○わたされ引渡り ○ゐて引つれて ○むくろ屍 ○み

かごべ也朝家 ○あらぬはことわり形見の残りてあらぬのは道理 ○あはれ感嘆 ○御輦みくらま陛下みかどの ○いそしみはげみ つとむる

○臣おみたち ○事ことの上うへなり ○おくつき墓 ○鴨かも長明ながあき方丈ぼうじやう記 ○いかにとも知るよしなきどうであるか

ぬ分ら

い 今 様 歌 五 首

白石千別氏作

○菖蒲あやめ五月端午の節に軒に葺く、さうぶ也、 ○香かを添そへて吹き送はる風かぜに軒のきに取とり残のこる、 ○ゆふ風かぜ夕ゆふの

風 ○やど屋前也、今は家と云ふ意いに用もちはらるれどこれ奈夏朝なげの末すえより、かづかす移うつり來きたれるにて、宿しゆくの庭にわ、宿しゆくの軒のきなど云へるやうななれり ○小鈴こすず俗しやくに云ふ風鈴也 ○伊豫いよ

(一)

部 の い

簾すだれ伊豫竹にて編み ○窓まどにぬるて居る ○すゞしき夢ゆめや見る 涼しき夢を見て ○うき憂也 ○もたる持居る
 ○隈くまもなきもりも ○門田かた田 ○かつ散りてり、見えたるばかりの意にも用ふ ○背戸せと口也 ○水
 鶏なま○見る程ほどもなきもりも 見て居る間 ○月影つきかげいかになりぬらむと也、彼の雲の何處に月やとるらむと云へる
 意也 ○おきあかしたる 朝早くより眼を覺まし ○露つゆのよるに極めて短き間を云ふ也 ○るまるる 笑ま
 て、微笑 ○手てなふれそ 勿れなの意

今様歌五首

白石千別氏作

○わかえ若枝也 ○ひと日ひひとひに 毎日毎 ○南みなみの風かぜ御勢也 ○ますらを武夫也 ○をたけび雄健呼なり
 ちしほ血染と云へる意にて血かみ軍中のが ○夜よもすがらし也 ○赤あかき心こころまこころを云ふ ○おま
 しを守りし 皇宮の意也守りしは守護し奉りし也 ○魂たまばく ○あらぬかろうで ○ひとへ花の一重と一
 葉はとをかけ ○守り ○薫かほる
 ○こかげ木陰にて木の下也 ○かざ挿して 挿さして古は、花を冠かぶにさし ○春はるの雪ゆきこそふりかられ 梅の花の散りかたる
 のを春の雪のふるか

今様歌五首

妙音院入道、徳大寺實定、平康頼、ほとけ祇王、作

と疑ひしにて折は梅花梅挿さ頭、二月雪 ○古ふるき都みやこ平安の舊都を云ふ清盛都を福原に遷せしより ○淺あさ茅ちが原はら淺
 落おち衣と云へる朗詠の意を云へる也 ○くま隈にて、 ○身みにはしむとすると云ふ意也 ○白露はくろは月の光ひかりにて置
 が原は茅の多く生ふ所にて荒 ○向むかひの岸きしは彼岸の意ひにて淨土の意を含めり ○千代ちよもへぬべき
 白露は凡て月 ○權現ごんげん船ふね野の權現に ○向むかひの岸きしは彼岸の意ひにて淨土の意を含めり ○千代ちよもへぬべき
 千歳ちとせも繁茂する ○御前ごまへ ○龜かめ岡が ○蓬菜山ほうさいざん 死の仙人の住む山也 ○すくひ巢を
 べく見ゆるの意

伊勢神宮の尊嚴

池原種香氏文

○うへ上はを申まをし奉たる也 ○外宮とみや度會郡山田 ○かちにて 徒歩に ○宮みやの御門ごもん外宮の御門にて ○おりさ
 せ給たまひりり給たまひり給たまひり ○内うちつ庭には御垣の ○いはん方かたなしの申まをす意也 ○千枝ちえだの杉すぎ宮城中の ○内宮うちみや度會郡宇治
 ○あひの山やま地ぢ ○五十鈴川いそづか川又御裳裾 ○うなず椿首なり拜 ○もの遠とほく物事奥深き意にて、 ○身みの
 幸さい合あせ也 ○神風かみかぜ伊勢といはん枕詞也、昔神武天皇御東征の時、伊勢津彦降伏して此國を立去る時、夜にまざれ
 ○かためて 宮柱太敷のかため、と御 代を固めと云ひかけし也

一系の皇統

佐々木高行氏文

○邦城はうじき國こ土どの意 ○風氣ふうき風俗 ○取とりす べて取とりて ○國こく是こ進しんむべき方針也 ○按おふに ○至し醇じゆん極ごくめて

○皇祖皇太 皇孫 尊 ○宣賜はくは仰せらるる ○つぎ 次第 ○知らさむ 知ろしめし治 ○齋く
 忌を盡す事にて、 ○またく全 ○いでや 語 ○高御坐 天皇の ○紊れ ○つどまやか 簡 ○芙蓉峰 富士山
 所祭又る崇秘也 ○蓮花の事にて富士の頂の形状、八葉 ○彰れ ○外辱 外國の、 ○期 時 ○史乘 史 ○古賢 曰く 孟子の言 ○
 の蓮花に似たるより斯く云ひなせる也 ○眼識 讀書する上に於ての見識を云ふ

い 伊勢の平氏

平家物語文

○ごうしん 造り進 ○供養 ○天 承 崇徳天皇 ○けんしやう 勸養にて ○けつこく 関國にて、國守の ○
 あきたる 守の明き ○雲の上 人殿上 ○五節 豊明の節會 後の饗宴を云ふ ○右弼の身にあらず 事
 を以て仕へ奉る身に ○心うかるべし 心事 ○せんずる所 つかま ○さやまき 刀也 ○しごけなげ
 ならず也後世の右筆也 ○火のほの暗き方 くらさ方也 ○やをら 弱き義にてやわと通ず、 ○餘所より
 ならちもなく也、俗の ○氷などのやうに 氷などの如く、ひやく ○目をすまじけり 目を醒しけり、に ○一門
 は外より見た ○氷などのやうに 濃緑の威 ○腹巻 鐘の一種也胸の板を小く切り鎖にてかけ、疊具足の如して
 たりし一族にて ○萌黄おごし 濃緑の威 ○腹巻 鐘の一種也胸の板を小く切り鎖にてかけ、疊具足の如して
 せ結ぶ、を ○つか袋 嚢袋にて刀 ○小庭 殿上の ○貫首 頭人の ○うつばばしら 殿庭の隅にありて雨水を
 腹巻といふ ○つか袋 嚢袋にて刀 ○小庭 殿上の ○貫首 頭人の ○うつばばしら 殿庭の隅にありて雨水を

むら ○すどのつな 蔵人や、小蔵人を召す時の綱にて今の、呼び鈴の綱也校 ○ほういの者 魁衣をつけ ○狼
 藉 〇とうく 疾く疾くに ○まかり出でよ 退出 ○六位 蔵人 ○昇殿の主 昇殿致し ○備前守 殿の
 忠盛 ○そのならむ 様行也 ○かくて 斯様に ○えこそ出づまじ 決し退出は致さ ○御前のめしに
 まはれけるに 御前へ召されて舞 ○へいしは、すがめなりけり 伊勢の瓶子は酢を入 ○はやされけ
 る也 ○掛巻も 言葉にかけ ○柏原天皇 桓武 ○地下 六位 ○振舞なつて 落ちぶ ○ふかかりければ
 永年の間な ○その國の器に 其住國なる伊 ○よせて 言寄 ○すがまれ すが眼也 ○主殿つかさ 守殿の ○か
 うともいはまほしふは思はれれども 斯様斯様にありしと有のまゝ ○正しう有の ○べちのこ
 と別 ○殿上までも、切上らむ ずる者のつら 魂 上までも上りて切り付くる様なる顔付なりし故に也
 ○白薄やう 白薄 ○しせんじの紙 修禪寺 ○筆のちく 筆の軸、共 ○黒師 師の意也 ○くろきさう
 かな 黒き頭かな也、頭 ○何なる人の人の也 ○みなじ 兒孤 ○むこにとりて 婿に、取 ○花やかに
 大切に、う ○播摩よね 播摩の ○とくさかむくの葉 木賊であるか、む ○さら 羅 ○磨くはとぞが
 つくしくし ○これ 家成を云ふ播摩に ○公卿 ○殿上人 五位以上 ○ゆう 劍をたいして 雄劍を帯びて也雄劍
 と也 ○これ 家成を云ふ播摩に ○公卿 ○殿上人 五位以上 ○ゆう 劍をたいして 雄劍を帯びて也雄劍

云〇まはるる守〇綸命りんめいのよしある先規せんき勅令しつれいである程ほどの來〇ほういの兵へい袍衣ほくいを着〇兩りやう條じょうきたい箇
 條は奇態、不都合ふごうなり〇てうてうせりてうてうせりの重疊じゆうたう居るの意〇殿上てんじやうの御札ごさつ名札なさつを削りて也〇けつくわんの意
 解官かいくわんなどの誤り〇ちやうにんちやうにん停任ていにんの〇ちんじちんじ陳述ちんじの〇覺悟かくご仕らずしらず〇たくまるるたくまるる志盛しせうを
 云事を計劃いんごう〇その慚はぢをたすけんが爲ために主人忠盛しゆんしせうの耻ちしめを受〇力及ちからおよばざる次第しだいなり私しの力の及およば
 ざる也〇めじくんずべきかめじくんずべきか召し進めしすすむ申〇じつふによりてじつふによりて實不也じつふに全ぜんく刀たうのあるか、〇科しやうの左右さう次第だいの〇
 行おこなはるべきかおこなはるべきか行おこなはるべき〇たづさはらむ程ほどの者ものの關係くわいする程ほど

るの部

る 老鯉

松平樂翁氏文

〇何なにごとのささはりもなくさはりもなくて病氣びやうき其他何たと云ふ〇ながらながらひ存ひぞん〇かうばかうばじきじき餌えのあれば味あじの好き
 時〇とめゆきてとめゆきて求めゆ〇食くはまほまほじきじき事ことながらながら食くした事ことに〇心こころにしめてみれば心こころに承知じやうち
 〇さ思おもひつけばおもひつけば然しかに思おもひて〇鱒ますふりて、遠とほくのがれてとほくのがれて鱒ますをふりたてて遠方とほ〇いさゝかもか
 へりみずへりみずへりみずと也〇よそのいほも等ら外ほかの魚いし〇怪あやじきことよそは思おもへごと其その餌えには針はりなどの仕懸しげんあ

〇遠とほく去さることせずとほく去ることせず遠方とほへにぐる〇わらはべわらはべなんごは鯉こいの童どう〇そのかうばかうばじきじきに其その餌えの香
 〇あたり離はなれずはなれず餌えの近傍きんぱう〇ひめもす日ひ〇彼のあやあやじきじきほかに例れいの外ほかに〇かゝるものある
 ぞかし釣つりに引ひきかゝる〇さこ網あみの水みづに〇何なに計はかりの事ことかあらむあらむが程ほどの事こと〇賢かしこき人ひとをもをも智恵ちゑある人
 也人間にんげんは鯉こいを逃にがすまじく工風こうふう〇越こえて云い破やぶらむやぶらむ云い何なにれ〇人ひとは、もとより人ひとなれば人間にんげんは人間にんげん、丈
 し居いるにりれを、あなづりて〇越こえて云い破やぶらむやぶらむ云い何なにれ〇人ひとは、もとより人ひとなれば人間にんげんは人間にんげん、丈
 意いの〇とるぞ捕とる〇水底みづそこにつきて離はなれずはなれず其その所ところを離はなれぬ也〇あびき引ひ〇かはうそ、あじかあじか
 りて食くす〇白しろ絲いとくりためては、網あみの白しろ絲いとを繰くりて〇龍門りゆうもん支那しなの〇ほだされての意い也〇たごりゆくたごりゆく探たづね
 る魚いし也〇かうやうかうやうの也〇にはかなるにはかなる勢いきほひにもものらずしてにもものらずして雨あめなどの爲ために俄たち出來いでる瀧たきな
 行くの〇かうやうかうやうの也〇にはかなるにはかなる勢いきほひにもものらずしてにもものらずして雨あめなどの爲ために俄たち出來いでる瀧たきな

はの部

は 伴信友に與ふる書

平田篤胤氏文

〇小弟せうてい自分の事じぶんを卑ひ〇絶窮せつきゆう極めて困窮こんきゆうし〇受け候うけこう承引じやういんせ〇火事くわじ羽織はおり火事場くわじばうへ出る時に着きする羽織
 〇上覆うはほひ〇熨斗のしめ目め幕府時代ばくふじだいに禮服らいふくの下したに着きせし衣服いふくにて、〇もとの穴あな質屋しちやを指さ〇利借りせ金の〇流ながる所有しゆりやう物ものの
 事を失うふ〇佩物ゐぶつ佩刀ゐぶたうの〇雛形ひながた人ひと〇虚病きよびやううらや〇その料筆工りやうひつこう〇漆ぬりのごとくしやくぬりのごとく衣服いふくの汚けれ〇内會宅うちくわい自

にする歌 ○屋代を云ふ ○塙 檢校を ○さき にりて也 ○合力金也 ○屋敷入口 仕官の意 ○首くろろふ
 の會なり ○誰にて渡り候ぞ 主婦の言葉なり、渡り候ぞ ○修行者 諸國巡歴のもの ○ごもか
 と思ふはいかに 死なふと思ふが、どうか、にて即ち ○ぢれたさ 焦慮 ○大行 大なる事行を ○細瑾 許し
 す ○あふ、あふ 嗟嘆なり

鉢の木

謡曲文

○笑止や 嗟嘆の ○誰にて渡り候ぞ 主婦の言葉なり、渡り候ぞ ○修行者 諸國巡歴のもの ○ごもか
 くもにて 候 合次第の意 ○あら、おもひよらずや 主の言葉にて佐野源左衛門 ○さん候 然様で、あ
 ○前後と 忘し 前後の道を取 ○平に是非 共 ○よき泊 良き驛 ○曲もなや 何たる事か、
 婦の ○前世の 戒 飛行の戒を守らず、又行の悪しき故なりと説けるを云ふ ○拙き 悪し ○かようの 人の
 修行者 ○値偶を云ふ ○後の世の 便とも 現世の行ひは、來世の ○何とて 以前には 承り候はぬ
 ぞどうして先に修業者の居 ○なうなう、 旅人 主人源右衛門の旅僧 ○聞えぬげ 聞えぬら ○佐野 大和の
 ○一樹の 蔭の 宿も 一樹の蔭に立寄りて雨を凌ぐ人々も他生とて、前世の因縁に由ると佛説に ○この世な
 らぬ契なり この現世、計りてなま、 ○それは 雨の 木蔭 樹下の雨やどりを云ふなるが、これは雪を凌ぐ
 深き契りなるを云ふ

めと云ふを云 ○軒ふり 軒が古び、壞れたると ○夢より 霜や 結ぶらむ 寒さに霜の結ぶと、夢
 ひ起す爲なり ○軒ふり 雪の降るとを云ひかく ○夢より 霜や 結ぶらむ 寒さに霜の結ぶと、夢

は 春のけしき

具原篤信氏文

○一夜の ほごに 一夜の ○あらたまの 年の枕言葉也、曉を ○心づ かに や 俗の氣のせい ○陸月 月
 ○ことたつとて 事々の新しく ○春 盤野菜などを載せ人に送り又 ○かはらけ 土器 ○おほみき 酒
 つとめて 朝早 ○時は今四つの 始なれば 時候は、今まさに ○引きかへ 昨日に ○こち風 ○けさや
 か 氣亮 ○はだれ也 ○消息り ○物わかきこる 鶯の聲の、わ ○耳とまり 氣の、 ○こはしく 戀し
 これを 始として これらの面白さ ○いやめづらしく 愈々めづ ○なづさはれぬ なづさは、泥 ○ささ
 らぎ月 ○こころづきて 心意の引き立つ ○あはれむべし 面白 ○春はあけぼの と 言の言葉也 ○う
 べ 尤 ○やぶじら の意に云へり、しは、助字也 ○わかねば分た ○なごやか 意和 ○夕つ けて 夕を告げ
 陽炎 遊絲をよめり 柳御經 ○莊周也 ○老杜 杜牧 ○落花遊絲白日 靜 ちる花の靜に、絲ゆふの、長閑な
 る、何れも 春の日の物 ○常には 夏秋冬には也 春を ○さえがて 消え難 ○花に心はなけれども 花は無情
 靜なる事よ、との意 ○除きて常にはの意 ○さえがて 消え難 ○花に心はなけれども 花は無情
 ○えならぬ 云ふにも云 ○異花 花 ○けおされぬ 氣落さる ○後の おもひにせむとにや 花の散り失

ひ出に爲ん ○情ふかし 此歌の情は殊に感哀ふかき也 ○したく 俗のしとににて、充分 ○うしろめたし 不安 ○おもふごち 仲の良き友人 ○かひつらね 連立 ○あくがれ 遊行 ○行樂也 ○芳草 香のよき草 ○杜が 杜が牧之 ○陳希夷 詩人の ○一般 春景色 ○ゆふばえ 照 ○月にゑひて 月を見て酒を宴する也 ○惜花 春早起空しく過ぎ行かん事を惜み ○愛月 夜寝 遅月を賞玩して夜の更 ○めで愛 ○あたらし 可 ○むなしく 不すて朝早く起る也 ○野火焼不盡 春風吹後生野火にて山の草などを焼き拂へども全く焼き盡さるものにあらて空しく伏す也 ○彌生 月 ○めかれせず 目枯れは人目の枯れ果てず、淋しきことなし ○ことらづら づらの意也 ○心みじかく 氣ぜは 落花寂々 静かなる状也 ○青雲 還一夢 青雲の志も一時の夢と同じの意 ○樽酒餘春を樂みて 殘りの春をたのしむ也 ○いとえんなり 最と麗 ○おもかげさらぬ 春の面影の去 ○かたはらにならぶ 花なれば 傍に競ひ咲く ○興あるさま 面白味ある様子也

は 花を詠める長歌

海野幸典氏作

○梓弓 梓弓はるる云 ○やよひて 三月を云ふ ○なべて 押な ○あはれを 感哀の深く ○雲と見るまで 咲出づる ○雪と見るまで 雪と見まかふ ○ほごに 間 ○いかで身を分くる どうかして此身體を ○由も形容也

がな 事が出来まいか、
分けたしの意 ○山邊ゆき 云々は山邊にも行き野邊にも行きける意也

は 花のさだめ

本居宣長氏文

○花はさくら 花の中に最もよき ○櫻は山櫻の 云々櫻の内にては又山櫻の葉 ○しげく 多く ○たぐふ へきくらし ○こよなく 無此 ○おくれたり 劣り ○またく 全 ○はえて 榮え ○更なり 及ばず ○夕ばへも 夕照に、うつりた ○ひらけさしたる 開けか ○ねびれ 寝ぼけの意と略にて、 ○げに 有りて世の中は世の中にあ ○春ごとに 思もしらるゝか 春に成る度に思ひ ○しな おくれ 品格の劣 ○物にさして 花瓶など ○梢ながら 立木の意也 ○ひなび 田舎 ○とりん ぬい ○よきほど 少し ○したく 山仰 ○しななく 品格 ○かいたう 海 ○いまやうの 世の人 ○こころ さらめきたる 様なれど 更殊に人と變りたる風を ○ふるきもの 書物 ○心の なしにや 心の爲す ○ひが ころ 僻心する様ではあれど也

に の 部

に 新田氏の真心

久米幹文氏文

○新田左中將義貞 ○契らざりし 約束もせ ○ゐて 引つ ○中將義貞 ○除かばや 殺そうと ○たしな

める勢の、く〇さすがに然様はい〇よごしあ〇たばかり計のたま〇宣給ひのり玉ひ〇日枝の大おは神
 近江の國〇臣がすぐせ拙つたくて私が宿世の因縁〇辛かふじて漸かくに〇まめくしきなる忠實〇ほごく
 殆お〇願事ねごと願〇足羽川あしは前まへ〇右京亮うきやうのすけ〇さすらひ流なが〇さきはへ幸にて冥〇公こう家廉けい〇幽契ゆうけい神のやく
 道みち理也〇かなはばざらんかなはばぬ事は
 自然也

仁和寺の法師

吉田兼好氏文

〇なごり名殘を惜む意に〇足あし鼎なべ食器なり〇かづきか〇つまる固くして〇舞まひ出でたるに踏
 出でた也〇かなでて踊り〇事ことさめて酒宴の座のしら〇闕かけて傷つ〇打ちわらんとすれど〇す
 へきやうなく致し方〇くすこのかり醫師の〇道みちすがら途ち中〇さこそさ〇異ことやう奇妙なる〇
 くどもり聲のこ〇傳つたへたる教をもなし治療の法も傳〇枕まくらかみ枕邊〇きくらむとも聞こゆる〇か
 かるほごに斯くあ〇命いのちばかり命だけは〇なごか生いきざらむ生さずあらむ、にて命の無〇たご力ちからをた
 て〇引ひき給たまへ力に任せて〇しへ菓の〇かねを隔へて鍋の鐵の隔〇かけうけて鉄け穿けにて、かけ
 まうけて命を拾ふての意也

新田義貞北走

太平記文

〇めし具ぐし引ひき〇謂いはれ事わ〇超てう涯がい分ぶんに過き〇刻とき時とき〇氏族しぞくを離はなれ一門いっもんの關かん係けい、よ〇傾けい廢はいんかたむか
 也〇鎮ちん衛ゑいまもり〇かねても前以〇遠えん聞もんに遠たつせば人に、もれ〇成せい敗はいとして仕置しちのま〇易からずかは
 也〇夷いども軍兵ぐんべい〇愛あい禪ぜんの儀ぎ位ゐを新帝しんていに讓じやうり、新帝しんていの天てん〇巳みの刻とき午前ぜん〇龍りゆう蹄てい馬ば〇例れいよりもいつも
 也〇しごまりして縮ちぢみ縮〇飼かふことなかりし馬うま飼料かうりやうを充分じゆうぶんに〇紅蓮くわんねん大紅蓮だいこうねんのくるこみ獄ごく熱ねつ地ち
 也〇打うちたるが控えた〇あひがかり相掛りにて相方よ〇宿しゆくを點じてりて〇後ご攻せうむる也

ほの部

ほ 鳳凰堂

小杉樞郎氏文

〇一いわたり一〇浸しん潤じゆんるほふ〇そのかみ昔〇古こ利せつ寺てら〇存ぞんれる〇寧なら樂らくの朝あさ〇心こころよりせ
 らるなれ心倚りせ也〇さるはうれ〇ならはし慣な〇めさげ召し〇高かう雅が優いう美び上品じゆうひん也〇したかな
 る壯大〇挽ばん回くわいひきも〇こを日本固有の意〇後房こうぼう御殿ごてん〇明めい禮れい〇繡しゆう紳しん家け也〇先せん達だつ〇ほのくす
 〇西さいの方かた〇別業べつごふ別べつ〇永承七年えいじやうの御代也〇天喜てんき後冷泉天皇ごれいせんてんかう〇建けん立りつ大だい堂だう〇安あん置ち丈じやう六りく彌み陀た

佛一囑二百口高僧一設二其供養一准二御齋會一佛莊嚴古今無雙 大なる寺を立て、高さ一丈六尺の、あみ
 其供養をなし、佛を祭りて、朝廷の御齋會にながらへたり、ちやうじや長者ちやうじやのし知る所しあづかか附つきて書物に
 の立派にして、嚴かなる事は古も今も曾て聞見したる事なし、ちやうじや長者ちやうじやのし知る所しあづかか附つきて書物に
 つき○からに故○葦根○象る○九品の淨土樂○說相○宅磨たくま名な工く上品じやうほん上生じやうせい極樂淨土に
 云○欄間らんま鴨居上と天井○嵌入れ○螺鈿具らでんぐ○やれ破○二十五の菩薩ぼさつ二十五種の佛にて、勢至、藥王、
 空藏、徳藏、寶藏、金光、金剛藏、明王、山海王、華嚴王、衆寶王、月光王、月○いとむげに最も無○す
 照王、三昧王、定自在王、大自在王、白象王、大威徳王、無邊王、觀音菩薩也
 さび戯れ也、○剝取○道の幸さち隨筆○したくか大げ○鷓尾くつがた香かを造る時の範の義形が履楨に似たるより然
 火災を防ぐを以て之を堂上に置く云へる傳説より屋上に置きしものなるたいきよくてんのかひこんやうをてをほよ
 べし、今も屋の端に水字を彫みたる瓦を置くは古昔の習俗の名残なるべし○大極殿鷓尾以ニ金銅ニ覆○金
 銅鍍金した○按ふに考ふ○偕せんじやう上う身分を忘れて○史乘しじやう史し○そごろごとつまらぬ言葉の意也

ほ 芳山の畫讚

秋山光傑氏文

○るまひ初めて 咲きりめての意にて笑 ○雪かどのみあやまたれ 殆んど雪と間違ふ程なるを云へるに
 花の雪かどのみぞあやまたれける、と詠めり ○八重たつ峰の白雪にとり重ねたる花の色 幾重も立のぼれる、峰の白雪に更
 るはしさよ、と云へるにて、よし野山八重たつ峰のし ○世に似る物なくぞ覺ゆる 世に似る者のなき程に
 らくもにかさねて見ゆる花欄哉と云へる古歌の意也 美はしく思はるる也

○家立やだち家の風也 ○幽かすかに ○紺こん青せい色也 ○袖そでさへ句くふ袖そでまでも ○ばかり程 ○問とはまほしうねたき也 ○
 艶まんなるうつく ○水底すみていの蛙かはづの聲こゑも聞きこゆらむ思おもひあり 畜ちくにてはあれでも餘りに善く描がれたる爲 ○こ
 れぞこれ ○あはれと面白 ○言葉ことばの花はな和わ ○さるをを ○君きみの御み楯たてと勇いさみ立ちて 君の御楯となり
 也、御楯は ○わび給たまへる 悲かなしみ玉たまへるを云ふ ○心こころしあらばもし心があつたなれ ○移うつり來こし代よ々の跡あと
 御味方也 時勢の移り來りし代々の事柄也

ほ 保元物語

新院の御所各門門固の事 附軍評定の事

○新院しんいん崇徳天皇 ○北殿きただの ○左府さふ長なが ○北河原きたがはら加茂川 ○大炊御門表 ○承うけたまはつて仰うやうせう ○具ぐすまじ連れて
 ○功名こうめい不覺ふかくも 功名こうめいをするにも、 ○紛まぎれぬ様やう他人たにんに、まざらば ○いかにも最もも ○子こ供ども具ぐし子息達
 也 ○件くだんの男おの也 ○大力たうりき ○矢やつぎ早はや矢やを、つがふ ○手利てきり上う ○弓手ゆんで左ひだりの ○肘かひな ○馬手めて右みぎの ○兄あに
 も所ところを置おかず 兄あににも遠慮えんりよせずして ○身みに添そへて我身わがみと ○不興ふきやうしてうして ○めのとやり ○君きみより
 も賜たまはらぬ 君きみよりも御任ごにん ○いで口語くごの、さ ○勢いきほひもつかざるに軍勢かしのみや ○香椎宮かしのみや ○神人しんじん主しゅ ○久き

壽近衛天皇 ○上郷會議の ○宰府太宰 ○忽諸重んぜ ○威 ○背三綸言一したるに、 ○鳥惡大
 人 ○狼藉亂暴也、狼は草を藉きて之を、穢 ○可今三禁進三其身一て送れとの意也 ○參洛都へ ○解官
 免職さす ○科 ○其儀ならばさやうの譯 ○行はれんずれ行はれ ○國人鎮西の ○形の如く少し計 ○
 傅子 ○八龍重代の名、源家 ○威飾りた ○大荒目の鏡曇みて威したる鏡也 ○着るまゝに着けたる ○
 尻鞆毛太刀也、虎豹などの皮毛を表にして劍の鞘にした ○體曇り ○焚贈勇士 ○ゆゑしさいさま ○吳子
 孫子支那の ○養由支那の弓 ○舉り給ふて見給ふ也 ○折角の合戦大切な ○心にくくも 候はず心
 將も居り候はず ○へろく 矢弱き矢、力 ○御赦されを蒙つて 蒙りて ○射んずる程ならば俗の、
 なら ○駕輿丁かこ ○掌を反す 極めて容 ○荒儀暴 ○富家殿卿 ○催すむかりあ ○先 蹤事ありし
 ○似も似ぬ事 似てもつ ○乗る程ならば、云々は敵が勝ちたる勢ひ

主上三條殿行幸の事 附官軍勢揃の事

○内裏御 ○分内區 ○御引直衣のほしと讀む、引直衣は、天皇の藝の御服にて冬 ○腰輿板也 ○脇立鏡の
 の名稱也 扇の脇 ○はいたりたり ○てだて段 ○入洛都人 ○床大床に ○殿下關 ○それ猶暗しもまた能

くわき ○逆鱗天皇の御 ○日頃申す所常々希望 ○昇殿に於て 疑あるべからず 乞度昇殿は御許
 冥途の思ひ出 思ひ出 ○御入興 御笑あひら

白川殿義朝夜討に寄せらるる事

○武者所士の詰所也 ○果てねば果てざる ○千度申しつるは 度々申し ○除目爲朝を喜ばしむる爲に
 ○前に驅場をのこして 前に馬を馳する程の ○東頭 東の方を首 ○判官爲 ○珍事大 ○打物鎧 ○
 蔑にする ○えせ物もの ○所詮はの意 ○紺叢濃 染模様の名也むらとは此所被 ○直垂 鎧ひたされ、
 ○月數 源氏重代 ○朽葉色 緒黄色にて落葉 ○唐綾 浮織の綾 ○威しり也 ○頭高 矢の頭を高く頭 ○重藤の
 弓 駒を、しげく ○桃花毛 ○鏡 鞍鞍の前方に銀の延 ○名のれ聞かむ 名を申せ ○さては 一家の郎等
 ござさんなれ 外人かと思ひしに矢張我等一門の家臣 ○矢面 方面也 ○内兜 内胃也木綿、布、 ○矢合 軍の
 めに矢を射て ○歩立の兵歩 ○柏原 天皇桓武 ○なりくだれり 系統の、だんく、 ○六孫王 經 ○
 入幡殿家 ○公家朝 ○張本 鞍頭人、 ○能つ引ひて 弓を充分に引 ○あはぬ 敵不十分なる敵也 ○矢
 一つ 給はらむて 矢一筋くれ ○丸根 角なき ○暫し保つて 暫く、ね ○かけず外さ ○射向けの袖 鎧の左

○矢場やば其場を去らす、○御曹子おんそうし曹子は局なり即ち部屋住の、○武則清原たけのの○弓勢ゆんせい弓のつ、○革能かほよき鎧よろひなる
 革にて造つくり○變化へんげる人、○大將たいしやう宣給のたまひけるは清盛の申さ、○さもいはれたり最もなる事を、○白星しらほしの
 兜かぶと銀製の小なるほ、○黄土器毛きつかわらけ○過すあやまる怪哉あやまなり、○かたかはやふり見みかふ、○さればどてりれに
 ○裏をばかぬうら矢が鎧の裏まで、○下人げにんべし、○同じ毛おなじけをどし皮の、○猪頸ぶくびに着つくあはむけ、○塗籠ぬりこめ籠かごを
 きて漆にて、○鹿毛かかげ茶褐、○馬を驅かけ据する馬をかけ出でて、○物その物にあらねども、つまらぬも、○五
 枚兜まいかぶと枚ある也、○彼奴きやつは引設ひきまけてぞいふらむ、○一の矢やはじめ、○白蘆毛しろあしげ
 全身白にて尾と、○金覆轉きんぷくりんの鞍くらをとりし鞍也、○かせがれる也、

へ部の部

へ平相國

平家物語文

○嫡男ちやくなん男總領の、○保元ほげん後白河天皇、○宇治うぢの左府さふ長、○先をかけたりければ先陣せんじんを爲、○けんじや
 う感賞かんじやう○平治へいぢ二條天皇、○經あがつて、○丞相じやうしやう相さう太政大臣、○兵杖へいじやうを賜つて、兵器へいぎを帯びて參内す、○れ
 んじやせんじや手車てぐるまにて、○宣言せんしを蒙りて、云々うんうんは手車てぐるまに乗り、参内さんないする事、○一人ひとりの師範しはんとし、天皇てんじやうの
 手車てぐるま也、

なり、○四海かいの儀形ぎけいの全國の人民、○其人そのひとにあらすばすなはちかけよといへり、其の職しやくに適ふべき人に
 て也、○四海かいの儀形ぎけいの全國の人民、○其人そのひとにあらすばすなはちかけよといへり、其の職しやくに適ふべき人に
 事を休めて、關官かんくわんのまゝに爲、○則ちすなは關かんの官くわん、一ひとに關かんの官くわんとも申す也、○其人そのひとならでは、其任そのにん相當きやうたうの人ひと、○君達きみたち
 若殿わかに○むすぼほれんとぞ思ひける、云々うんうんは平家の一同いどうに縁を、○ゑぼしのためやうより、鳥帽子とりぼうしの折
 也、○えもんのかきやうにいた至るまで、衣紋えもんのかきや、○六波羅ろくはらやうとだにいひてしかば、六波羅ろくはら風と
 にて、もては、○一天てん四海かい意也、○御せいごせいいばいいばい成敗、○全門ぜんもん世よざかりの程ほどは、平家へいけの一門いもんの世よに、○ゆ
 るがせに申すものな、俗の、だくさだくさに云ふものはな

へ平治の亂

荒木田麿子氏文

○一院いんの皇子みこ後白河法皇、○新院しんいん高倉院、○御はらからご弟てい御兄ごに、○時にもあはせ給はず、御不遇ごふぐよ、○題給たいたま
 はせて賜りて也、○物いひあはせ給ふにも、御物言ごものことばひにて御相ごさう談だんし玉たまふにも也、○つきなからず一通りに、○めやす
 きものに見安みやまきにて、心置こころき、○ひまなふ終始、○まつはせ、○三位さんいして三位さんいに、○本意ほんいかなへる
 さまにて、本望ほんぼうを、とげし、○つかさをかへし奉り、辭職じしやくする、○かしらをろして髪を剃、○むくつ
 けうけうきたなげに、むさぼるの意いに云、○思おもしかまふる思おも召めはかる也、○まが、しき善ぜんからぬ、○こと方かたに
 へり又おろしき意いにも云、○思おもしかまふる思おも召めはかる也、○まが、しき善ぜんからぬ、○こと方かたに

渡しまつらむとて 異なる方にて、遠國へ御 〇公に朝廷 〇皇子と聞えむは、かたじけなしとて 皇子
 上るの恐 〇とらせ給ふ除かせ 〇はやう知しめして 早くも其由を御 〇あらぬさまに 然あらぬ様
 多しとて也 〇はやく給ふ除かせ 〇はやう知しめして 承知になりて 〇あらぬさまに 然あらぬ様
 〇やつし粉し 〇くまぐくすみ 〇あさりす也 〇すべなくて 爲ん術な 〇信連 〇又山、三井寺
 山は比叡山延暦寺 〇大衆僧徒 〇御方人也 〇山の座主叡山の 〇せいし聞ゆべく仰せごごあり
 三井寺は園城寺也 〇二心なきと云へる誓紙を聞へ上げよと 〇うしろめたくや心配 〇内には於ては 〇八條なる入道の家
 御命令あり也聞ゆべきは奉れの意 〇西八條なる太政 〇ころらの兵の兵 〇かたみに互 〇御馬に奉りせ奉り也 〇いみじき事大變な 〇あ
 入道清盛の家也 〇うたてかりしはや 〇公がたの武士の武士 〇加階位階を進め
 へなう 無敢の意 〇うたてかりしはや 〇公がたの武士の武士 〇加階位階を進め

平家物語

月見の事

〇新都福 〇上棟むね 〇遷幸清盛の邸 〇名所の月石須磨明 〇忍び思ひ 〇白浦紀 〇吹上、和歌の浦
 〇住吉、難波共 〇高砂尾上 〇舊き都平安 〇大宮の御事 〇隨身也 〇惣門外廓の 〇蓬
 生の露に置く露也 〇うちはろふ人尋ぬる 〇咎むれば聞た 〇大將殿實定 〇さくられて 〇

夢かや現か 〇これへこれへ 〇優婆塞 〇夜もすがら 〇猶
 足らずや 〇撥琵琶の 〇思召し知られる 〇待宵の女房 〇何れかあはれまさ
 〇何れが感情がふか 〇まつよひ 〇かへるあした 〇待宵の女房 〇何れかあはれまさ
 〇鳥の聲も、つらけれど又まつ宵の鐘の聲に 〇待宵とは召されける 〇小夜ふ故に眞夜
 〇中義と云へり或はさ 〇浅茅が原 〇くまきも 〇お返し返 〇お返し返

紅葉の事

〇人の従ひ 奉る事 〇君高倉 〇清濁 〇むげに 〇性生質 〇承安 〇高倉天皇
 〇北の陣 〇野分 〇殿守の伴のみやつて 〇朝きよめす 〇すさまじき 〇縫
 〇殿陣 〇朔平門の所の陣にて 〇たべける 〇玄てけれ 〇奉行 〇蔵人
 〇俗にくらうづ、とも云ふ蔵人の頭 〇行幸より先に 〇志かじかこれ 〇あなあさ

まじりては、淺き意、まじりては、助語也、れぞ ○さしもの意、然も也 ○執して大事に思召さるるを
 云 ○逆鱗怒 ○預からむす 預るかも知 ○思はじ事 苦勞 ○案じ心配考 ○いとどしく 最と最と ○おご
 ぞ御 ○なにと奏す 旨もなし 何と申し上げてよ ○天機御氣 ○さればうれな ○それら共 ○誰
 か教へけるぞや 誰が古詩の心を教 ○やさしう 優美 ○勅勘 ○安元の高倉天皇 ○方 遠忌を專
 にせし時代の風にして太白神を避くると云ひ又天一神 ○警人の夜廻り ○曉を唱ふる 聲を知らずる聲也 ○つ
 やつや 俗の、ろ ○御殿 ○聞もつけられず 耳にも入 ○上臥 禁中の宿 ○殿上人 五位以上 ○あやし
 の女童 女童也 ○主の女房 女房也 ○はかばかしく 立宿らせ給ふべき親しき御方もま
 しまさず 計量の事に云へるが、元にてきはまはしき事にも云へり ○具してつれ ○むざん 憫 ○かたじ
 けなきもつた ○かたましき者 義者也 悪し ○建禮門院 徳子と申 ○その方 建禮門院の ○御衣や候ふ
 御服はあり ○先の 奪はれ ○さる 目の 嫌な ○上日 官人の ○局 ○寶算 命

どの部

東關紀行の一節

東關紀行文

○うち過ぐるほどに 通行く間に也 ○駒引わたる 望月の頃も 八月十五日は駒迎へとて御牧より京へ
 へ過るなり ○ほのかなり 物のたしかな ○木綿附鳥 陰陽家の祭儀に鶏に木綿をつけて四隅に放つと云へ
 ○遊子人 ○幽谷 奥深 ○わらやの床を結び 藁葺の家 ○心をすまじ け居る也 ○さだかにも かに
 も ○見わかす 見分ける事 ○都うつりありて 遷都也 ○曙の空 夜明け方 ○うち渡すほどに 渡る間
 ちほ添 ○よめりけむ 詠せし歌と ○よそへつゝ なづらへ ○そころせき 一面に涙の袖を ○けふやさ
 は今日や然 ○松のむら立 松林のむらが ○洗滌 水のひろびろ ○かつみ 浅香の沼に生ふるあやめに似たる
 ○をしかももの 鷺鷥、鴨、 ○あれのみにさる だんくど 荒 ○なくの翁 七叟を云へり 安和の尙齒 ○おく
 さまに 奥の方の ○かくやありけん 斯様にてあつ ○かたじきわびぬ 袖を偏敷きて旅宿のう
 と 登仙法師 十訓抄文
 ○食ひおほせつれば 食ひ果て ○くひのきて 食ひ除きて也 ○げにも 實に ○坊も 何も 寺も 何も ○生
 ひたりける けり也 ○目すまじ 張る意 ○哀をうかへたるに 不憫と思ひ ○いかゞしつらん 何と
 か故 ○うま〜と 心定ら ○あさましく 見れども 俗語の、をぞまじき事 ○やうあらむ 定め
 か也

か深き事ゆへ○上らんずらむと見る程に上るであらふと○戚屬也○ごかくして介抱して也○あるならん○上らんずらむと見る程に見て居るに也○いふばかりなくて云ひ甲斐なき○いみじく甚だ○えせす爲し得○ゆるしく優々し○かごまり居たり俗の、すくみて居ると云へる意也

殿守の伴の御奴

○公事によりて朝廷の御所に○陣の座に節會神事など諸の公事○上達部月卿とも稱す○参りあひて来て○さぶらははれけるに侍り居ら○南殿を云ふ○神さびて年ふりた○ねならぬがふにも云へず○さしおほひて差し出でて庭に○ひまなくすまま○大臣○えもいはす云ふにも○いみじく甚し○いと最○参られよかじ御出でなき○見せばや見せた○前をおふ聲先拂の聲にて○この前はして云へる也○たが参らるゝぞ誰が来りて着○いみじく興ある事かな大に面白味意の○座に居るやおそきと座に着かるゝを遅しと待○さらばおそくこそ侍れさらばは、口語の、り、さても御参内の通○和歌にきはめたる人におはす和歌の道を極めたる人○はか／＼しくもなき事説と云へる也なり○あらむよりは打ち出でずして、○いみじくわろかるべし甚しく悪しきからむ事を無き言葉也

却て申さぬが好しからん也○やんごとなき人の也○すさまじくは荒涼也、歌をよまずして坐上の興の荒涼しくして止むも也○便なかるべしと都合あり○かくなむ斯様○えせじぬ出来○おとりたらんに本の歌より劣りて○さりとしてそれか○まさらむ事は立優る○あるべき事にもあらず出来る事に○世のおぼねも世間の○花やかにてなむ盛なるも名望も

讀書の樂

中島廣足氏文

讀法

山崎美成氏文

○文見る○道々しき其道々の立派なる書物也○かりそめの筆すさみほんのかりうめの筆なぐさみに書○行くまゝには行くう○かにかくいろ○よしなごごごつまら○散ばひなる也○はた又○心やれる業氣を晴○さはなれど多くあ○あらまほしき有た○鈴屋の翁本居○さる事にこそ道理至極

○言靈のさきはふ國言靈は言葉に一々靈驗ある事にて、萬葉集に、志賀島のやまどの國は事靈のたすく月をこり見ゆ、なごあり、さ○しもも、と云ふ迄な○相尙へる○かふるは斯くあ○足はぬ足ら○清家は清原家也清原家○羅山府の儒家○惺窩先生藤原惺窩氏○公家朝○鹵菴ざり

ちの部

ち 治承の辻風

鴨長明氏文

○治承の御代 ○卯月四 ○辻風 ○わたり也 ○いかめしくはげ ○儘に ○こもれる ○さながら ○桁 ○はなちて放し ○敷をつくして有る ○檜皮 ○ごよむ ○業風の減却する時、火水災の上に毘嵐と云ふ大風吹きて世 ○なりとも ○かばかりにはこれほどにはあ ○かたはづける 不具に ○ひつじさる方 西南 ○さるべき何か ○さとし 徴 ○なごぞ ころ也

ち 中納言行平

尾崎雅嘉氏文

○年糧の食料 ○課せられわりつ ○庇羅 ○値嘉 ○曠く ○聚斂 租税を、強て取り上るに ○鍛錬 ○琢磨 ○元慶の御代也

をの部

を 温泉に行く人を送る

加藤千蔭氏文

○こたみ 今 ○いで湯 湯に出づる湯 ○道すがら 道中 ○さこそあはれ 深からむことさぞ面白味の深き事

わの部

わ 渡邊華山高野長英の傳記の後に

藤田茂吉氏文

○わたり あり ○もなかの月の月中 ○めで 愛で ○思ふにも 思ふに付 ○さをしか 古事記には眞男鹿には牡鹿を訓めり、さ、 ○妻とひがね 妻を戀ふに ○身にこむ頂ぞ心せよ 君である故に、注意して身を自愛されよと云へる也

わ 和歌に感興の益あり

室直清氏文

○餘情の興味也 ○一唱三嘆 甚しく感心する事にて、一讀

○もろ千鳥さへつる春はものことに
あらたまれども我れそふりゆく

もろちどりとは、百千鳥にて種々の鳥なり、それが樹の枝などに轉づり遊ぶ春は、事々物々春めき新たにしくなれども我のみは、年を一つ加へて老を重ねる事かな、とて景物の新たにしく成れるにつきて身の年経りに行くを嘆する也老人述懐の感哀思ふべし、よみ人しらすと見ゆ

○老人懷舊 昔を思ひ出す

○春の夜のやみはあやなし梅のはな

色こそ見ね香やはかくる

闇は、物事目に見えず、分ちがたき物と思ひしに春の夜の闇は、闇と云へる甲斐のなき也、そは、梅の花の、色のみは、見えぬとも香は、さやかに薫り渡る事よ、と梅の香の高く深きにつきて、闇も香は、かくし難きものかなと云へる也、かひなしは詮なしの意也香やはかくるとは、香はかくるや、隠れはせぬと云へる也

○風ふけはおきつ白波たつた山

夜半にや君かひひとり越ゆるむ

風がふけば其風につきて白波の立つと云へるを所の名の龍田山に云ひかけた也且つ白波は夜盜を云へれば、斯かる風すさまじき夜は白波も途中に出でる人を、掠むる事のありとの意を含めり、然るを斯く恐ろしき夜半に君は

しかも獨り立田山を越へ行き玉ふならむ、さても覺束なき事かなと、良人の身の上を思ひ煩ひて詠める歌なり

○忘れては夢かこそ思ふおもひきや

ゆき踏み分けて君を見むとは

久しく伺候もせざりし程に昔の事柄は忘れ果て夢かと思ふ位なり、今日此雪を踏分けて君を訪ひ参らするのには實に意外なりとの意なり、おもひきやは、思ひがけざりけりの意也

○故舊 昔の友 ○翁 直清氏自 ○鎌倉三代 鎌倉の三代目 ○武士 矢なみつくろふ 箭列修繕 ○籠手 弓籠手也 駝 ○たばこ 飛散 ○あはれ 感哀 ○さながら 其のを訓めり

○久かたの光のさけき春の日に

しつこくろなく花のちるらむ

久かたは日刺方にて空の義也、斯く春の天空のうらうらと光のさかなる日に、花は如何なれば、いりかはしげにも氣短かく散る事であらふ、と花に對ひて疑ひたる意也しつこくろは、靜心にて、こころは、濁りてよむべし、しつこは其かみの一の詞ならむと云へり、然もあはれし即ち無心靜心の意也紀友則の歌也

○朝日影にはへるやまのさくら花

つれなく消えぬ雪かこそ見る

朝日の影のてり匂へるあゝの山に咲き出でたる櫻花は、見るから雪と思はる計りなり、雪は、日の光にてらされて消え失すべきに、さても強情に消え残れる雪よと見るとの意也つれなくは無二面目一義、らめの反り也又強顔をも訓す、源氏に、つれなきがつらし、なご見ゆ俗の、情の強き意ならむ

○うちしめりあやめそかほる郭公

鳴くやさつきの雨のゆふくれ

うちしめりは五月雨の爲に軒に葺ける菅蒲のしめりてかほれるを云ふその、あやめの葺る頃に郭公の一聲鳴きて過ぎ行きしが物思ひ居る身には、限りなき感情を起さしめし也時も時、五月雨のふる夕くれつ方なりと也、あやめを、葺く事は漢土の習俗にて彼の唐風模倣の甚しかりし頃七夕祭などと共に入しれ来る風ならむ慈溪縣志に端午懸菅蒲艾虎一如楚俗と見ゆ

○庭の面はまたかわかぬに夕立の

そらさりけなくすめる月かな

庭の面は夕立の雨の名残の未だ乾きもやらぬに大空は、雨などの氣はひもなく月の澄み渡り居ると云へる也、まだは未也、さりげは、然あり氣也

○夕されは門田の稻葉音つれて

あしのまろやに秋風そふく

夕されは、もと時刻の移る方より出でたる言葉にて夕去者也即ち夕暮方頃と云はんと同じく其頃ほひを、さして云へる也、さて夕方頃になれば門前の田の稻葉を音つれて、あしのまろやに秋風の吹き立つと也、あしのまろやは

葦の丸屋にて、凡てを葦のみで作したる小屋體のものなり、音づれば、音につれての義なるべし

○秋風にななひく雲のたえまより

もれ出つる月の影のすやけさ

秋風の爲に吹きたゞよはされ、なびきて、されくになれる雲の絶間よりして、漏れ出つる月の影のさやかなる事よと、秋の夜ふけ過ぎて後の月をめでてよめる也直覺の感を述べたる所に無限の情趣ありて、此歌を吟するに目のあたりかゝる夜に會ひたらむ心地する也

○津の國の難波の春は夢なれや

あしのかれ葉に風わたるなり

攝津の國の難波の春の面白かりしも思へば夢でありしやらん今打ち見たる所は、つのがみ渡りて勢ひよかりし葦も葉未かれ果て、其枯葉に秋風さへ吹き立ちて見るもの凡て荒涼なる様なりと云ひて今のさびしく物すさまじき景色を見て、春の和暢なりしを夢かと疑ひて詠める也

○駒こめて袖うちらはらふかけもなし

さのゝわたりの雪のゆふくれ

行き暮れて雪になやめる状也大和の國佐野の邊は一面の廣野にて今斯く雪に逢ひても、のる駒を止めて袖を打拂ふ木蔭もなし、加之も時は、夕くれつ方にてと云へる也、こは實は雪に逢ひて困窮せるにはあらずして、雪の景色の

善きを云へる也

○不盡つぎせ ○襟 懐心 ○塵想し心也 ○けぬべし 消るであらふ ○わが佛法己の佛道 ○さもありなん ても尤で ○たより便利 ○をかしく面白そ ○けしき 覺えてはれて 景色の思 ○あはれ 感情

わ 我國の美術

佐野常民氏文

○御國 我日本國を云ふ ○けはひ 有 ○あえて 日本紀に背字を、よめ ○さるが 上に其 ○あがれる 御代昔也 ○氏人 其家筋 ○いひしらぬ 言ふべき言 ○成整ひて ○政 まをす 世 政事をす ○工 ○一際一だ ○製れる ○光彩にこあればし 光にてあれば也に

かの部

か 笠置山

太平記文

○類火 類焼の ○宮々 皇族殿下 ○卿相 雲 客人也 ○歩 蹴かちは ○扶け ○闇く ○関 ○十善の天子 十善の徳を具 ○田夫野人 賤民 ○そこ とも知らず 何所を、そこ ○寒草 霜にあ ○茵 御敷 ○羅穀の御袖をほしあへず 御袖の露をほし得給はず ○そこ かうして 漸くに ○足たゆみ 疲れ ○逃げねべ

心地せざりければ 逃げられよう ○君臣 後醍醐天皇、藤 ○兄弟 藤房、季 ○うつゝの 夢 夢は睡中の想像也、即ちうつゝの夢とは現にありなが ○下露 露也 ○さしてゆく 目的として、ゆれと、指して行く也

○あめがした 天下と雨の下と ○かくれが 身を隠し ○なほそでぬらす 頼みに思ふて立寄りしに其木を、ぬら ○案内者 地理をよく知 ○皇 居 御隠れ所を申 ○心あるもの 人情を知 ○天恩 御恩 ○私の榮花を期せよ 今、陛下を保護し奉れば後には寵恩を蒙り榮 ○所存 心中、又 ○網代 あむしろ ○あやこげ 賤し ○張輿 海人 張輿に云ふ、張輿僧俗一向内々 ○その 體りの御あ ○段湯 湯王 ○越王 勾踐

か 鎌倉時代に於ける余の感想

落合直文氏文

○野史 稗史 正史に非ざる ○印象を 残したりし 記憶の止れ ○眞假 眞まこと、及び ○そこばくの 變化いらかの、 ○後ぞひ 妻 ○女性 婦人と、云 ○星月夜 顯晦 鎌倉幕府の事を記す ○それを 強めしは 更に強く感ぜ ○筆の あや 文章の面 ○桐一葉 書 ○完了 へ上る ○野乘 野史 ○いつか、よそになり て知らぬ間に、目的の牧の方 ○世態 有様 ○衛倫 人を偏にあるまじき事也、即ち親 ○罪惡史 鎌倉三代の者等が忠を働かしを書せ ○徹る ○悲劇 悲慘なる仕打、ふるまひを云ふ、 ○右大將 頼朝 ○因果 應報 因は元、果は惡の罪惡の記録也

因を作りしものは、必ず惡果を受く、之を應報と云ふ。○鎌倉三代頼朝、實朝、賴朝、承久の大亂が朝家に凡て因の善惡に由りて種々の應報あるを云ふなり。○史眼歴史を讀む。○隱微を讀む。極めて細かくして、一寸大不忠せし時の亂。○紙背に徹る。文字に書てある事の外、までも見ぬく事を云ふ。○隱微を讀む。現はれざる程の事までも解するを。○何物か誰かと。○造化の大家作家。造化即ち自然を大なる。○否み得べき。然らず、と云ふ。○理脈みち。○彰乎。あき。○掌紋。手の。○戰か。しめ。○肅然。正し。○襟を正さしむ。容を正す事にて、慎の。○最暗黒。理非も、分らぬ。○勤王の觀察點。勤王が、觀察の主點たるを云ふ。○心理的方面。心理學の方。過去中。過ぎし時。○萌し。綿々。絶えざる。○業因。業とは人が現世にて爲し置く事業、因は後來種々善惡の果を過去中。代の中。○十頓挫。くち。○蓋し。推し。○雙臣。氣に入。○屍の算。亂し。多死して、屍の狼籍たる。○暗示。それと無。○十頓挫。くち。○蓋し。推し。○雙臣。氣に入。○屍の算。亂し。多死して、屍の狼籍たる。○二代將軍。實朝。○劈頭。はじめ也、實朝が。○太悲劇。儀式の場にて慘殺。○無慚の口繪。むごたらしき、出來口繪とは書物の發端に挿ま。○展開。來る。始まつ。○活修羅。場。佛説に合戰をのみ事とする世界を修羅道と云れし繪なれば、然か云ふ。○尼御臺所。政子。○依怙偏執。片手打のほか。○陰險。表面は正しき様を作りて、陰にて。○禪室。入道したる。○浴室の最後。頼家を伊豆の修禪寺に幽し、欺。○自致自招。俗に云ふ、自業自得にて自

○單純なる應報。何も込み入りし事なき極め。○心性史。心理を基礎としたる心理。○關聯關係。○蹴鞠。りけま。○沈酒。おぼり。○性の失。生れつき。○彼れが頼家を。○さもあれ。鬼も角。○鬪諍。あら。○慘劇。むごた出来。○慘絶。悲惨の。○冤死。無實の罪に。○無慚の最後。不憚なる。○奸計。わるだ。○老耄。ぼれ。○退隱。隠。へなき。○敢無きにて、俗。○泉。親衡。○軋轢。仲の。○血雨。劍電。血の雨、双の、いな。○族滅。一族、皆滅。○前者和田。○後者。北條を。○深意。ありげなる。○神速。すみ。○點綴。つなぐ。○准悲劇。悲劇に、な。○惡禪師。僧。○あさはかなる。暴舉。深き考のなき。○動機。はづみ、也、これ敷盛を殺せしより、急に浮。○文覺。上人。遠藤盛達、剃。○頓悟。急に發。○當期。の史。の時代。○倫常。五倫五常。○地下。平民を指を屈するを云ふ。○革命史。命と云ふ、その歴史也。○當期。の史。の時代。○倫常。五倫五常。○地下。平民を數へ立つるの意也。○執着。心の、その事がらにとりつきて、。○屠り。殺す。○虐げ。無道なる所。○祇園精舎。名鐘ありて、人も、つかざるに、自然に鳴るうの聲の裡に。○悲哀。譚。のがたり。○六道。地獄に通ふ道にして、餓飢、畜生、。○輪廻。彼の六道を業因に、よりにて死。○長明。後鳥羽上皇の御代に和歌の才學に由て和歌所の寄人にあげられし人也。○方丈記。長明の記録にして、方丈の草庵を。○苦叫。さげ。○山家集。に、ひとり世を避け。集は

西行の家集の名なり、西行は、元、北面の士なりしが世を
 憤り専ら和歌を詠じて體を山家集に、もらせしを云ふ也 ○愚管抄 物の道理を、この書中に説けり ○げ
 にとこそ思はる 如何にも、尤千萬に思はるゝ也、世間が、暗黒なるが爲に多くの名士 ○擧げて凡て ○
 濃淡 濃淡こそ、 ○平然 平然也 ○空絶 空絶也 ○蔽ひ ○當然 當然たり ○何等の感慨をも寄せざるか何の感
 付かぬか也 ○膚淺 膚淺はか

笠置城の防戦

太平記文

○一片 一片一ひ ○萬尋の青岩道を遮ぎる 萬尺もある大なる、岩が道を、ふさぎ居ると云へるにて、要害の
 ○九十九折道の曲折 城中なりを静めで 城内の兵士静まり ○寄手 攻め寄す ○堀崖 一の木戸城
 第一 ○一息 ○さつとて眼を、すへ ○よろうたる 固めたる ○矢たはね 矢の束ね ○決然 決然の體 ○支へ
 たり 差控へ ○重範氏 ○僻目 見うこない ○十善の君 十善の徳を備へ ○御向ひ 立ち對か ○御儲
 けの意 ○大和鍛冶 刀工の ○鏃 ○三人張 三人掛りにて、強弓を云ふ也 ○十二束三つ 伏たる程の長さ矢也
 ○篋矢の 旂檀 篋の右肩より胸にかける板 ○篋深 矢の篋を深か ○究竟 ○起きもなほらで 起き上る事
 て ○矢面 矢の飛び來 ○楯のはづれ 楯の ○御弓勢 御弓の ○程はなかりけり程でも ○此を遊ばし

候へ 此を射て御 ○物の具の實の程試み候はん 鎧の固さを、た ○あざむき 嘲み、の ○腹巻 動肚に
 一種也 ○鎖 鎧衣 ○たふくらむ 打たさきて見す ○眞向也 ○鎧の高紐 鎧の相引の緒也、古昔胃を脱
 古への鎧は背割なる故に引合せの高紐背にあ ○沓巻 矢足を ○搦手 城の裏 ○追手 表門 ○坤軸 地心 ○本性
 房奈良の ○律僧 眞言宗の僧也 ○尻居 俗の尻餅 ○なだれ 勢ひを云ふ ○いやが 上 上 木津川 大和に ○遠
 攻 遠くより攻むる也

か 夏夜人來

安部井盤根氏文

○あはれ 感哀 ○おぼしき 勾欄、手すり ○くれま ちてはしむをすれば 夕暮を待ちて ○門田 門前 ○しば
 なくし ばし 鳴く也 ○さも こそ 然もこうあ ○空に 量りて 想像し

か 川中島戦圖に題す

堀秀成氏文

○小夜 夜也又さば發語也とも云ふ ○赤星の影 曉の明 ○かくろひ 隠る ○五百霧 深く立ちこ ○川面
 ○かひ人の軍勢也 ○おちゐて 居て ○打薫る ○いかにと思ふ程もあらず 何であるかと思 ○越
 の軍 越後勢にて ○やくもみち葉のみだれをむるに 稍、もみちばのは、軍勢の様 ○たゞ 中 眞直中に

そごろになんど ○ろうさい 長歌などと同 〇そごろうたの端歌など俗 〇手も問ごぼにて 手の細か
 〇かしましからず 騒しく 〇筑紫琴十三絃琴也 〇つれて 調につ 〇顔をそむす思ふ也 〇聞くこと
 にもせざりし 俗の聞こふ 〇享保の御代也 〇うればしき 憂ひを含み 〇しるし効 〇寒暑の如く
 にかはれるは 寒暑の、かはる如
 にかはれるは 寒暑の、かはる如

よの部

よ 芳野の行宮 正統記文

〇凶徒 惡人 〇語らひて 即ち語を組んで也 〇歸參 参り 〇山門 寺の事を山門と云ふ 〇進まざりき
 不利にして進 〇北國 前 〇行啓 〇左衛門督 〇さるべき兵 相當に立派なる武士の意 〇正成といひし
 軍せざる也 〇一 正成の一族也、いひしが一族は 〇召し具して 御召し連 〇渡らせ 給ひ 住居遊ばさる也 〇在
 が一族 正成と云ひしもの、一族也 〇召し具して 御召し連 〇渡らせ 給ひ 住居遊ばさる也 〇在
 位の儀 天位にましま 〇内侍所 〇奇特 不思議の意 〇御志 勤王の 〇あまた聞えし 澤山あるとか
 〇又の年也 〇海道 東海 〇あまた度 〇勝負 勝ち 〇こゝにて、きはまりにき 此所にて全く
 忠孝と云ふ大道も、も 〇苦の下にもうづもれぬ物とては 肉體は全く地下に埋もれ朽ち果つれ 〇徒
 はや失せ果てしなり也

〇名をのみぞ 名ばかり 〇心うき世 心憂たき世の中 〇ありしかな 有つた事 〇官軍なほ心を勵まし それで
 だ力を落さず 〇男 山城 〇社壇 神の 〇上りあへず 上京する事 〇させること 〇空しくさ
 へなりぬ 空しくなりぬは、死亡也、云は、させる事のなかりし 〇いふばかりなし 無し 〇さてし
 も 〇陸奥の介 〇かの節度 かの顯信朝臣 〇儲君 天皇太子也 〇かく定り玉ひぬ
 斯様に諸君に 〇伊勢に越えさせ給ひて 伊勢の國に立越させ給ひて、 〇啓して 申上げ、奏上 〇よそ
 定り玉ふも也 〇伊勢に越えさせ給ひて 伊勢の國に立越させ給ひて、 〇啓して 申上げ、奏上 〇よそ
 用意にて 〇纜 〇おごろおごろこく 驚くの意にて、今云ふ 〇漂はれしに 漂泊也、風波の爲に伊豆の
 〇御子の御船親王の御座船 〇御船にさぶらひけり 親王の御船に伺 〇この二つの船親王の御船と、常陸
 船と 〇末の世には、めづらかなるためしにぞあるべき 末世には順逆も亂れ、神の加護もなきかと
 に歸りつき玉ひ、一は志す常陸の國に着き玉ひけるは、これ、 〇例なき鄙の御住居 儲君の邸に住はせ玉ひは、
 全く皇祖天神の御冥助にて末世には珍らしき奇瑞なり也 〇思ひあはされて 風波の爲に伊勢
 〇いかゞと覺えしに 思ふて居たるに 〇御目の前にて 前にて也 〇思ひあはされて 風波の爲に伊勢
 ひし事を思ひ 〇こはくなり 強くなりにて 〇舊都 京都也世に云 〇國々も思ひ思ひの年號なりき
 合されて也 〇こはくなり 強くなりにて 〇舊都 京都也世に云 〇國々も思ひ思ひの年號なりき
 芳野の宮の延元を用ふるもの、或は京都の 〇大日本島根國也 〇もとよりの皇都 大日本國中は、何れか皇
 曆應を用ふるもの、めいしく 勝手也

○寝る ○今にはじめぬ、ならひ世の中の定めなくして、夢のやうなる ○かずかずの何も彼 ○どどこほりぬ 澁り勝ちにて、執 ○仲尼孔子 ○獲 麟 春秋に魯西狩して麟を得たりと云ふ ○こころにて、止りたくはあれど 茲の文の所に至りて ○よこしまなるまじきことわり 邪でな ○素意の精神也 ○しひて 記しつくる 筆は澁りて進まぬ ○かねて前以 ○時をも かくれさせ給 ○親王皇太子 ○後の號御隆 ○仰のまよにて、御遺詔に 従ひて

吉水院

本居宣長氏文

○どころばなれ 里離れ ○たどすまひの徒倚、予 ○掛けまくは、かしこけれど 言の葉に掛けて申あれどにて、元明紀に開母威岐と書きて、かけまくも、 ○心を汲みて 古の心を、推し量りて也 吉水の水と云ふよめり、之れ、あ、か同音なれば也、まく反む也 ○ふかき 之も吉水の水に ○あはれ感哀 ○彼の帝の御像 後醍醐天皇の御像を申し奉る ○刻み ○この吉水に、うつり来て 御霊が、この吉水院へ、うつり来ませる意 ○えしも とも云ふに同じ、 ○ささやか 小さな ○屋家と ○前うち はれ 前方の、開 ○見わたして 俗に云ふ、見晴しに ○好き ○青葉が ちなるぞ、くちを しき 花の盛に來らざ ○花は日數も 限りなし 花の盛は、なべて短く日數も僅に限れるを、みよしの花は 花の盛に來らざ ○花は日數も 限りなし 花の盛は、なべて短く日數も僅に限れるを、みよしの花は

を云 ○青葉のおくも、なほさかりにて 麓、中の花は、はや若葉となり、果つ ○よそめ 餘所見にて、ふ也 ○たちよりて、見るにもまさる 遠見の方が見事 なりとの意也 ○見るとも 厭くことあるまじうこそたむる ○たむる 見飽 ○向ひの山の花の名 即ち櫻の名の雲井 ○あさはふりにき 古の行宮ひ暮るまで見て居たればとて、見飽 ○向ひの山の花の名 即ち櫻の名の雲井 ○あさはふりにき 古の行宮くことは、あるまじとの意なり ○蔵王堂 権現を祭る堂也 ○かたつ 方片一 ○九輪 九輪の ○いかがあるらむ かと少し疑へる

代々の恵

佐々木高行氏文

○蒼生人 ○蕃殖 序次第 ○鳥見の山中 大和國城上郡外山村の上方にあり ○靈時 也神を祭る齋場 ○高津宮 難波 ○かくらむに 斯くあ ○今はと 今に御造營遊 ○雨久しとて 雨が久しく ○億兆人 ○政 政事を遊 ○理 ならむ道理で

吉野行啓

小出察氏文

○いろあせたる 色の褪めたる ○御衣 ○よしの山みささぎちかくなりぬらむ

ちりくる花もうちじめりつゝ

よしの山を今日来て見るに道のほどは、はや南帝の御陵ちかく成りしならむ、一ひら二ひら散り來る花も何となく露を帯びたるか、打ちしめりて居るよ、どの御歌にて露はやがて涙の意を含める也

○早蕨のすけ典侍 ○なみだのほかは 涙の外 ○宮の大夫 皇后宮の ○そのかみ 其昔 ○このみ

たて 醜類逆賊を防ぐ爲めの楯の ○今のおほみよ 明治の ○かたみのとびら 名残の歌を止められ ○柳の

ないし 柳の内侍 ○萬代に 萬代の末 ○みこまり 御泊

○むら雨ははれたるけふもふりじよの

みやるたづねてそでぬらしけり

村雨は、名残なく晴れし今日にはあれども、なほふりし世、即ち昔の皇居の御跡を尋ね奉りては其かみの様など思ひ奉りて爲に袖をぬらしけりとの御歌也ふりしは、雨の降ると世の經るとをかけて云警給へる也みやらは宮居にて也 皇宮

○震翰よりはじめて 御親筆を始 ○みものがたり 御物 ○あせをば汗を ○にぎる握 ○こころあ

りてちりはてぬらむ 花の散るは、なべて無情なりといひならはせるを、うの散る花却て有 ○なにこな

ぐさむ所ならねば 花を見て慰むなどすべき所にもあ ○女房女 ○おかし 面白 ○はかなき 計略なき 意にて俗の

○こころ心には似ず 外の心に似

よ 吉野山の懷古

榎田直助氏文

○いにしへの三代の嵐 昔南朝御三代の間の争ひを云ふにて、嵐を戦争にたとへて云 ○春の花いかに

散りし 吉野山の花は、どの ○秋の色 紅葉を ○風もなくしづけき頃 徳川氏昇平 ○てりて 紅葉の、て

事 ○みよしの 見ると云ふ言葉

よ 義朝の敗北

平治物語文

○頭殿 左馬頭殿を云へる ○落ちさせ 給ぞ 玉に落ち也 ○愚かなるはなき者かな 俗の、つまらぬものは

意也 ○鞭 鞭のあつ ○あたらの 可憐 ○打物になつて 矢種の少なくなりし ○振舞ける 合戦し ○痛手

重傷、急 ○東近江 琵琶湖の東 ○山 傳 ○面々人 ○姫娘、息 ○捜出され ○兵衛佐頼 ○見参に入れ

よ 御目に ○産屋 ○刀の立所も 覺えず 何れを切りてよきや刀

よ 吉野拾遺

後醍醐天皇吉野假宮の事

○先帝せんてい後醍醐こうてい○もてきての意也 ○うかりし憂うれか ○いとかなしうやは、春立つと云ふばかりの節會の御
る御有様は思ふも、最もと ○きさらぎ月つき ○勾當内侍こうどうないし藤原行房の女弟也長橋の
悲しき次第也と云へる也 ○よしの山やま ○折をりふしつりかはり也

○こゝにても雲のさくら咲にけり

たゞかりそめの夜とおもへど

この吉野の奥にても春になれば櫻は咲き出でたり、しかも雲井櫻とさくころあはれなるよ、雲井と云へば部の内な
ごにのみ咲くと思ひしに、上の御座所あればにや花は雲井と思ひて咲くらむ、然し此所は、只かりうの宿のみ思ひ
居れるに花は皇居なりと思ひて、然も名さ
へ雲井の櫻と咲き出でたるなりとの御製也

○山やまの山やま ○折をりふしつりかはり也

○おしなべてこのめもはるを見えしより

はなになりゆく、みよし野の山

おひなへては、押しならして也このめは木の芽也、野山の草木の芽の、めばる時に成れるより、
みよしの山はうるはしき花の色に成り行くよ、四季のうつり變れるを感じ玉ひし也

○こゝに吉野 ○その折をりふしつりかはり也 ○おもひ出ひてらるゝはいかに昔の思ひ出たさ
うかど ○宣のたまはすれば○このふ思ひ ○みよしの吉野と云 ○よしの山やまの花はなのした露つゆよしの山に
の勅也 ○宣のたまはすれば○このふ思ひ ○みよしの吉野と云 ○よしの山やまの花はなのした露つゆよしの山に

る花の露に袖をぬらすが、うの下露やがて昔を思ひ出だして落つる涙なりとの意、○あはれからせ給ひけり
下露は花の木の下に立ちよりなごしたる時、花に置く露の滴るを下露と云ふ也 ○おなじ内侍
哀れに思は ○しるく目立つ也 ○雁かりの通かよひければ雁かりが大空を ○心こころなく雁かりこそかへれ無情にも雁
せ玉へる也 ○しるく目立つ也 ○雁かりの通かよひければ雁かりが大空を ○心こころなく雁かりこそかへれ無情にも雁
よ也、雁は北へ歸るものにて、吉野の皇居にても北の方都戀しく思召さ ○雁かりがね雁かりが音の意、なるを直 ○わ
る事故、雁は、うらやましくも我等を見捨てて歸るなりとの御言葉也 ○雁かりがね雁かりが音の意、なるを直 ○わ
が身みをなさは身を雁がねに ○みよしの花はなも見すてかへらざらまみよしの花は天下第一
が身みをなさは身を雁がねに ○みよしの花はなも見すてかへらざらまみよしの花は天下第一
は、こゝろなくも見捨てて歸り行く事なるが、我身、もし雁になりたらば、斯く名高く愛でたき ○おなじ内侍
花を見捨てては歸りはずまじを、の意、みよし野の花を暗に吉野の御所にたとへて云へる也 ○おなじ内侍
勾當内侍 ○山のうちの御住居おんすまゐ吉野の山中の ○返事かへりごとにりの也 ○山やまのかひある山に住む甲斐ある也、うれ
侍也 ○山やまのかひある山に住む甲斐ある也、うれ
也、かひは、間又谷也、 ○かんだちめ部上達 ○いはもと岩の根 ○こよなふ此上な ○啓けいさせ申し上 ○
和名抄に映をいへり ○かんだちめ部上達 ○いはもと岩の根 ○こよなふ此上な ○啓けいさせ申し上 ○
さもこそあらめ然様で ○空そらさへはれなば天氣にさへ成れば遊覽に行 ○おごろおごろ恐ろし
驚くおどろの意が、 ○又またかきくらし再び空のく ○ふりいでければ雨のふり
もど也 ○又またかきくらし再び空のく ○ふりいでければ雨のふり
○こゝは猶丹生なほにふのやしろし、程ほどちかし

○こゝは猶丹生なほにふのやしろし、程ほどちかし

いのらばはよれよ、さみだれの空

この所はまだ丹生の社に道の程も遠くなき故に、うの御神に晴を祈りしならば靈驗のなき事はあるまじ、故に祈ら
ば、やがて晴れよ五月雨の空との御製、丹生の社は昔より祈雨の願をかくる神なれば、然か、のたまはせる也社は丹

生の庄ノ丹生村に鎮坐せしませり、侍中群要記に、祈雨使ノ事、藏人發三向大和ノ國丹生ノ川上兩神社一
と見ゆ、雨乞を聽き玉ふ神なれば、晴をも祈らば聽き玉ふならむと思召すより、しか詠み玉へる也

○いみじ尊き ○かねて前以 ○時をも崩御まします御時也 ○親王皇太子 ○ものし給ひたせ給ひ ○いざよい
の月つきとよめり居去り行く月の意にて入る月也 ○人ごこちもなかりけり 俗の正氣づかぬにて ○し

のふめ 葵目の意より轉じて夜明け ○まうちて夜明を ○長月ながつき夜長月に ○いまははや 今となりて ○忘れは
つべき 昔の事は、忘れ ○おもひいでよ 思ひ出 ○すめる月かな おもひ出せと云へる如く昔 ○まごころ

目蕩けなる意 ○なみゐる居也 ○おぼつかなく 不 ○資朝卿 ○よろづ、はからはせ給ひてお
むにて、少睡也 ○なみゐる居也 ○おぼつかなく 不 ○資朝卿 ○よろづ、はからはせ給ひてお

はします 日野資朝卿が萬事取りは ○そのきは かくれさせ ○伶人樂 ○いつくの色の雲くも五色の ○夢窓
和尙わじやう天龍寺 ○武家に心を合せて 武家の者と ○今さらのやうに 今更目の前に見る

○道々を平たいらげて 途中の賊を 征伏して ○さきだちて 人よりも先に評 ○うへよりはじめて 天皇を始め ○消え
させ給ひけると 死没され ○御父の卿おんちやう親房 ○いかばかりおぼすにか 悲しく ○さきだちて

し手てをさきに ○中々なかなかどうしての意 ○北の御方おんかた妻、卿の ○御心地おんこころもなかりける 生きたる御心地 ○
おもてに 顔面 ○またの日ひ登 ○玉の緒たま命の ○たえもはてなで 絶え果ても、 ○くり返かへし 緒いとを云ふよ

と、かされる也 即ち昔の憂 ○むすぼはるらむ 心のむすばれ亂るるを云ふ、こ ○なほそれにて ○をな
きを再びくりかへす也 ○おぼし立ちたまへる 思召し立ち玉へるにて ○御氣色おんけしき御容 ○立ち去り給はで 御
じ道みちの山道也 ○おぼし立ちたまへる 思召し立ち玉へるにて ○御氣色おんけしき御容 ○立ち去り給はで 御
立ち去ら ○まもり 護 ○御心おんこころにも任かせ給はで 思ふ様にな ○御ぐし御髪 ○そむきても 浮世に背き

に、こもり ○猶なほわすられぬ 浮世の事は思ひ絶えたる心に ○面おもてかけ 顯家卿 ○うき世うきよの外ほかのものにや
居ても也 ○猶なほわすられぬ 浮世の事は思ひ絶えたる心に ○面おもてかけ 顯家卿 ○うき世うきよの外ほかのものにや
あるらむ 浮世には、かく背き居るものを、猶忘られずして面影の目の前に見 ○いづくにか 如何なる ○心こころ

ごめむ 心を止む ○おはしまして 有明月ありあけつき 後の月也 ○山やまのはちかく 山の端 ○別わかるれご 別れ
ごめむ 心を止む ○おはしまして 有明月ありあけつき 後の月也 ○山やまのはちかく 山の端 ○別わかるれご 別れ

○こころなむ 此所 ○ぞの人ひと顯家卿 ○つげければ 従者が告げ ○なき人ひと顯家 ○かた見みの野邊のべ 紀念を殘
邊 ○夢ゆめもむかしの袖そでのしたつゆ 見る夢も昔顯家卿在世の時の事の見られて、その悲しさに、え ○世よを

そむきてありけるを 佛道に入り浮世を ○ゆかしく 優美 ○御よそほひ 御姿 ○あない内 ○後の世
後世往生にて ○契ちぎのために 約束の ○のこしけり 残り置 ○むすぶ 水を掬 ○水みづぐきのあと 水みづぐきの跡

死後を云ふ ○龜井かめいあり名水也 ○さえもはてすして 消え果てず 殘 ○そごろに 坐まの字を、よめり ○また
の事也 ○龜井かめいあり名水也 ○さえもはてすして 消え果てず 殘 ○そごろに 坐まの字を、よめり ○また

のとし也 翌年

夜討曾我

謡曲文

○東八箇國坂東八箇國 ○諸待武士等也 ○しかるべき所所也 ○幕を御うたせ候へ陣幕を張らせよ也 ○我君朝
 ○めでたさは盛なる ○さん候然様に ○彼のあらまじは候彼仇撃の一條の手筈 ○片時時の ○祐經
 が事候祐經の事 ○然るべうよき様に也 ○御誕の如く如く ○夜討夜討 ○いまめかしき
 今更めくにて ○祐經工藤 ○此御大事仇撃を ○ふつつと断然 ○ふしぎなる口語の、けし ○詞をか
 改りたるの意 ○是非をわきまへず候口語の、どうして善 ○生々未世未代 ○か
 ためて候に約束の言葉 ○是非をわきまへず候口語の、どうして善 ○生々未世未代 ○か
 さくごき掻き口 ○唐土支那 ○弓取り武士 ○兄弟曾我兄弟 ○いまはの時時 ○水莖跡筆 ○吊ひ給へ
 後世を吊ひ給へ也 ○飛花落葉のことわりと思し召されよ散る花、落る木の葉の如く世は ○入相か 鐘鐘の聲
 也日の入ることに ○諸行無常諸行は社會萬般の事柄の生滅起伏を云ふ、うれば少しも一定せる ○干ぬ間
 よせていへり ○寄せかけて攻め寄するのを波の打寄 ○我れ等兄弟うたんとて 我等兄弟を討 ○手並我が手
 内 ○このぎをけづり刀の、ししのぎを互に削り ○草摺鎧の草摺に ○ざつく鎧の觸る ○薄衣古の婦人の上
 合ふにて、激しく戦ふ也 ○草摺鎧の草摺に ○ざつく鎧の觸る ○薄衣古の婦人の上

云ふ ○運つぎ運の盡くると弓を杖 ○まことの女五郎丸の薄衣を破りて、たぐみ居るを油
 いや懸聲

よるづは頼むべからず

徒然草文

○たのむべからずあらぬ ○深く物をたのむゆるに餘り深く物事を、あ ○こはきもの強き
 勢ありとて勢方あり ○顔孔子の門人、徳高き人也 ○不幸なりき 不仕合でありけり、顔回程の徳の高き ○はこ
 るにげ人の心 ○約束約束 ○身をも人をも自分の身も 他人も也 ○是なる時都合のよ ○非なる時あし
 ○左右廣げれば 云々は心を廣く平 ○心を用ふること 心の持 ○すこしき 氣の狭 ○一毛も損せず
 少しも心の徳を傷ける也 ○人の性何ぞこと ならむ人の性質は、何んぞ天地の限り ○寛大にして 極らざる心の
 りなき時は ○これに障らず心の障り ○物の爲に煩はず心が物に役せられざる故に事物

幼児と諭す詞

本居豊穎氏文

○わくごよ幼也よ ○一もと一こころに 此所に 持 ○そをもて夫れを 持ちて ○成らむとか する成らふ
 也 ○いかめしう嚴し ○たけび雄健 ○ほこらへる誇れ ○似むを 似る ○心し 心ら ひけ ○やがて

也則ち○神ながらなる神の教のまゝの意にて ○いとよし大に、○撓はまぬ○千里かけるふ千里も走るべ
 ○龍の馬のごと也龍馬とて、よき馬也、その如く也 ○義経清正なにか難からむ義経や清正に成る事は何れも六ヶしき事はあらず ○しか世
 に斯様に世 ○あらぬさびつらぬ ○ますらたけを夫 ○似てあれかし似てくれよと云ふ口語の意

たの部

た 短編四章

杜鵑を聞く記 瀧澤馬琴氏文

○立夏季節の名 ○この鳥ほととぎすを指せり ○故兒死せる子也 ○琴嶺名 ○悵々たのしまたる状 ○景によりて情起り景色を見
 て、いろくの ○もろきは物に感じ易
 感情の起る也

鯉の圖に題す 伴蒿溪氏文

○千尋往生論註に兩手臂爲尋とあり、千尋は、それを ○臨むいさほひして、瀧に、むかへる勢 ○やがて
 今に ○吐らむと、いさよこして吐く様に思はれ ○すゝむ心俗の、はや ○かしこき人聖人の意 ○あな
 と同じ感
 動詞也

魂祭の題辭 清水濱臣氏文
 ○魂祭たまたまつは招魂祭にて、七月の精霊會也、昔 ○なし梨の ○ありのみ梨の ○あはれに、深きことわ
 りにあなれ哀れにして、且つ深き道理 ○いつの誰が何時の世に誰が也 ○まことより出で信切から出 ○なら
 はし習慣也

砧を聞く詞 清水濱臣氏文

○じきるも鳴き、し ○たゆむも鳴きたゆ ○あなあやしあま不思 ○そもそも前の言葉を、押
 の音のかなしき以下云々は、斯く、さびしく聞ゆるは、土地の ○みなあらず斯く數へ來れるも、凡

た 忠度と俊成

平家物語文

○十五騎騎馬の從者五人也 ○童小童 ○召具召しつれ ○門をな開かれ候ひそのこの際まで寄せ給へ門
 おあけには及はず、この門のきは迄寄 ○その人ならばその忠度と云ふ人であれば ○苦しかるまじ差し構ひは ○年來
 この年 ○おろそかにも思ひ参らまはすることは候はねどもおろろか、は疎情なり、俗の、忘れたと云
 汝、申したるに ○當家平氏 ○参りよる参り寄るに ○抑も前の言葉を押へて、云ひ出づる ○出で來候

ひて○君既に安徳天皇を申し奉る ○今は野邊に屍を晒さん云々は此上は私共は戦死し ○この中多くの和歌にて ○さういふへきさ 然る ○御恩を蒙り 勅撰の御恩 光榮を蒙り ○遠き御守とこそなり 参らせ候はんす 遠き後々までも貴殿の爲に私の亡 ○今に始めぬ 云々は三 ○愚臣が 承り候ひぬれば 私が勅撰の時 命を承り ○疎略は存すべからず 即ち忘れは致さぬと也 ○今生現世 ○前途程遠馳 懐雁山之暮 雲一つて居る夕暮の景色に馳する云ふにて、程遠き雁山の暮雲を思ふの意也 ○志切にして 忠度の志 也 ○優なりければ 歌も優美で ○勅 勅命によりて勅 ○世におそれ世に憚 ○さぶなみ 淡海の枕詞に 也 ○事也 實は志賀郡の地名にして日本紀、古事記 ○志賀の都 天智天皇の大津 ○むかしながら 儘の義にして にも大津の邊をさして狭々浪と云へるが如し ○志賀の都 天智天皇の大津 ○むかしながら 儘の義にして 昔のまゝと云ふ意なり、うれを近 ○やまざくらかな 山櫻の舊都に映出でたるを見て都は荒れにしを、花ばか 江の地名の長柄にいひかけたる也 ○やはざくらかな 山櫻の舊都に映出でたるを見て都は荒れにしを、花ばか たるなり、か なるは感詞也

た 多田行綱の返忠

平家物語文 一平二

○私の宿意 遺恨也 ○藏人綱 ○無益だめ也 ○心やつきにけん 気が、つい ○直垂 鎧びたるに大 ○うちこばたき 俗語の、目 ばたき也 ○洩れぬる程ならば 俗語の、もれや ○失はれんす 殺さるる ○返忠

敵に、うちざりす ○命いかうらへよう ○入道相 國清 ○あれきけ 彼者の云ふ事 ○人傳には 人の中に入らぬ也、内通を云ふ ○遙かに 大變に、 ○いざとよ 然様、うり ○山攻めらる 征伐さるる也 ○御結構 御心が ○事もなげに 平氣に ○當家 平家を ○康頼がと申して 云々は康頼が新様に云ひ、俊寛が斯く ○ありのままには さし過ぎて 實際よりは ○取 袴袴の裙を ○きつと申さんする事は よな 申すとは、しかと也、しかと 冒頭に云ひ ○此 一門 平族 ○搦め ○こは 何事ぞ 此れは、どうしたる事 ○安穩にて やは あるべき事 聞かす也 ○中御門 成親の住所也 ○袍衣 衣冠 ○たは やか 優 ○引つくるは れたり 飾り立て ○いま や居られぬと也 ○中御門 成親の住所也 ○袍衣 衣冠 ○たは やか 優 ○引つくるは れたり 飾り立て ○いま しむべく 捕縛す ○つや 俗の、ろく ○雑色 供 ○新大納言 親

た 短歌十首

中山忠能氏外敵氏詠

○なぞもかく 斯様に ○小籬 比叡の山風 叡山下しの、はげしき風也、こは 信賢卿、天皇の爲に御身 つなご一は 賊を欺かん爲に深く計られしを彼の山僧等に現はされて誠に 天皇ならぬ事の 知れ渡りしかば衆 徒も力を落して散じたるが故にて、比叡山風の爲に風聲の小籬を吹き上げられ爲めに凡ての計略の露はれしを嘆き しな ○源 吉野川の水源と親房卿の ○なみならぬ 並一通りなまきと云へ ○いさを 功 ○文ばかりかは 親房卿の功は並一通りならず、單に正統 ○遠からぬ 白川 都の白川也、單に白川と云へば奥の白川 ○今もな 記を書かれし計りにてはなしとの意也

ほ其かみのみならず後○菊のしたみづ楠氏の紋章の菊水○さへこし牙へ○小枝ななき○なき數亡人の○あ
 どの寒はせ玉はざりしを云へる也○わたつみ萬葉集に、渡津海と書けり、○うけひく沙うけひ
 引にて神が義貞朝臣の忠誠を納受し玉へるを云ふ、うれを朝臣の○上に見えけり朝臣のまことは、彼の太刀
 打ち入れられし太刀を受けて潮の引き去るに云ひかけたる也○みよじ野の花のくもるのみよじ
 て潮を干かたにせし上○櫻井の形見楠公が櫻井の里にて形見として殘○みよじ野の花のくもるのみよじ
 に現はれ見えしと也○君そまもり楠公澗川に没しての後の形見と頼みし正行卿の没後の○い
 の雲は吉野の皇居を申し奉れ○鳥巳得ぬと云へるを山吉野の皇居の守りは只獨り君のみなりしと云へる也○い
 はでは云はず○えこそ山がらすに寄せたる也○いさぎよかりし潔くあ○六はらの野邊の
 小松重盛を○平らか平氏と太平無事と○池殿のあま池の禪ひろひて拾ひ上げ、○流しつるう
 さ木頼朝を云へり

た 忠度卿和歌を殘す

源平盛衰記文

○入道清盛○郎等家臣○如法暗夜○いぶせき○見參御目に○三位俊成○大庭庭
 也○世に恐れて世間を憚御爲○御爲身のため○一門一族○勅撰の沙汰○藻鹽草○砌下下など
 注ぎては干し、干しては注ぎて之を焼き鹽を製する也これぞ○これぞこの路にて取り出だ○砌下下など
 さ集むると云へるより、書くと云へる料に用ひらるる也

た 高木順が歌文の序

中島廣足氏文

同じく對者に向○引合體の引○候ひ畢んぬ○多く用ひられし文體也○秀逸たる也○歌仙の指南○歌人
 本○忽劇いそが○浮生を萬里の波に隔つとも○曝す前途程遠馳○思於雁山
 の暮雲雁山に○後會期無霜○思於雁山
 曉淚思ふて鴻臚の旅枕の曉の寢覺の涙に纏をぬらす也○後會期無霜○思於雁山
 なれども古は纏にて冠をしめしものなれば○打ち上げ聲高く吟○また見るべき旅ならす
 立なり○哀れなれなれ○心中不憫○あはれ鳴○追從○世辭を云ひ○此人ども○忠度を○千載集勅撰歌
 意也○波や○志賀の都○天智天皇の皇都にて近江○昔ながら○名所長柄を寄心たる也
 名字をも顯し○志賀の都○天智天皇の皇都にて近江○昔ながら○名所長柄を寄心たる也
 今は昔の人なり○今は昔の人なり○今は昔の人なり○今は昔の人なり
 け討まつろひ順○肥の道の後の國○生みの子孫○漢學○漢學○漢學○漢學
 司かれを云ふ○なり所日本紀に別業を○植るおほして植へ生○うらぐはじき
 ば也○司かれを云ふ○なり所日本紀に別業を○植るおほして植へ生○うらぐはじき

の體なるものせられける旅行せら
 ○鈴の屋大人本居 ○便 ○言通はされきとむを文通に言葉
 を云へる也 ○ものせられける旅行せら ○鈴の屋大人本居 ○便 ○言通はされきとむを文通に言葉
 たと申す ○言ぐさ話 ○倭魂もたらむて日本魂を持 ○がなる希望す ○其誘ひすめ ○側のすさび
 とである ○言ぐさ話 ○倭魂もたらむて日本魂を持 ○がなる希望す ○其誘ひすめ ○側のすさび
 本職の外の、○かいなでに口語の、かけ出しの意 ○世の限り生 ○をぢなきて怯懦を云ふ ○いさめて誠
 すきこのみ也 ○かいなでに口語の、かけ出しの意 ○世の限り生 ○をぢなきて怯懦を云ふ ○いさめて誠
 て ○起らざらめや起らずにあらふや、必ず起ると云へる也

た 篁の廣才

尾崎雅嘉氏文

○牧場 ○任國守 ○いたまじき痛まし ○諸生學 ○閉閣の門を ○唯聞く聞き居る也 ○朝暮鼓夕
 の時を報ずる ○いみじくよく ○絶唱名吟 ○樂白天唐の詩人 ○官庫御庫也 ○しらるべき知り得
 大鼓の音也

た 篁朝臣を詠める

平野國臣氏文

○やがての意 ○とく心をも、いひかけたり ○いる入ると弓を射る
 の意をよせたり

た 大塔宮熊野落の事

太平記文

○二品親王親王 ○イみ ○暫時はと ○暫くは忍びて見ん ○期時 ○唐櫃の箱也 ○引かつき引きか
 隠形の咒身身の、 ○兵にこそと ○兵等が、此所に宮の御は ○求めかねて捜して ○これ體の物

俗の、こんな物の意 ○底を翻して櫃を、打か ○座せず宮のま ○蓋開たる櫃は見るまでもなし蓋
 彼の唐櫃を云ふ也 ○明て居る方は見 ○あらむすらむあるかも ○御思案御思ひ ○覺束なし不安 ○玄井三藏人の名大誓若
 りし人也 ○冥應御た ○肝に銘じく感ずる也 ○頭巾山伏の額に ○眉半にせめて被りて ○先達修
 者の先輩 ○體さ ○この君二品親王 ○龍樓鳳闕立派なる ○長らせ給ひ御生長遊 ○華軒香車立派なる ○
 怪しげなるむさく ○單皮、脚巾 ○社社途中の各 ○奉幣神に、ぬさ ○路次途 ○勸修業也佛道
 ○澳 ○濱ゆふゆふは白き麻木綿、また紙など、をつけて神に奉るものにて、木綿と書す、濱ゆふは、海邊の草
 ふを切りかけたが如し、熊野邊にて濱ゆりと呼び、常陸地方に ○渺々くはる ○和歌、吹上 和歌浦吹上の浦也
 ては濱芭蕉と云ふ、三熊野の浦の濱ゆふ、など歌にも詠めり ○外に見て ○瑩ける ○長汀曲浦の意也 ○葦祠草深き中 ○歸命したる意也 ○頂禮貴き頭を佛
 ○外に見て ○瑩ける ○長汀曲浦の意也 ○葦祠草深き中 ○歸命したる意也 ○頂禮貴き頭を佛
 せて禮する ○満山護法山中の神々の佛法を ○十萬の眷屬人間以下の ○垂跡佛が此地に跡を ○和光和
 を云ふ也 ○満山護法山中の神々の佛法を ○十萬の眷屬人間以下の ○垂跡佛が此地に跡を ○和光和
 たる光にて、神佛の徳の廣大無 ○應作なり御出現 ○苗商孫 ○朝日 朝日を日に喩 ○浮雲 逆臣をたど ○
 邊にして大慈悲なるを云ふ也 ○冥闇くら ○玄監冥監と同じく神明の、 ○似空 神は無きものゝ如きなり ○丹誠無二 精神を、こら
 無二を ○感應 神が感じて其誠 ○御窟屈 御つ ○鬘結ひたる ○三所權現 熊野三所の權現也、即ち崇神
 云ふ ○感應 神が感じて其誠 ○御窟屈 御つ ○鬘結ひたる ○三所權現 熊野三所の權現也、即ち崇神

りと云ふ、伊弉册尊、速 ○十津川和 ○奉幣もの ○朽ちたる橋に肝を消す 朽ちたる橋を渡らむと、玉之男、事解之男の神也 ○刀に削り 刀にて削りたる 〇削け損じ 傷つき 〇はかばかしく 思ふ様に、はす也

た 高雄の紅葉

高松重季氏文

○神無月十月、神嘗 ○高雄山 山城國葛野 〇事しげきにまぎれ 用事の多きに 〇分けも見ぬ 踏み分け也 ○音のみ 山水の音と評判と云 ○聞つぎて聞き傳へて也 ○つごひけるにや 集りける ○おのがごら我等 ○岩がくれをしめて 岩かげを坐 ○春の風ならねど樽の前に酔をすゝめ 古詩の樽前勸酔是 ○心とけて気がゆつた ○めでくらすも 紅葉を愛でて 〇谷水を染め紅葉 〇名もしるき するきは著きを云 ○千入の梢 幾度も染めたる 〇ことしまで 今年 〇みざりし色 見ざりし多くの 〇をしむ 今日かな 今日になりて見ぬ ○方丈寺 〇知れる 案内知 ○さらばそれこそは 然らば其の方丈より見らるゝ ○昔を残念に思ふ也 ○繪にもやはと 繪にかく事も 〇いみじう 甚し ○ころろ行く木の本の木の本 善き枝ぶり ○ささえ 酒器也 竹に筒 ○そめてかく 染めて ○名にながれつゝ 世間の評判 に成りつゝ ○花ならぬこのもみぢ葉もけう 來すは今ふ來すば明日は雪とぞふりなましと云へるは、花の下の ○しぐれと 時雨の ○明日のやまかせ 明日吹き詠めなるが、その花ならぬ紅葉も又今日見に來すば也 ○しぐれと 時雨の ○明日のやまかせ 明日吹き下す高雄

風の山風也

た 忠信吉野に留る

義經記文

○剛の者の者 ○信夫 ○跪き 膝をつ ○屑所 羊を殺す場所 ○麓の大 衆の僧徒 ○御邊 汝と云 ○能登殿 經年の内 ○睦月 正月 ○きさらぎ 二月 ○しのぶの里 信夫 ○仰せられければ 義經の仰せ ○さ承り 候ひぬ 忠信の言葉也 ○かうみやう 功 ○けうやう への也 ○人々 其坐に居合 ○それ 其邊 ○綸言 天皇の言 ○玄冬 素雪 寒中の白雪也 ○九夏 三伏 夏九十日を九夏と云ふ、三伏は夏至の後なる三日の庚日にて此日は ○佩きたる 帯び ○逸物 すぐれた ○身にかへて 思ふ太刀也 大切に思ふ太刀也 ○御けん 御 ○申し下して 神に願ひて ○御邊も 身にかふれば 汝も又此太刀と同じ我身に代ふ ○義經に 添ふたりと思へ 此太刀帯びて 義經に添ひ居ると思へ ○御は かせや 御佩刀か ○大夫 黒馬の ○恐を なして 憚り遠慮して ○芳野の 修業 山伏等也 ○清和天皇の 御號を 預るべく 候はん 清和天皇の後胤源義經と申 ○院宣にも 叶はず 義經追討の院宣さ宣にも 叶はず ○よしみ 好意 ○鎌倉殿 朝 ○實には 實は ○尤 最後の 時 云々は 義經の言葉 ○現世の 名聞 此世の、ほ ○後の 世の 訴 死後に人に評判 ○た まら ず 堪へられ ○頼む 所 なし 頼にな ○聞ゆる の 評判 ○

白銀しろぎんの甲かぶと 白銀の小さき金物ある兜也 ○雜式ざしきどもにたび賜たまへ 雜式は、小もの也即ち雜兵にこれを御遣り下されの意也 ○召めしぞかへられける 忠信の古鑑と着 ○衆しゅう 生界じやうかい 衆生界は佛界に對して云へるにて迷ひの世の ○心こころづきて思おもひ出 ○鳥とりのなき て通とほるやうに少しも省みずし ○二人ふたりの小供こどもの信しん 二人の信しん 二人の信しん 二人の信しん ○過ぎわかれの死別しべつ ○不便ふびんにあたられ し不便は、いたはり信切にする意、あたられしは ○和殿原わだんげん 子に對ひて云へる言葉に ○一所いここにこそなけれども 一所に住ます ○人數ひしあひに思おもはれ奉たてまるこそ嬉うれしけれ 折角育てあげし子を人並のものと思はれたるは考 ならば御供ごけいは、さ ○一年二年いちねん にねんに一度も命いのちあらむ程ほどは 一年二年の間に一度にてもよし歸かへ ○見みもし見 えられよ 母を見たり又見 ○承うけたまり候さう 今云ふ委細うゑさい ○身みも絶たえなんと悲かなみけるが 自分おのれの身も絶え入 母の言葉 ○信しん繼つぐが事ことは 云いは母はは ○力ちから及およばす 致方ちかひ ○忠信ちゆうしんが下くだらむといふ嬉うれしさよ 忠信が奥州信夫へ下 母の言葉 ○今年ことしの月日つきひも過ぎよかし 待遠まちとほに思おもふ ○なご待ち候さうらなるに 待ち居るに也 ○君きみ の義經よしつね ○嘆なげき候さうらはんすらん なげく事ことで ○罪深つみふかく覺おぼえて候さうらへ 不孝ふこうの罪深 ○母はは一人ひとりふびんの仰おほせ をこそ預あづかりたく候さうら 母一人世に預りて不憫ふみんなり、この ○死しなんぞ申まをすげに候さうら 共に死すべくと ○義經 者が留とどまらぬか 義經が内の者即ち義經が家來の中には ○備前びぜん、鷲尾じゆいこそ 備前平四郎房成 ○君きみをみつ 留とどまらず也 ○神妙しんめう 感心かんしん あります也

ろの部

そ 空行く雁 曾我物語文

ぎ進まらせ給たまへ 君の御供して御 ○何事なにごともあらば一所いここにて候さうら 何か事變ことへんのありし時 ○留とどりげに候さうら 留とどりそうで ○神妙しんめう 感心かんしん あります也 ○いざさせ給たまへ 率坐すゑざさせ ○陳ちんじやるかたぞなかりける 申まをしのぶるやうも ○まことやらむ せうか ○語かたらせ給たまふぞや 御話ごわしなされ ○きりものにて 俗よこに云いふ利りれ者 ○上のほる時ときもありとや 鎌 幕府へ参まゐる也 ○殺ころさんとや思おもふらん 殺ころそうと思おもふ ○知らでや過すぐらむ 知らずして此所こゝを行いき過 〇おとなしく 老成らうじやうの意にて ○秋あきもたけん更かげ也 ○別べつの翼つばさぞまじへざりける 骨内ほねうち以外の鳥とりを交まじへ である ○あるらむ 申まをしてありしとこかや 河津殿かづねと申し ○射いありきなむ 思おもふまゝに狩かをして 〇ござかしく かしこ氣 ○あな浅あなまよし 俗よこのおがまし也、浅あなまよし 意にて、まじは助語也 ○人ひともこそきけ 誰たれが聞きて居ゐるか ○和 上郎達じやうたう若殿達わかに云いふに同じ ○さやうにてはおはするぞ 其様そのさまにして、お

そ 想夫戀 作者不明

みねのあらしか

まつ風か

たづぬる人の

琴の音か

駒をひかへて

さくほごに

つま音しるき

想夫戀

仲國が勅命を蒙りて八月十五夜の月明に乗じて小督の局を嵯峨野に尋ねし事を作りたる也事は平家物語にありその文極めて面白し、峰の嵐か松風か云々皆平家物語の文也、小督の局の隠家を尋ね困じて嵯峨の法輪の邊へ参りし時何方にや物の音が聞ゆる、あれは、峰の嵐であるか、松風であるか、定かならぬが、それとも我が尋ねる人の琴の爪音にや、局の爪音は宮中にて屢々聞きたる事あれば能く聞き覚えあり、いやそふでもなくて氣の迷で全く松風か嵐かも知れぬ、と駒の手綱をひかへて、聞て居れば、まがひもなき、局の爪音である、しかも其の曲は夫を想ふと文字にも書く想夫戀の曲である、此方にも斯く君を想ふの情の切なき事かなとの餘情をもたせたるなり、ひかへは、引メと同じ、つまおとは、爪音也、しるきは著るしくまや、れぬ也想夫戀は樂曲にて平調のしらべ昔は相府蓮と云ひし也

そ ぞるるご五篇

一、雪の朝

○人のがりにいふべき事人のがりは人のもと也云ふべき事事は申しつかはすべき用事 ○ひがくしからむ曲りし人曲りし人也と云ふ也戯れに書け ○聞き入るべきかは俗の、聞く ○かばかりの事も斯く計りの、なんでもなき一寸した事でも也

二、おも影

○思ひつるまゝの顔したる人心に思ふた通りの顔 ○思ひよそへらるゝは思ひくらべらるゝの意 ○いつぞやありしかといつて、あつたかしらねど、誰かしくたしかに ○いつぞやありしかといつて、あつたかしらねど、誰かしくたしかに ○いつぞやありしかといつて、あつたかしらねど、誰かしくたしかに

過にし方

○ながき夜のすさびに夜長の手ずさみに ○何となき具足取りしたとめこれと云ふ事は無ければとむる也 ○繪かきすすさびたるこそ筆に任せて、繪など落がまし、 ○やり捨つる中に破り捨る ○その折のこゝちす 其時の様な心持がする

見ぬ世の友

○見ぬ世の人昔の人 ○文選のあはれなる巻々文選は周末より六朝迄の詩文集 ○白氏文集白氏文集也白氏は唐人の詩の大家 ○南華の篇莊子の南華真經也、 ○多かりあり

賤しげなる物

○居たるあたり也 ○調度の道具 ○持佛堂寺の本堂にてはなくて日々己れ ○前栽庭也、庭の植込の意 ○願文

神佛に祈願する時の願ふみにて、今云ふ祝詞の如し、
漢語などを交へたるが多し、武將等の往々する所也、
○作善文中に書き入れたるにて偽善と同意也、
○文
車 書物を入れ、塵塚を掃き溜る場所
たる車なり ○塵塚を掃き溜る場所

つ の 部

つ 恒良親王

栗原信充氏文

○元弘 後醍醐天皇の御代 ○吉田 京都の地名 ○あんななる なる ○宣明 中御門氏 ○具して引きつ ○おはこまじ候へば云々は御所が近く ○子細あるまじく候へごわけは、あり ○都をばしも名に負へる陸奥の奥の白河の道は秋風が吹く頃なりとの意なり ○思しめし知らせ給へ 御思召し、あ ○具足してつれ ○東路の關までゆかぬ 云々陸奥には白河と云へる所ありて、それは道の程も遠ければ其所迄旅行せんは永き月日を経べき秋風の吹く頃にも ○雅經 ○なれく 馴れての意馴る事の久しきを ○みじは見た ○春ぞとも 春であるよとの意也 ○洛陽 京都 ○よしやびた ○入相 入相 ○聞くにも 聞くにつ ○帖紙 紙を疊みて懐中し、笏などを入れ又世の事紙入は、帖紙より來れり ○をさくしき 心の作り飾りなくして真心なるを云ふ、 ○船上伯 ○鍾愛 愛を愛する也 ○渥く ○等閑 ○鉄鉞の誅 天誅 ○もどき 背き反對 ○東夷 北條一族 ○戮 殺 ○王道 蕩々 天皇の御運の安らかにして

ら の 部

ら 頼山陽及び其著作

朝比奈和泉氏文

平かな ○あぢきなき 無味氣にておもしろる事也 ○わきて取分 ○三宮 親王 ○前坊 一ノ宮尊 ○少長を踏え年の少きが年長者 ○庶嫡を奪ふ 庶子が嫡子を差し置きて相續する也 ○なればにや である ○撥亂反正 天下の亂れたる平に回す ○天運機に應せずして 天皇の御運が時に會ひ玉はずして ○要せられ無理に強 ○さこしめし 上る意也 ○季年 末年と云 ○末葉 草の風に ○靡然 靡く状也 ○其秀を鍾めてその萃を抜きたるも 其すぐれたる所をききたるも ○蓋世の偉才 一代の大 ○風動 風が草木を吹き ○挑撥 外より憤發させらるる也 ○反激 反動意なり ○才俊の士 才氣ありて、すぐれたる人 ○文運の振興 文學の氣運を振 ○眞淵 加茂 ○景樹 香川 ○近松 竹田二 ○古體詩家 古き調の歌人也 ○積衰を振ふこと 能はざりき 積年の衰弊を振起する也 ○恰當 恰當の時世に遭遇しながら 稀世の偉才を抱きて 恰當は適當と略ぼ同じ、その時世に丁度生 ○泰斗 學文行の高き人を云ふ敬詞也 唐書の學者之 ○策家 策略家 ○萬能 達して一心足らず 多くの藝能に、いろいろと手を出して居ても一の心術が充分 ○崇拜 尊く思 ○東西一致の金言 西の國と東の國の金言と ○性格 品性 ○夙成 少年にして立派にならず ○崇拝 尊く思 ○東西一致の金言 西の國と東の國の金言と ○性格 品性 ○夙成 少年にして立派にならず

○北馬南船行李おろさざるところなく北の國に行き南の國に行きて、足跡の及ばぬ
 ○遊展あま
 ねからざるころなかりしは、履はあした也、即ち遊歴 ○吟域を撤して諸生を待ち
 吟域は、待
 て也即ち嚴格なる區別などを設け ○禮貌を外にして王公に接したるは詩なり 禮貌は禮式に相應せる
 ずして諸生門人を選したるなり ○禮貌を外にして王公に接したるは詩なり 禮貌は禮式に相應せる
 て貴人に對するには斯る規則面倒なるべきを全く然様なる事
 をせずして、大名貴人に交際したるの詩の爲である也

ら 賴山陽及び其著作

うの二

○史編り、政記外史の類 ○謬誤まり ○偏失なる意 ○筆墨の靈妙活動 殆んど天馬の空を行く
 が如き趣あり 筆づかひの不思議なる程妙なるは、丁度天馬が天空を走る様なり ○脈々の餘情を含み
 は、絶ざる状也細くして絶えざる所 ○嬌々の餘韻を存す 嬌々は、たほやかにして迫らぬ状なり 賴 ○俯仰
 の文字以外の意味のあるを云ふ ○嬌々の餘韻を存す 嬌々は、たほやかにして迫らぬ状なり 賴 ○俯仰
 低徊 感慨淋漓俯仰低徊は、うつむきたり、あほむきたり、低徊はあちこちさまよふ也即ち ○一唱三歎
 文
 の面白きに感 ○博搜旁引ひろくさぐり、あまねくも ○明證 確説明らかにかに考證し、た ○標準め
 心するを云ふ ○博搜旁引ひろくさぐり、あまねくも ○明證 確説明らかにかに考證し、た ○標準め
 矛盾言葉の相副はざるを ○一篇無韻の叙事詩一篇の詩である、韻をふま ○市糶の義 ○水利水の事
 云ふ 糶非子の言葉也 ○一篇無韻の叙事詩一篇の詩である、韻をふま ○市糶の義 ○水利水の事
 ○邊防今日云ふ ○迂疎空 潤うかつなるを云ふ ○寸鐵人を殺すの妙 短き刀を以て人を殺すことにて、
 國防也 ○迂疎空 潤うかつなるを云ふ ○寸鐵人を殺すの妙 短き刀を以て人を殺すことにて、

して敵と斃すの面白味のある文也 ○小品の文字短篇と同じく ○典雅みや ○遑麗うるは ○樂府詩の格の ○余不
 欲
 詠物詠物不若 詠史史中有二無數好題目 隨讀者淺深皆可 成三真詩 自分は物を詩に作る
 物を詠するは、詠史とて歴史上の事柄或は人物を詩に作るの面白さに及ばぬ、歴史の中には限もなき面白き詩の題
 となる事がある、歴史をよむ者の讀様の深くとも淺くとも、皆眞の詩となるのである、とて詠物よりも詠史が好
 しと云へるなり、詠史とは、濠川の ○跌宕飄逸 自由な文章のぬけ出て居る事 ○不群の趣 不凡と
 詩とか川中島の詩とか云へる類也 ○跌宕飄逸 自由な文章のぬけ出て居る事 ○不群の趣 不凡と
 なみなら ○馳驟縱横奇想を天外に飛ばし 面白き心を思ひも付かぬ方に向て走らす故に文章が區々たる
 ぬ趣也 ○馳驟縱横奇想を天外に飛ばし 面白き心を思ひも付かぬ方に向て走らす故に文章が區々たる
 規則に拘ら ○演義述作 文をつくるを云ふ ○造詣 賴氏の學問の程度 ○潜心 心をひ ○嚴然 じつかり ○風靡
 ぬを云ふ ○演義述作 文をつくるを云ふ ○造詣 賴氏の學問の程度 ○潜心 心をひ ○嚴然 じつかり ○風靡
 風の草木をなびかす ○漢土の詩に倣して固有の天才を矮縮し 支那の詩の方に計り片寄りて日本人と
 ちかみしほ
 ちかして也

ら 賴山陽及び其著作

うの三

○詞才敏妙 文才のすぐれて ○天稟 つまね ○新機軸 新しき趣 ○卓識に發す 識から出る、見 ○詩人
 は愛情の熱肺腸 なるべからず 詩を造る人は物を、いつくしむ所の、あつき心がなくては ○尊王の
 誠 朝家へ忠義を盡 ○面にあふれて背にねじ 顔色にうの熱情があらはれて、且つ面 ○江木 鑄水
 す心のまこと ○面にあふれて背にねじ 顔色にうの熱情があらはれて、且つ面 ○江木 鑄水

人の ○常日謂我才子未悉我者也。謂我能刻苦真知我矣。山陽が常に人に申すには世間が、うれば、まだ充分に自分の事を知らぬのである、自分を能く、くるしむ。○前兵兒 山陽の詩、○蒙古來人だと云ふのは、まことに、よく自分の事を云ひ盡したのだと云へる意也。○創意的才 文章の趣向を考へて組立つる才。○絢爛の華彩 やうなる光いろどり。○吐屬 輒成章が、そのまゝ文章と。○經營刻畫の魂氣 文章を組立て、いろいろの章句訓詁の文のくど。○常套を襲ふを免れざりしなり 矢張、これ迄の學者の爲せし所を操なす。○維新中興の遠因 明治の大政一新中興の政事の遠き原因となりし事を云ふ。○敷衍ひるむ ○完壁物の充分なる事也。○上乘 一番上等なること。○純然 然氣なし。○修史の業 歴史を作る所。○詞人詩文を造る人。○柴野博士 柴野栗山と云。○時流 當時の風也。○歎惜をす。

ら 賴氏楠公論 栗原信充氏文

○攝播 攝津播磨也。○驛路 驛の道。○道里 驛程のへだたり。○しるし 著。○強ちに一概 聖運陛下の。○一の兵衛尉 僅に一個。○國家の爲に易へたりと云ふべきなり 國家を以て身に易へたりと申すべき也。

うの部

う 宇治川の先陣

平家物語文

げにも質 ○赤手 素手何物をも手、○障ふ ○既墜に回してけり 云々は既に西山に入りし太陽を返すことしどけたる。○はかばかしき勇士 立派なる武將の意。○肩を比ぶる 同等なる。○上將軍 上席の大將軍。○庭訓 家庭の訓。○三朝 後醍醐、後村上、後龜。○彈丸黒子の地 鐵砲の玉か、ほくろ。○按ずるに考ふ。○小疵 少しの非。ならむ 間違ひで。○寵遇 御寵愛して、よく。○推并を蒙る 昇進の恩命を蒙る也。○廟謨 廟堂の評議にて。○元凶 大。人。○踵を接し 續きて起るを云ふ。○老成 沈着せる也。○持重 長く持し自ら。○壊る ○強敵の勢をなし強敵の勢をむ。○勝ふ ○張 巡唐の忠臣。○厲鬼 惡鬼。○穩當 無難なる意。

う 宇治川の先陣 平家物語文

○狼籍物の亂れたるを云ふ、狼は草を籍す。○軍兵 ○橋を引きて橋を取り。○勢こそ軍勢。○仁科 ○聞ゆる世に聞ゆるに。○自然の事 萬一の事、頼朝自ら。○存知せよ 承知せよ、含み居れの意。○たぶ 賜ふ。○眞先渡り 先陣也。○荒涼 すすま。○勢軍 ○乗口 馬丁。○金覆輪 金にて鞍の縁をどりた。○はげせ 白泡かませ 馬の口の出。○撓めず ○引きとほす 馬を引きて通る也。○軍して ○此の御氣色 斯かる頼朝の詮するに所詮なり、

意 ○上らせ給ふな 口語のお上り ○此の仁此人 ○曉立たんとての夜 曉方に出發する前夜也 ○心を合せ
て同腹になりて、か ○いかに梶原殿 梶原殿と云ふ意 ○腹がいて 腹の立ちしのが癒へて也 ○ねつたいの意 ○亂杭の敵
寄するを防ぐ爲めに ○陸月 正月 ○瀬杭 瀬に打ち立 ○坤方 東北 ○腹帯 馬の腹 ○延びゆる ○颯と ○世
水中に立てし櫓也 ○一の馬 天下第一 ○眞先候 先陣を致して候

う 宇治の道の記

松平樂翁氏文

○辰巳の方 ○世をうち山の名には立てごう、は憂き事にて、うしと、うちとを、云ひかけたる也昔よ
さて其の憂しと云ふ名には ○しかぞ 斯様に ○するは ○梓弓 はんはると云は ○やよひ三 ○小幡の里に馬
立ちて居る所なれど也 ○山城の里に馬はあれど君をよさしみ乗らす來にけり、又拾遺集に ○よすがたよ
はあれど 山城の里に馬はあれど、かちより行く君を思へば、なごよめるに由る ○獨言 ○五箇の庄 山階、小野、木幡、伏見、宇治の五
○あしがなければ 借馬の賃銀がなき故に也 ○影像 ○蘭若寺 ○そのかみ昔也 ○曹洞家 曹洞
さいつ頃先つ ○物したまへる 渡來し 玉へる ○大徳僧 ○影像 ○蘭若寺 ○そのかみ昔也 ○曹洞家 曹洞
○もとの山開 ○道元ひじり 道元 ○まごもかる 遊と云はん枕詞也 ○萬安僧 ○沙門事也 ○さご
めるさかのみかたち 影刻せる釋迦の御像也 ○いまそかりて、いまし氣あり、に ○法の御名 佛弟子と成れる後の名に
て俗に法名と云ふ即ち後

後の ○水をためた水へ ○いま更、此所に動き出で 今日の前に見はれ ○よそならず 外々にては無し
名也 ○眞帆 正帆也、偏 ○三代の君 徳川三代にて台徳 ○うちわたしたる見渡さ ○堰き ○掬へばすく ○し
つらひ造り ○さくわ 酒器 ○いたづきつか ○かれ飯 飯 ○ふりさけみて 見る事にて、頭を後へ振り遣
高き物を見 ○あへず敢へ ○このも所 ○かのも也 彼所 ○治承の軍 平家を討ちし時の合戦也 ○がり
許にて、宅 ○あるじまうけ 變應 ○ひとかた方 ○香をばゆづりて 香を譲り ○たちばの小島 宇
治

う 宇治拾遺物語

伴大納言應天門をやく事

○水の尾の御門 清和天皇を ○伴善男 ○信の左大臣 信源 ○おほやけ朝 ○そのおとご源 ○忠仁公
房 ○西三條の右大臣 長相 ○御烏帽子直垂ながら 略服の ○移しの馬 乗かへ ○北の陣 朝平門の所
殿の陣 ○大事になさせ給ふこと 大罪に處せ ○いこいごとやう 異様 ○一定もなきもなき也 ○左の
おとごは 信の左大臣也 ○横さまのつみの無實 ○天道に 神明 ○頭中 將藏人の頭 ○舍人飼 ○つかさに 所役

○人のけはひなし人の居る様子なし、けはひ、氣はひ也 ○さくめく小聲にて語る也 ○つゆ心もえで少しも、合點がゆがで也 ○朱雀門なからばかり半分の程也 ○このありつる人どもは見て居たと云へる人達也 ○きはめたる極め ○いひのこしる言也 ○したる人火したる人也 ○いみじき事甚だ恐ろしき事也 ○いとほし不憫也 ○出納の家出納を司る役人の家也 ○いさかひけん ○とりさへむ取り解む也 ○死ぬばかりなむ死する程である ○さてはあらで其まゝにしては、あらで ○まうとはは汝 ○おれは己 ○とねりたつるおればかり舍人を立つる風、情の我程の也 ○おほやけ人 ○しれこと俗の馬鹿なる事也 ○かたる不具者を云ふ、かたは、癡病者の事にて手足の曲りたる爲に正座し得ず ○かう立派な ○おのがしうは汝が主人は ○人にても人らし ○おはする居ら ○口あけては口を開けば也 ○里となりの人あたりに近 ○市をな人だかりをなし ○いかにいふことどの様な事柄 ○つぎつぎだん ○ひろごり廣ま ○あらがひ争ふにて、かれこれと統論する也 ○わが罪かうぶりぬべくいひければ、自分に罪せらるる ○ありのくたり有りし ○おほせて罪をま ○一の大納言大納言の主座の ○かまへ結構し、たくむ也 ○悔しかりけむ念でありし ならむ

河内守頼信平忠恒を改むる事

○頼信頼基の後胤、満仲の子 ○坂東關 ○兵將 ○仰せらるる事朝廷の仰せ言を重せざる也 ○濱はま ばた海傍也 ○この濱はま のまま に濱はま の形也 ○めぐるべきにこそ繞りて改むる事 ○上野守頼信 ○日ごろ數日 ○かまへもせられなむ結構をもす ○あのやつは彼奴 ○存外ぞんがわい にして意外の事に思ひて ○軍いくさ どもに等に ○さりとも然り ○すぐに渡りたる道あり眞直に向ひの岸に渡せる道あり ○ふさはらはら にたつ馬の大腹まで ○この程このあ ○さらば先に立たち て云々は頼信の言葉也 ○かきはやめて驅け早めて ○たぶわたり一直線に渡る也 ○これの重代ちうだい のもの此地に代々土着のもの也 ○兵の道な かな兵を、つかふ道か ○おぢて恐れてあり也 ○さうなくは容易には なく ○わなな きき 聲こゑ なるひ ○名簿めいぼ 家臣の ○ふみばさみ書状を竹の先に夾みて人に贈る竹を云ふ ○守殿かみどの 守殿 ○怠りおそ りふみふみ 謝罪 ○くだれる降服 ○あながちに強 ○ことに勝れて軍事に勝れて

大將つゝしみの事

○月の月 ○勘文かんぶん 陰陽寮の ○おもくつゝしみ給ふべし深く慎まれよにて深く謹慎せよ也 ○山階寺やまかひのてら 藤原氏の氏寺興 ○枇杷左大將びはさだいしやう 將基しやうき 僧都そうと 僧そう ○御祈おんいのり の師し 僧そう ○おとも沙汰 ○おぼつかなきに待還く ○案内あんない つかうまつるに御尋す ○おぼつかなく思ひ給へて参りて参りて ○なでう事なでう かあらむ何程の事がある

うらこの御心斯の潔白○定ては様子に

の部の部

の範頼に與ふる書

源頼朝文

○脚力の事○立てんと遣はせ○候ひ畢んぬ正に領承せりの意、當時の通俗文の用語也 ○物騒がしからずして餘り動
る様に ○よくよく國に沙汰し給ふべし注意して國政を ○搆へて決し ○おはすべし居ら ○傾城
様子、有様也今の ○もしおのづから自然、又は ○道にて途中 ○聞く耳も見苦しく外聞あり ○あ
形勢の字、當れり ○國のものゝ心を破らぬやう國人の人望を ○大やけ延 ○二位殿時子 ○女房
らむすれの意也 ○あしざまなことをなくして無禮なる事を致さずして、に ○かくとだに披露せらるれば斯く
達等 ○今にはじめぬことなれども尊く居ま ○木曾は義仲 ○山の宮天台の座主 ○鳥羽の四
ならば ○冥加つきて神の加護もす事は也 ○三條の高倉宮王以仁 ○したくめて注意 ○内府盛 ○いま
の宮親王 ○吉事なり云々は後世に傳へられたりとも、殺せるよ ○おぼつかなき不安 ○大勢ども多くの
すこし吉事なり ○あなかしこの嗚呼畏也手簡

おの部の部

お大瀧

本居宣長氏文

○あなた彼方にて、○やがての意 ○川づら川沿ひ ○たくさま直様にて ○貝原翁翁軒 ○こかく
いろく ○せめて強 ○覗き ○こころ多く ○さしもの ○すぐにまつ ○下しわづらひし故に困難
に也 ○なだらからかたひ ○篋もがな 携りあり ○いかでさうか ○餉食ひ 辨當を ○進り ○揺られ 動か
○いたはりもなく 骨折苦勞 ○盃のながれいづらならむも問はずなりぬ 此の篋の下る様の面白
の手に巡り居ると云ふことさへも問ふことを忘れたる迄 ○樽材 ○引きはへたり 引き延 ○篋をしも 助字
に成れりと也、盃をめぐらすを流盃といへばなるべし ○榑木 ○引きはへたり 引き延 ○篋をしも 助字
○ふたがりて塞り ○打傾きつゝ 頭を打かたげ歌を ○さまあしければ見さまのよからぬ

くの部の部

く楠正儀の恩義敵を感ぜしむ

吉野拾遺文

○光範 ○津の國のかためありける 時守護職たりし時也 ○謀られけるを 謀計にのせ ○思ひ
こめて思ひつ ○往ぬる 過ぎ ○隈王 ○いかにもして とうたて ○なごか心をゆるご申さぬ事の

なかるべき事さうして油断せぬ ○便折たより、時こころ ○心もとなしる心配な ○形見敵かたみ ○おとなしく大人らしく なる也 ○よもよも ○我れに等ひとしき自分と同位なる ○竹たけみ ○いにし過ぎ ○さすらへ寓 ○さかしくかしこ ○思おもひつきて思しひ込み ○知らせん領地に ○手向たむけ ○髻むすこ ○袖そで にかけて袖そでにこ ○譜代ふだい ○何心なにこころなく何事なにごとのつかず平 ○おぼのかなく不安たふ ○唯ただには見みえず様子の異 ○啓けいして申まをし上 ○いかでさはあらむさうして其様な ○正寛しょうくわん法師ほうし ○行いひひ澄すず佛道を行る事をする事なり也

く 繪畫の論

中島廣足氏文

○まこと實 ○うつはもの物器 ○そのかみ古 ○ひたぶる一概 ○據より難がたき信據し ○繪所えいじ朝廷ていの ○ものすめれ描くけれも ○なべて押なら ○己おのがむきむきめいく勝 ○里さとびて田舎めきて也、賤 ○うたて憂れたたきに俗の、 ○多おほかめる多くある ○みやびかき ○故ゆづきあと昔の ○復かへり ○てぶり有様也 ○日本やまと ○其そのふりさままさまいるなる也 ○をかしく面白 ○をさくくなか ○心こころばへ心づかひ ○かけても及およぶべからざるは思おもひ掛かけても ○遙はるかに隔へたたれる故ゆゑなるべし雅俗を相隔たれ ○よろづにわたして萬事に通とおじて ○こちなきも氣骨なき也、源氏に、こちなく ○心こころしらひ也注意 ○それはたそれも果はして ○温ぬるねて考へ合 ○思おもふべきにこそ注意せねばならず

く 熊野紀行

小津久足氏文

○さるべきかた然るべき方にて景 ○此日このひごろのうち此間旅行せし内にてもの意 ○目めとまる目に ○午うまの方かた方かた ○未ひつりの方かた方かた ○酉とりの方かた方かた ○家いへ居ゐみ ○おろかなるはなし劣れる ○つとみ家いへ包かにて ○うちずんじらるちは添そ言ご葉は、ずんじは誦 ○うちわたす見渡 ○老ろう功こう ○ひたむきひが ○かしここ 恐ろ

く 訓點

山崎美成氏文

○若わか郎らう子し王わう ○經けい典てん ○和わ讀どく日本にほん風ふうの ○法はつ相そう寺じ ○奈な良らに ○隱かく點てん ○按あんずるに考かふ ○緇しり流りゅう僧そう侶り ○實じつを得たるが如ごとし問違ひなきやうである

く 楠正行最後の事

○巳みの刻とき午前ぜん十じゅう ○申まの刻とき午後ご四し ○深ふか手て淺あさ手て ○重おも傷や輕かろ ○馬うま武ぶ者しや騎き ○四かく角かく方かた四し ○辭こと理わりなく容易に、わ ○引ひ色いろ ○敗たい軍ぐんの ○矢や繼つぎ早矢やを、つぐ ○百ひゃく步ぽに柳の葉をたて百步の外の外に柳の葉をたて葉をたて置きて ○外はさぬ ○矢や坪つば矢や壺はも書く意、思おもふ矢坪 ○着ま暖ぬめ肌の暖みにて體の ○篋ひか深かは、矢やの深く也 ○大たい剛こうの者大たい勇ゆう ○怨おん靈りやうたり ○あが

き死足掻死にて、もたへ〇側めちち〇返すに難きことかは打返し戦を致さ〇一騎あはせ一人と一合ひにて助太〇草摺しを云ふ、後世の下散〇引合鏡の引〇君臣二代相重る事にて、後醍醐、刀の無き也〇草摺しを云ふ、鐘の商也〇引合鏡の引〇君臣二代相重る事にて、後醍醐、後村上の二帝、正成正行の二臣也

〇宮方朝廷〇近き切所近き所〇聖運天皇の〇武徳勢家の意

やの部

や 夜學

中島俊足氏文

〇初夜の鐘抄裏書に見ゆ、初夜を報ずる鐘聲也〇あかくなして掻きた〇文机〇いみじう心すみて甚く心澄み〇何心なく過ぎしもて過ぎしもて讀み〇深き心ばへあるくたりある餘草也〇掛けかた〇見てもゆく見て行〇遠き世の人昔の〇をかききふしぶし章也〇冊子作りて手控帳を〇鶏の聲鶏の〇夜ふかきにや〇あだしの無用

や 八島の春

源平盛衰記文

〇元曆の御代〇院河院〇業忠〇附隱御階也〇小朝拜朝拜の行はれざる時に行はるる儀式、〇節會元日の節會、七日の白馬の節會、十六日踏〇四方拜正月元日に天皇四方の神祇を〇朝拜正月元日天皇正殿歌の節會とを三節と云ふ節日の集會なり

朝賀を受け〇館赤の賀を奏する儀式を云ふ、聖武帝の代より始れり〇青陽春の事也、春は東に方どり玉ふと云ふ

鞠、小弓〇蹴鞠の會、小弓の會〇扇合扇面に詩歌の句などを書き雙方よ〇さし集ひ打より〇木曾義朝、さしもやと思ひけるに、然程の事はなく思ひ居しに〇不破の關美濃〇率して引さつ〇安堵落付〇荒夷野〇洛中京〇ひが事暴〇東國の武士頼朝の車〇亡びんする〇大きに畏まり大に難有

や 山

伴資芳氏文

〇半の齡の意〇山踏山あ〇よみこして好ん〇すぐよか鐘か〇平かなるを平地〇はこびやすく足の、はこ〇吾孀關〇二上筑波と云はん枕詞也、二神とも云ふ、〇物せしを遊び〇始め手始め〇多武峯〇まぢかき近所の意〇名だたる名に立ちたるに〇遠く見るこそと思ひたれば遠方から見る方故〇かき籠れと家〇閑田廬隱居せし〇外面〇三峰山城國伊奈利山に、三個の峯あり、〇山並〇かげとも山の陽にて〇たふすまひ姿也〇ゐて見坐して〇心をやるよすが心を慰むる〇めづる賞にて、愛〇仁者の心は知らねご仁者へ樂し山と古人の申せし言葉の意味は能くも解せざれども也

まの部

ま 正行朝臣吉野の宮に参る

太平記文

○安部野津 ○せき落され 懸止めて川 ○疵 ○いたはりて也 ○馬を引き馬を ○ものゝ具器 ○色代さつ ○頼て ○むげになく ○周章ある也 ○厩弱はき ○命を致す 命を君に ○我れと手を碎 自ら陣頭 ○駈け合せて 馬をかけ合す事 ○直衣 貴人の略服なり 關腋仕立に ○慰する 條と同じ ○累 に出でて ○馳け合せて にて即ち接戦也 ○股肱 手足の義にて ○新發意 ○難義ならば 困難な 代々 ○神妙心 ○變化機に應じ 時に臨みて宜し ○股肱 力と頼むの意 ○新發意 ○難義ならば 困難な ○過去帳 亡者の名を ○髪髮の毛

まよ 一の歌

高崎正風氏文

○千編一律 何れも何れも同 ○修飾り ○防人 筑紫の海の崎々を守るよ ○ことし行く 今年徴に應じて を行く ○にひ防人 新に防人として行く 壯 ○あさごろも 幅の狭衣の器にて ○かたのまよひ 肩の、ま 節の不調也 ○ひむがし 東 ○瀧の御門 御殿の名 ○さむらへど 伺候して ○召すこともなし 御用 のより亂る也 ○舍人 宮中の小官人にして ○居喪り 居るなり ○悼み 悲し ○日嗣皇子 皇太子 ○時めき 勢力ありて 云 ○うち出で 情の言葉に出 ○極致 極まり ○たどなか 中 ○玩味 遊ぶ

けの部

け 藝術家の逸話二章

今昔物語文

○ならびなき 比類なき也 ○いかで 搦めむ 如何にして捕へ得べきや也 ○顔のかぎり 顔の状を ○多かりとい へども 多くありと ○いみじく喜びけり 甚しく喜 ○武樂院 ○おはして見給へ 来て御覽 ○あまた たび幾度 ○わびてみて ○日ごろ 經て 幾日も ○たばからん するなめりと 計らんと ○遣戸 今世の 是皆、こ ○をめぐりて 叫びて、驚き ○や、おのれかくありける はたど 來れ やは、呼びかゝる聲也、 早く來れ ○おづおづ 怖れな ど也

け 月夜逗子より友人に寄する書

徳富猪一郎氏文

○七月 既望 七月十日 ○口碑 口づ ○鎧摺山 ○恰當 丁度よろ ○恍 惚物の、さだ ○蒼茫 海面の、ひろく ○突兀 状を云ふ ○聯歩 快談 二人が同行して、快 ○深寂 静寂の、淋 ○帽簷 帽子の ○瀾 波の、雄大な 深雄々しく、大にして、 ○蛇行 直行せざるを云ふ ○有 小笠懸 是 士風也 小笠懸と云へる遊技ありて勇 あると云へる也、小笠懸は、小笠 ○今人 不見 古時月、今月 却 經 照 二 古人 今の人昔時の月光を見 をかけ置きて之を射落す遊び也

月は太古より變らなければ昔の人を ○捷路ちか ○奇確狂 嚴形めづらしき岩や ○榻を庭除に移し
其光にて照したる事ありとの意也 ○黒紗 黒色の、御最後川 ○蘆洲 蘆の生えたる洲也 ○暗淡たる雲の口語
出でて也 ○江湖の漫談 世間の、いろの談話也 ○黒紗うすき絹 ○御最後川 ○蘆洲 蘆の生えたる洲也 ○暗淡たる雲の口語
やもやとしたる雲
也即ち黒雲と云ふ

け 元暦の地震

鴨長明氏文

○元暦の御代也 ○大なる地震 ○ふるふこと 描ひし ○世の常ならず一通にて ○ひたせり 浸水
○まろび入るころが ○渚の塔 廟寺の塔や ○またからず 全からずにて、無 ○塵灰 ちりや ○いか
づちに異ならず 雷の音 ○ついでひち 築土にて ○おほひ屋 ○はかなげなるあとなしでと 何の計略も
かなしと云ふ、俗のたわいもなき事也、あど ○ひらに 偏平 ○ひさがれ 俗の、ひし ○子のかなしみ 子の死
なしと云ふ、先例と見ゆ、あそびの意ならん ○おぼえて 思は ○いとほしく 可愛う、○なごり 餘震也 ○間
嘆に ○耻を忘れけり はずかしさも忘 ○おぼえて 思は ○いとほしく 可愛う、○なごり 餘震也 ○間
ごほ 地震の揺ふこと ○四大種の四大元 ○齊衡の御代 ○ころと かよ 頃と かやにて、儲 ○みぐし 御
いみじき 大變、又 甚しき

け 建武中興論

井上毅氏文

○おほみわざ 大御 ○くちをしき 念 ○みかご 天皇 ○あげつらふ 論 ○成敗 成功と ○いでや 發語の
○うちおごろかさ うち添詞也從來の所信の謬 ○いでまし 行 ○兵ども 等 ○勾踐 ○范蠡 名 ○猪
のこゝ 武者物の考へ ○辨へ ○建久 後鳥羽天皇 ○莊圓 地を封せずして田を賜ふを云ふ、郡にもあらず境界
○闕所 闕けたる所 ○押領 奪ひ ○夜見國 黄泉なり即 ○醜め 和名抄に黄泉 ○集ひ 荒ぶる 集りて亂 ○葎
牛ひ 茂り 雑草の茂り生ふを云ふ、悪 ○大御稜威 威は御威也 ○禍津日 神日本紀に悪字柱字を訓す
也 ○きは 際 ○蘆芽 蘆の芽が段々成長するを云ふ ○わたつ 原 大海 ○績ら ○しる べ 道案 ○大臣
○大御はからひ 御計 ○鎌倉 このかた 頼朝の幕府を ○鹽土の老翁 潮の、さし引が如く人を、 ○うま
こみち 人理 ○承久の亂 義時の ○二位の尼 北條政子、 ○さがしらに 巧みなる 非道にして、善からぬ
○ひちて ぬれ ○重跡 重て位を踏み ○持明院殿 光嚴天皇 ○大果報 大仕合、運 ○沙汰 評 ○玉矛の御
柱 玉矛は道と云はん枕詞也、即ち ○かにかく 種々也兎角 ○拵て させ 治めさせ ○直義 尊氏 ○清華 上
也 ○職原 抄 名 ○有職家 故實制度の事 ○一家言 私の議論にして、一個
公卿 ○職原 抄 名 ○有職家 故實制度の事 ○一家言 私の議論にして、一個

け 源平兩軍の優劣

源平盛衰記

○國府の地名國守 ○黃瀬川 ○多胡の宿 ○路次道 ○嶮難道のさか ○尾のへ山の垂下する所を尾也 ○折知顔なる様子なり ○岡鳥 ○渚 詔に波限と見ゆ ○見参いつぞやお目に懸るは ○名對面ふて對面する ○いやくす也 ○己れ程の汝位 ○東國の者なれば案内知りつらむ 汝は東國生れの者故様也 ○矢束は弓に似たる事なれば 應致し居る事故に ○矢繼早し居る事の早き也 ○あた矢 無駄矢にて、あもと濤に云へり、 ○退かず ○其れに並べ候へばそれに見れば ○親ておはぶ 親が手傷を ○ことづけ 俗の、か ○よきついで 好き都合也 ○こかくつくろひ飼ひたれば 弱きを強く見せ、僻あるを無き如くに 一當なり ○聞く體子の意 ○縦ひ同じ勢なりとも 源平兩軍が同じ ○敵對に及ばし 對等の戰 ○蒐 け立てられ攻め立てられ ○案内者得しもの ○やはかの意也 ○ゆるしき 此等は一通りな ○靡かじ 従は 大臣殿宗盛を ○宗とて也 ○實盛がなき所には軍はせぬか 實盛在らずとて驚くには及ばし、實盛京 ぬ所にて戰は出來まじきか 也、怖るゝに足らすの意也

け 經り島

荒木田慶子文

○六波羅の入道盛 ○輪田の御崎 今和田岬 ○つきこめん事を 樂き立つ ○日頃心を盡し 長き間心 ○きやうく 今日今日 ○ともすれば 動もす ○事ゆかず 事の、ほか ○じわびて 爲し詫びに ○なだむるばかりの 奉る程の也 ○祭 祓除祓也 ○ものじつゝ 執り行 ○石のおもて 石面 ○さたにて 命令 ○いかめしきなる ○法の會佛事 ○いとたうとくて 其儀式は最 ○院の上さへ 高倉 ○今は此を書た ○相阪 ○心ゆるびし 關を守る必要なき意にて、 ○二萬の里人の貢物 未遠とばるのむかへの 詠めり ○聖の御代 聖天子の知し ○君のひかり 天皇の御 ○山がつり 木こ ○例なうおもひ奉れば 昔より斯くも安らげく治れる ○年波のみなむ 年計 ○あはただしうて 忙かし ○程もじろく 様子も、例はあるまじく思ひ奉る也 ○外 のべもる 外邊を守 ○まだき霞に立ちそひたることちして 新年早々立ちこめたる霞に、竹の臺 竹にて造れる臺也 ○驚よりさきに 驚は春告鳥とさへ云ひて春の來るを人に告ぐるものなるが、け 元祿の大地震 新井君美氏文 ○地裂くる事もこそあれ 地のさくる ○裏打たるうら附 ○上下の禮服也 ○召供の者從 ○耻き事

慌てたる事 ○集居しが ○喚はりゆく注意し ○石走り 石の、ころ ○一所にあるやうに覺ゆ 足の同の耻しき也 ○おぼつかなく不安 ○御ゆるし蒙らむ 御免下 ○櫻門 櫻田 ○御納戸 云ふ、なんどつきて動かぬ様 ○おほやけ幕 ○藤詮 藤原の、 ○渡殿 別業別 ○未の 初午後二は納殿より來 ○おほやけ幕 ○藤詮 藤原の、 ○渡殿 別業別 ○未の 初午後二

源平盛衰記

義經鶴越に赴く事

○卯刻 午前六時 ○矢合 戦の手 ○究 竟つよ ○撰り 勝りより ○貝鞍 貝摺の ○黄返の 鎧に黄を返 ○宿鶴馬 かねの、鑄びたる如き ○尾髪 足れる 尾も立てがみも ○勞りて 大事に ○逸物 馬 ○平泉 也 ○鞍つめ 中より云々は鞍の眞 ○和琴 ○望月 ○宮木 ○木透 を守りて 木の間を ○引つ 懸け 馬を、あゆ指し 寛げてゆつたり ○打ち給へば 馬をあゆ ○踉蹌 踉蹌 やすらひ ○先長 達たる人 ○さくも 習へ聞き 覺え ○さもやあるべからむ 然様でもあ ○神 妙 感心す ○先陣 給はらむと申す 先陣を仰せ付らて居れ也 ○さもやあるべからむ 然様でもあ ○神 妙 感心す ○先陣 給はらむと申す 先陣を仰せ付ら也 ○とりどりめい ○得通の 聖者 通力を得 ○鹿付の 山鹿の居 ○網人 師 ○數奇 たる人 風流心 ○桃李 不語 下自成 蹊 桃花や李花は別に言葉を送せざるものなれども其色の美はしきにひ ○當座の 會釋

即座の、誰か心に劣るべき誰か、人にま

鷲尾一谷案内者の事

○下知 命 ○足立 足 ○鹿の 落し 鹿を取る爲 ○熊押 熊を取る爲の、 ○惡所 懸つて 落し穴、押な ○楊色 濃藍の、黒 ○同じ 毛 也 ○征矢 戦に用ふる矢也 ○取り 具 して 取り ○牛驚 具黒なる也、牛の黒也 ○やゝ 呼びかく ○尋ねて むや 尋ね得らる ○取り 定め たる事 もなきに 候ひ なるも 必ずしも 無き也 ○乾西 ○けし かる 賤し ○こわ づくろ ひ 聲をつく ○事々 しく 仰山ら ○古山 法師 山は 觀山 云ふ ○怖者 恐ろし ○とく とく 早 ○山山 暗き 所 なし 何れの山も 不案 ○ねら び 射 也 ○笛 待 落し 笛にて 獸類を ○年 関 けり 年を 寄 ○小冠 者 冠せ ○不敵 の 奴 大膽 な ○召 じ 具 せらる べし ○片屋 屋也 ○心 を 合 せて 三人 ○節 卷 の 弓 射 ○鹿 矢 野 ○半 物 草 の 草 履 ○續 松 ○輔 車 が び ○ま か ぶ ち た ○貌 ○汝 が 親 には 汝 が 親 の ○三 郎 男 ○佛 迦 ○正 法 佛 ○達 多 對 の 説 を 説 じ 人 ○震 旦 支 那 の ○驩 龍 山 ○事 かけ じ 差 支 な ○花 燐 木 ○管 ○筒 金 ○赤 革 威 威 威 ○思 ひ 付 き 信 頼 意 也 ○虚 山 伏 虚 は 偽 也 山 伏 は 非 僧 非 俗 の 修 驗 者 也 ○妻 を も 妻 に ○形 の 如 く 少 し 計 ○左 右 な く 容 易 く ○白 砂 交 ○

岩磯いはいそ ○惡所あくじよ難所なんじよ ○雪ゆきの淺あそりに喰くはむとて雪ゆきの淺あそき所じよにて ○落おとし堀ほりぢふ ○ひしなで作れて ○御ご景迹けいせき候けへかしの御推察ごのひしや ○殿原どのぼら方々かた ○やをれ俗しよの、こら ○馬場ばばぞるが也 ○打うてや進しんめ ○尻しり輪りん馬まの尻しり ○その器きに足りたり將まさたるの器量きりやう ○孟賁もうへん、樊噲はんたい人名にんめい ○五更ごかう寅うしの時とき ○大物たいぶつ浦うら ○昆陽野こんやうの ○打出うちで輪りん也 ○冷ひやじき ○渚なみ屋や ○藻鹽火もしほ鹽しほを取とる爲ために ○やとかと思おも ○乞こによるべし望まの ○ほの闇くらさうすく ○大手おほての勢せい城じやうの表門へいもんを ○城戸じやうこ入口いりぐち

玉蟲扇を立て與一を射る事

柳やなぎの五重かみね綾あやにて裏うらは紅べにの平絹へいけん也、然しかるべき御方ごかたは、 ○袖笠そでがさ袖そでを、笠がさに ○皆紅かいくれ總すべて紅べに ○杭か意い ○立后りつこうの時とき建禮門院けんれいもんゐんの女御にむすめより ○鬟びんざう ○切り立きりたてりて ○明みやうじん神しん ○佐伯さへき ○一人ひとりの高倉たかくら天院てんゐん ○御施入ごせに進しん ○祝言しうげん言葉ことば也 ○占形うらかたうら ○入いりにけ船ふねの ○木蘭地もくれんぢ地ぢ也 ○招繩目しよじはらひ繩目じゆめいの色いろ重かさを以もつて ○めづる愛あいづ ○ゆゑしき晴はれの藝げい太切たいせきにして且かつつ ○脚氣きゃくけの者ものある者もの ○ふられてふり落おち ○さる事ことにて 兎うさぎも角かく ○瑕瑾かきん ○かちん褐色也 ○さしつくるひ 優う然ぜんとし ○仕つかの射や ○御詮ごせん ○灸治しうぢ灸しうの治ぢ也 ○小振こぶるひして手てのふる ○定の矢ぢやうのやの矢や ○小兵こひやうの意い ○紺こんむらこ 紺こんの濃のうき淡たんきを、だん ○鷹角反たかかくのそりの前立物まへたてものが鷹たかに角かく ○猪頸ぶくいに

着きなし緒いとの頭かぶの如ごとくにて、 ○赤銅造しやくどうぞうの太刀たち赤銅しやくどうの胴どう金物きんぶつを、 ○宿赫白馬しゆくかくはくば ○洲崎すさきに千鳥ちどりの飛とび散ちりたる 水みづはに、千鳥ちどりの飛とび亂みだれたる也 ○洲すさ ○畏かしこまれり 控かへ居ゐる ○不覺ふかくすな 女官にようかんの袴はかまを、はき居ゐる者もの引ひき延のべて ○優うなる男おとこ也 ○几帳きちやう凡ひんに帳ちやうあるを云いふ ○袴はかま温卷ぬまきの坐ままでも 女官にようかんの袴はかまを、はき居ゐる者もの立たつる也 ○楊梅桃李やうばいとうりと飾かざられたり 楊梅やうばいや桃李とうりの如ごとく美うは ○虚燒そらたきは、たき捨すの香かほに ○吾妻あづまの袖そでにぞ 吾妻男あづまのおとこの屋島やしま大臣おほじん也 ○定の當あたりし 事ことを知らざれば 必かな定ぢやう、あたる也 ○そこしも 其所そのところ ○鞍爪くらづめはし袖そでにぞ也 ○屋島やしま大臣おほじん也 ○定の當あたりし 事ことを知らざれば 必かな定ぢやう、あたる也 ○そこしも 其所そのところ ○鞍爪くらづめはし袖そでにぞ也 ○鎧よろひの菱縫ひしやうぬいし所ところにて裙くばの所ところ也 ○沛艾はいがいの馬うま非ひ常じょうに荒あき馬ばにて ○物怖ものおそる也 ○冥加めうか神かみのま ○坐席ざせきに定さだめて 云々いふいふは其その扇あふぎの落おち ○果報くわはうむくひ ○指さし副そひたれば 神かみが我われ身に、つ ○手ての下したなりと 容ゆる易いと ○爪つめやりつゝ 矢やを爪つめの上に上のにの ○しばし固かためたり 暫しばらくぬらひ ○七段しちだん一段いちだんは ○恐おそれあり 日ひを射やるは ○中ちゆうにひらめき 中天ちゆうてんにひ ○諷ふうと ○滂俗ぼうしよくの、みよに ○前輪まへりん ○ごよみ 動搖どうごうにて、騒さわ ○時ときならぬ時とき候けはな ○はつせ 初瀬紅葉しよせもみぢ ○ふもととならぬを 麓ふもとにては無なけれどもに彼かの扇あふぎを花紅葉はなもみぢに見立みだてて詠よめる也

ふの部

ふ 武を貴ぶ國風

久米幹文氏文 一、二

○さるは然るは、にて口語 ○皇孫尊 ○御璽 ○反く ○けぢめ別 ○八十伴雄の義、雄は緒にて統
 べ率ある ○水つく屍水つく屍にて、萬葉集に水つ ○のどのつとりの意、のどには死せずなどあり ○言擧し 興言又擧言にて
 首領の意 ○東人關東 ○國所本國 ○いそしめどもほげめ ○胡縑 矢を入る器 ○制さだめ ○防人邊地
 意也 ○東人關東 ○國所本國 ○いそしめどもほげめ ○胡縑 矢を入る器 ○制さだめ ○防人邊地
 り警むる兵士にて筑紫 ○兵庫 武器を入 ○調庸もの ○辛きくる ○宣りごち詔 ○いたづら用 ○いた
 の防人即ち之れなり ○兵庫 武器を入 ○調庸もの ○辛きくる ○宣りごち詔 ○いたづら用 ○いた
 づく苦勞 ○兵仗器 ○兵府 六衛府、は左右衛門、左 ○凌ぐ 苦しむる ○勘へて ○糺さん 所分す ○驅虎にあ
 らずして諸國の豺狼なり 六軍の爲に力を致す武夫にてはなくして國 ○家人 一家の ○おぼえあるを
 名望ある ○いみじく甚し ○隻手 意也 ○慨たくおぼして かせ玉ひて ○中々に却 ○難かるべく
 人を也 ○いみじく甚し ○隻手 意也 ○慨たくおぼして かせ玉ひて ○中々に却 ○難かるべく
 やあらんかこ六かしき事、

ふ 古寺 中島廣足氏文

○松風木だかく吹きわたたりて 松風の梢を吹 ○道のをかしきに 道の景色の面白 ○え讀むべくも
 あらぬは讀むことの出 ○故よし 事柄 ○例のからめきたる 例の通りの ○いとう甚 ○さる方につ

とめ 然様なる事柄 ○心入れ念入 ○犬ふせぎ 矢來、駒寄と ○見いるればのそき ○ふるき形古風な
 のつとめ ○心入れ念入 ○犬ふせぎ 矢來、駒寄と ○見いるればのそき ○ふるき形古風な
 ○わたし送り來 ○篋 ○けはひ也 様子 ○やうやうだん ○思ほえず 思ひが ○所がらは 云々は揚所柄
 の意

ふ 福原の懷古 井上文雄氏文

○うつろひ 遷り ○はしたなく 端方無しにて、せ ○よろづて ○入道 盛 ○おとど 大臣也太政大
 ちばやき 御本性 生れつき ○おちてて 恐れ ○星の位 禁闕に公卿の列座するを衆星にたへ ○何がしの辨
 某と云へ ○すゞろは しょうの意 ○あわたゞしき さいそが ○さるは うれ ○帝の 安徳 ○わたつみに 海
 の辨官也 ○すゞろは しょうの意 ○あわたゞしき さいそが ○さるは うれ ○帝の 安徳 ○わたつみに 海
 性 ○しか斯く ○かう斯く ○よそに見なして よそ眼に見 ○賤賤の ○音なふ 音づ ○その
 上も 其昔 ○嵐のふく原に 目に見ぬ 昔を嵐の吹くと福原の福とにいひかけたる也

ふ 藤川紀行 八知紀氏文

○宍野村 ○影し見ゆれば 影が見ゆる故の ○さしくむくむ 梅の盛かあるかして也 ○枝川分れ
 川 ○石階ん ○ものもいはで 言葉も發 ○うすくれなひ 梅紅 ○たへに 妙なる也 ○かたじけなさも 神

御徳の尊もろ ○ちる落る ○枝えだたり枝の垂たれ ○つぎつぎ順つぎ々 ○かくらむや斯あくあら ○時ときを失うひたまひ
 御身みみの上に似にて御不運みふんに逢あひ玉たまひし御身みみの上に似にての ○あやしくこそ不思議 ○まぢかき目近に
 所ところ ○花はなのおもて面おもて也 ○圓居まじり園まじり居まじりる居まじりる也 ○さるること尤もな ○そつにておはしましかごの權
 帥すしにて御座みまし ○うたてありければ夏なつれたくて ○一ひととせたまふとき御みあたりより或年高貴なる御方よ
 意い ○郷さとの司つかさ ○神かみの御心みこころもはかりがたし神慮に、うむくや ○おのれと自然自然 ○さながら恰 ○さな
 りとしらば知りたるなれば ○申まをのさがり午後四時過

富士山上のなぐめ 閑田次筆文

○景瀧けいれん支那の ○蟠根ばんこん直ち壓おさ三さん州しゅう間かん三さんが國こくの間まを押お居いれり ○叔舟しゆくしゅう支那の ○莫かび高たか於お峨眉えび
 峨眉えび山さんより高たかき ○莫たんと秀しゅう於お天都てんと一いつ山さんより秀しゅう靈れいなる山さんはなしと也 ○莫たいたく險けん於お太華たいわ一いつ尤よく嶮けんなる山さん也
 故ゆゑに太華たいわより嶮けんなる山さん ○莫しゅう大たい於お終南しゅうなん一いつ山さんより大たいなる山さんは又また世よにあらざと也 ○莫きん奇き於お金山きんざん一いつ妻さいの面
 白しろき山さんなり、故ゆゑに金山きんざんより面白面白き ○無む巧たか武夷ぶい一いつが如ごとし、故ゆゑに世よに武夷ぶいより巧たかなる山さんは又またあらざと也
 ○其它その他雁行げんかう而已のみ其他その他の山さんは何なにれも何なにれも同どう様に別べつに異いり ○其半そのなかばをかねたり云々は我不わが二山にさんは一山いつさんに

牛うしを兼かねね有あして ○面めん向かう不ふ背はい何なに所ところを見みても正せい面めんの如ごとく ○象しやう狀じやうかた ○望もち日じつ ○元山げんざん ○なだれなだ
 居いる意いの意い也 ○流りゅうがさるるを云いふ ○玲瓏れいろう美みはしくして ○唐帝たうていの月宮げつきうに遊あそび玉たまひしも唐帝たうていは玄宗げんしゆん也月世界げつせかいに遊あそべ
 ささる ○こたゝらせて下くだ垂たらするにて水みづの解と ○兆きざして ○かひなきせん ○環かん ○宜いも尤よく也 ○
 胸突むねつき ○羊腸やうちやう曲まが折を多たきを云いふ ○御來迎ごらいこう ○春はるづく ○彩雲さいうんいろざりせ ○蹶あつ隸たいすたな ○傘かさばかりの
 程ほどの也 ○朦朧もうろう也不分明 ○朔望さくぼう一いつ日じつ ○もじは若わかく ○雲漢うんかん大 ○恍くわう惚ぼ心こころの、うつと ○日ひの暈か ○
 妄誕もうたんる言葉ことば也 ○領うく ○五更ごかうのはじめ午前四時頃也 ○頭巾づかんをつくむ頭巾づかんを押お ○潛確せんかく類書るいしよの名な ○大徑たいけいし
 わた ○黒影くろかげの佛像ぶつぞうに彷彿へうふつたるあり黒影が佛像に似 ○朝雲てううんはじめて起おこり日ひの出いづる頃ころなり
 其像そのざうの現あらはるは、朝あの雲うんが初はつめ ○彼かの國こくの二峰にほう彼かの支那しなの、峨眉えび山さん也 ○一氣いつき一いつ種しゆ ○此處こゝ我國わがこく ○灌くわん
 頂ちやうの瀧たき ○日出にっしゆつの圓鏡えんきやう彼の日出にっしゆつに際きして現あらわぬ ○陰氣いんき水氣すいき ○誣しひそしらんとするなり無理理窟をつけ
 也 ○儒生じゆせい漢學かんがく ○あらぬ説せつ問違もんちがひ ○佛者ぶつしや侶り ○山伏やまふし修驗しゆげん ○惘然わうぜん口語くごのぼ

古戰場を過ぐ 久米幹文氏文

○物じつる行きたる也 ○わたり邊唯徒に過ぐる事は出来ぬ ○かうくしく神々 ○廣前御前の ○ぬかづき額をつ ○そこはかそこ也 ○ひきくて低く ○たごならぬ常一通り ○祝部祭器也口廣く尻丸を掘りて掘は ○源准后親房 ○追手本門 ○からめて手 ○つばらなる事 ○つまびらか也 ○矢のしり鐵 ○および指 ○つぎくだん ○大宮人卿 ○事をうけたまはり仰を受 ○とくのへめいみじき大なる ○大みかご朝 ○消息紙 ○あづまをのこ人 ○まめやかに忠實 ○かづれば斯くあ ○憤らしき腹立た ○はぐくまん養育致 ○田舎わたらひ ○田舎め

こ 小松内府父を諫む 平家物語文

○入道清 ○この仰承り候に此御言葉 ○現とも覺えず候 ○邊地粟散 ○就中御出家の御身 ○國の主として大日本國の主君 ○御末孫 ○よらふ身を固 ○衆生穎川支那の名 ○首陽山支那の名 ○蕨いかにいはんや ○祖先にもいまだ聞かざりし ○候ひなんす ○太政大臣を極めて ○運府槐門 ○なかば日本の ○候ひなんす

○四海の激浪 ○傍若無人の意也 ○不思議思ひよ ○撫育愛し ○佛陀佛 ○妙慮たへな ○親疏したしきと ○僻言院中 ○千顆萬顆 ○一は二は一染 ○契り束 ○少々候はん ○迷廬八萬の顛 ○猶高き ○所詮は結局 ○首を召され候へ ○院參院 ○先蹤 ○生を受けて ○果報むく ○御壺御庭と申 ○候はんす ○直衣のうしと訓む ○宿儒者 ○傍窺 ○かきくこ

こ 國史を講究すべし 山崎美成氏文

こ 弘安の役 永井直道氏文

○典故昔よりの事 ○味かりじ ○うせ失 ○兼通兼て ○宿儒者 ○傍窺 ○弘安後宇多天皇 ○物具甲 ○あはたこ ○なめげ ○宸筆 ○平戸肥前 ○探題昔云ふ ○夷寇さくべき ○逃れ ○せむやう ○ひたせめ ○鏑か ○かこ

後三條天皇

今鏡文

○むづき月 ○御子後冷泉天皇 ○春宮のたふせ給ふ後冷泉天皇の ○宇治ごのなごの御弟 ○頼通も
 御前にまゐり後朱雀天皇 ○二宮後三條天皇 ○つけたてまつり侍るべきあづけたてまつるべき ○聞えさせ上げ申し
 ○坊宮 ○たてめ立てよ ○關白頼 ○しづかにゆつ ○今日たふせ給はすば能信の ○かなうまじし
 ○坊宮 ○大夫東宮の ○君の御ため皇太子の ○たゆみなく念り ○すくめたてまつり給へりけたま
 き難き也 ○大夫大夫 ○君の御ため御ため ○たゆみなく念り ○すくめたてまつり給へりけたま
 む萬事御世話を申し上げしならむ ○いごありがたし最奇特なる ○まことにや ○眞實か ○禎子皇太后 ○下臈藤の上
 葉也 ○われは女 ○やむ事なかるべき人なりなくてはならぬ人にてある已 ○しかあらばさやうにし
 ○口惜かるべし ○事念なる ○いさめければ忠告し ○おほきおとご大臣 ○ふだにもつきける上殿
 の名前札にも ○御ともにて ○御朋友 ○つかさ官 ○あきたるに ○したかひて ○闕官の ○あり ○時なく ○政御
 つきける也 ○御ともにて ○御朋友 ○つかさ官 ○あきたるに ○したかひて ○闕官の ○あり ○時なく ○政御
 務の忙しき ○いたはしく ○不憫也 ○下りけるに ○甲斐國 ○餞送別の ○州民縦 ○發甘棠 ○詠詠
 御ひまの無き也 ○いたはしく ○不憫也 ○下りけるに ○甲斐國 ○餞送別の ○州民縦 ○發甘棠 ○詠詠
 莫忘多 ○年風月遊國守の政事の宜しき爲に人民が甘棠の詩を唱ふ様なる事ありとも多年嗜める風月の遊
 莫忘多 ○年風月遊國守の政事の宜しき爲に人民が甘棠の詩を唱ふ様なる事ありとも多年嗜める風月の遊
 後に至る迄其徳を忘れずして一本の甘棠花のありしを、其木は、さる勿れ折る勿れ彼の人 ○から支 ○この

三言靈

井上毅氏文

ばしかりければ昔の事を忍び思 ○彼の人太守 ○左中辨に ○露ばかりも理なき事は
 すまじきに ○云々は、露いさかも道理のなき事は致さぬを、何故に斯様 ○其折其時 ○おもほしこづめ
 させ給ひて御思案あら ○春日の使 ○辨に ○此の ○ことわり理由也 ○官召 ○京召
 を叙せらるるを、つかさめしと云ふ縣召に對 ○なになり ○けむかれになり ○けむ誰々は何官になり ○隆
 方仕まつり ○侍らむ ○吾こ ○官召 ○うけ、官につ ○えたり顔 ○意然 ○する也 ○さも ○あら ○ず
 ○うちしめりて打洗みて也、すこ ○つぎの ○あした ○翌 ○よも参 ○らじ ○らる ○也 ○上の ○御言葉也 ○こと
 人外の ○者也 ○御ゆする ○湯する ○の義ならむ ○御ゆあ ○みの ○事也 ○御びん御くしに ○陪膳仕 ○まつりて
 陪膳の役を仕まつりて也陪膳は、供物を召さる時に、 ○こもりて引籠り
 御座に侍る也菜女の陪膳、陪膳の典侍など見ゆ ○こもりて引籠り
 ○朦朧の ○分明ならぬ也 ○當時の ○風氣思想 ○其時代の ○人 ○さな ○がら ○其ま ○價値 ○ちね ○う ○言靈 ○の ○幸ふ
 國萬葉に事靈とも見ゆ、言々に靈驗ある ○所作を ○稱へ ○たる ○はた ○らき ○を ○有つ ○奄有 ○天下 ○一く ○我物と
 して所有 ○私産私 ○富有 ○天下 ○金の ○多く ○有る ○事は ○外に ○類なし ○穩か ○たら ○ぬ ○矛盾 ○うむ ○ちが ○ひ ○經

國を經倫する義に ○作用言言葉 ○牧す ○やがて取も直さ ○御國國也 ○健御電神 ○汝之宇
 志波祁流葦原中國者我子之所知 國言依賜 汝の主張る所の葦原の中つ國は、我子孫の知らせ玉ふ
 勇猛の解にて、はきは拂ひ清むるの意なれば、大丈夫當掃除天下の意に似て其地を主張るを云ふ也、葦原中國
 は、日本の舊名、所知は萬葉に、しらしめすと見えて知見の義ならむ、言依は神代記に勅、又は勅任の字を訓せり
 言葉に依す ○人主國 ○けじめ別 ○所作業 ○畫いたる 画は、はつくにしろす、めらみこと
 心の義也 ○肇國國を、は ○めでたきうるはし ○あしらひ 取扱ひ、 ○神 隨神ながらにて神代のまことの義な
 たらき ○肇國國を、は ○めでたきうるはし ○あしらひ 取扱ひ、 ○神 隨神ながらにて神代のまことの義な
 ○天日嗣天皇の 食邑入額上り高也 ○割負せて割り付け ○沾へる 惠に浴する也 ○孕まざるは
 なし 基ひせざ ○附會つけ ○學問様 他の學問の如く研究などの ○不文の憲法 文字に書き記さずして實
 今日に 如くに

後醍醐天皇

神皇正統紀文 一、二、三、四、五

○尊治 ○忠子 皇后の御諱は、音にて ○師繼内大 ○弘安 御宇多天皇 ○する 天日嗣に ○告 文 陳疏の、よ
 ○太宰權帥にて 官也其の官にて ○節會 節日の集會也其日朝廷 ○中務 卿 今の内務大臣 ○この君 後
 帝 ○委附し申させ給ひし給ふ也 ○儲 君皇太子 ○おぼしめす故ありて 御宇多天皇 ○繼體 繼體が世

給ふ ○稽古の君 學問に達し ○記録所 國々の庄園の文書をめ ○おほこのごもり 大段隱の義に ○公家 延
 也 ○世にこそと 云々は太政復古の世に ○うたひよろこび 評判し ○そぼそば 俗に人の親切ならぬを云へ
 善から ○元享 後醍醐天皇 ○坊 東宮の ○量仁 ○御志 勤王の志 ○承久 順德天皇 ○上達部 書く、官は
 宰相位は三位 ○山々めぐり 寺々を、 ○國々催して 國々の兵を、 ○御船に奉りて 御船に載 せ奉りて ○源 長
 年氏和 ○かのあたりの邊の ○さほひ 争ひ ○これは外孫なれ 尊氏は外孫で ○へだてなくのみ
 ぞ 親密に ○西ざま方 ○幾ばくならぬ兵 兵らぬ兵也 ○符契 竹符六寸の竹片に文字を削りて兩方に分つ、
 契は木に字を書し二割して ○おこりあひにし 興り合ひたりにて、東西の官 ○東寺 山城に ○威儀をこと
 兩方に分つこと竹符の如し ○行幸の御列を立 ○平治 二條天皇 ○文治 後鳥羽天皇 ○おほやけ 朝 ○一つにいらせ給ふこ
 のへて 行幸の御列を立 ○平治 二條天皇 ○文治 後鳥羽天皇 ○おほやけ 朝 ○一つにいらせ給ふこ
 と一統して國政を ○御はかくひも時節ありけり 御祖宗の神の御はからひ ○更途の方 文官の ○公家
 既に一統しぬ 朝家に於て既に天下を ○もちは若し ○さふれしが 遊ばされししが意 ○かくしめ 給
 ひ書かせ ○罷 申 日本紀に辭をよめり、 ○儀 式 ○奥のかため 陸の奥の國々の鎮に ○かの國州 ○四品
 ○すゝろに 無 ○抽 賞 人よりも、ぬさんや ○天下をしづめしうまの、心にのみなりにける

にや頼朝が天下の政權を押領せし如くせ ○越階順序を ○從三位して從三位に ○三箇國武藏の三國也 ○
 ためしなき比類 ○優恕云々は親類であるからとて格別の取扱は ○家人の列家の並 ○ありけりぞぞあつ
 か云へ ○垂拱自ら手を下さざるを云ふ ○しなを置きて階級を置きてにて定めぬ意 ○本位普通位階也 ○三公内
 大臣を ○謬舉る推舉也 ○戸祿を、みだりにけがすを云ふ ○階入口 ○後の例にはひきがたし平氏
 は後々の例に ○大織官蘇我の一門をほろぼし大織官蘇我の一族を誅戮せしを云ふ ○またく事安全也 ○おし
 てなされたり無理に授けられたり ○かゝるべき事を思ひあへりかゝるべき事にて、これが ○承平の亂
 將門の ○かれが忠文 ○節度さし ○朝家のかため御所を御護 ○先蹤昔時ありじ ○姿様 ○吹舉推舉
 亂也 ○同しく周旋、 ○旋訓の意 ○果報ひく ○徳義徳の高く義理固き也 ○清慎清廉にして、つ ○公平偏頗の心 ○恪
 勤よくつとむる ○四善善行 ○寛弘一條天皇 ○種姓家から ○譜第代々其職に任 ○勘へぬれば ○さ
 ら權威の時 ○官を重くし給ひけり ○官職を授くる事を授けり ○はした原因 ○非重代云々は重代の家
 官し玉はぬが如き事 ○その道にはあらで ○身のため官を授けらるる ○驕りぬればほろ
 ぼしぬち之を殺すを云ふ也 ○残りなくなりにつけり ○曠官の謗職をむ

せしどの ○功の品の次第也 ○あかち分 ○身にとぶまる 其身一 ○諸院天皇の御隠居遊 ○諸宮宮様 ○
 その所の正税をうくるばかり 云々は其國土を賜はるにはあらすして、 ○國司守也 ○庄園地を封ず
 して田を賜ふもて云ふ、而して郡にあらす、境界も定まら ○不輸の所正税を納めずし ○かたかりければ
 ずなりしより、後には何の庄などの名、諸國に残れり ○不輸の所正税を納めずし ○かたかりければ
 嚴なり ○國司のこる所國守の治 ○ほとほと始 ○懐け ○闕所國守の、か ○行はるるに足らざれ
 し故に ○授けらるる地が ○もこは或 ○さほひ申しけり 争ふて給らんこと ○王土にはらまれ王土に ○き
 不足する時は ○もこは或 ○さほひ申しけり 争ふて給らんこと ○王土にはらまれ王土に ○き
 ほひ争ひ 競ひ争ふて領地を賜 ○させるる ○あやぶむる 身を危く ○はじ也 ○前車の轍昔の失敗
 ○さのみ豪強を 云々は土地を兼併して漸次に勢 ○制符禁制 ○かたらはるる 語らはるるにて其黨類にな
 なるを ○やから輩 ○かけあひ 戦争に出づる也 ○樞機なる事柄の意 ○堅き氷は霜を踏むより至
 るならひ 履霜堅氷至の義にて、堅き氷の張りつむる如き時も、始 ○許由支那の箕山と云へる所の隱士、幾
 し人也と蓋し理想の ○穎川支那の名 ○巢父支那の ○きたながりて 穢ならずし ○萬姓の主の主君也 ○お
 人ならんこと也 ○量り奉るべし 云々は、限りなき人に限りある土地を分ち與へ給 ○みながら 日本 ○しらせ給ふ
 へき知しめし給 ○さびびして萌し ○おもて 顔付 ○人の正しくて 人の心 ○將門に見も懲り 將門の大
 逆を見て

懲りる ○帷幄ゐかく軍中の幕を云ふ ○すこしきなる地也 ○奥の泰衡やすひら奥州の ○極めたる極め ○望み賜たまを云ふ ○帷幄即ち陣中の意
りけり望みたるに由 ○をのこ男 ○一とせ年 ○いみじき事 ○心得考 ○これまでの心こそな
からめこれ程の心 ○ありし世昔 ○いかになりぬる世にかどのやうに成りた ○しるし覺えて効驗
る事だと ○はえばえしく意也 ○乙亥いつがい建武二 ○宿意しゆくい古まう ○方人問 ○弘仁こうにん嵯峨天皇 ○めづらか
思はれて ○戚里せきり母方の家、 ○寄たよりに ○あらはならぬ 公にせざる義にて、 ○あまりなる餘り
なる事珍らし ○戚里外戚也 ○寄たよりに ○あらはならぬ 公にせざる義にて、 ○あまりなる餘り
き間違ひ、 ○悉くは許されざりき 外の望の凡て迄は、 ○奏状を奉りぬ 尊氏が ○さるべき然る ○
僻事也 ○悉くは許されざりき 許されざりし也 ○奏状を奉りぬ 尊氏が ○さるべき然る ○
丙子の春はつろ延元元年 ○累代の重寶ちゅうほう昔より傳へられ ○江をわたりて 琵琶湖を ○山門さんもん比叡山 ○朝敵てうてき
へいし 丙子の春也 ○累代の重寶 昔より傳へられ ○江をわたりて 渡りて ○山門 比叡山 ○朝敵
○かつがつの意也 ○いと進まざりけり 勢の振ふりし也 ○海道かいどう東海 ○忠孝の道ちゅうかうのみちこゝに、 さはまり
にき 忠孝の大義も茲に至りて全 ○社壇しゃだんやし ○上りあへず 上京する事 が出来ぬ也 ○させることなくして云々は
これと云ふ軍もなくし ○道の程も道中 ○越えさせ給ひて 立越えさせ玉ふにて、御こ ○啓して奏上
て戦没せられしを云ふ ○道の程も道中 ○越えさせ給ひて 立越えさせ玉ふにて、御こ ○啓して奏上
よそひ 舟よそひに ○おごろおごろ 驚く意にて恐 ○御子みこ皇太 ○御船みふねにさぶらひけり 皇太子の御座船
けし ○例なき例のなき ○こはくなり 強くなり、優 ○もろこし那支 ○大日本島根は 云々は日本國中は
なり ○例なき例のなき ○こはくなり 強くなり、優 ○もろこし那支 ○大日本島根は 云々は日本國中は

ての部

て 天才の末路

森林太郎氏文

あるの ○かすかす目の前なる心地して 何も彼も凡て今眼の前に ○かきあへねば 拭ひ敢 ○仲尼ちゅうに子
意也 ○かすかす目の前なる心地して 見ゆるが如き心地して也 ○かきあへねば 拭ひ敢 ○仲尼子
○獲麟かくりんに筆を絶つ 魯西の狩に麟を得たりと云ふ章に至りて春秋の文を、ととめしと也麟は聖人の世にある也
○止りたくはあれど筆を止めたく ○よこしまなるまよじき 横邪なる ○こころわり 道 ○素意の末
最初よりの思 ○時をも 崩御の ○前の夜より 前夜より ○後の號をば 御證
ひの末をも也 ○時をも 崩御の時を也 ○前の夜より 前夜より ○後の號をば 御證

て 天才の末路
○住うくおもひて 住居が、いや ○究 竟きうきやう至極、よろ ○贓品ざんぴん賊の盗み ○何條事なんてうことやあるべき 何と云ふ
○すがすがしうおぼえさ 心の快くなる也俗の、 ○そごろあるき 散歩 ○やれ家屋いへ破れ ○低れて
○覃こめんとす

て 天才の末路

その二

て 天才の末路

その三

○柑子色こうじいろ黄金色也蜜 ○素焼 ○塑像そざう土にて作 ○名匠めいしょうの手の牙さば上手人の細工の妙
柑子色 柑の如き色 ○素焼 ○塑像 土にて作 ○名匠の手の牙 上手人の細工の妙

○痺えたる如くしびれた ○鈍を蓄へて貯へ置きて也 ○刪潤添削と同意にて、書き ○斷礎いしづ
れ也 ○及ばすなりぬとおぼしたと思ほし也 ○たばこる散る ○啞り ○よごみながら流るは水の
留る也、とこほ ○半醒半睡覺れたると眠
りながら流る也 ○半醒半睡覺れたると眠

て 朝鮮來聘使の禮

新井君美氏文

○艘使買物を持ち ○録せし記録 ○神祖家 ○京の世遊に政事を ○天和靈元天皇 ○寛永東山天皇
來る使也 ○錄せし記録 ○神祖家 ○京の世遊に政事を ○天和靈元天皇 ○寛永東山天皇
○講せらるる取調べ ○下しこはれし評議に下して ○嫌ひあれば擲り也 ○學匠學 ○路次がら
○人々して人々を ○効勞郊外に出でて使者 ○禮卒りぬ終れり ○訖り ○申し沙汰せし所評判せる
○繁文末節わづらはしき手續や、

あ の 部

あ 尼法師

福地櫻痴氏文

○彰義隊 徳川幕府滅亡の時に其家臣等隊を組 ○法會佛事 ○香華を手向けて香や花を亡者に供へて也 ○冥福死後
幸福 ○畔道 ○卯塔塲墓所の ○墓の碣累累たり碣は石ぶみ也即ち墓碑などが ○土饅頭を築き土
を、つくりて也 ○香染の麻の袈裟香染は下摺薄紅に黄を交ぜたる也丁子を以て染 ○稿席の上にわら

頭は墳墓の事也、墓 ○香染の麻の袈裟香染は下摺薄紅に黄を交ぜたる也丁子を以て染 ○稿席の上にわら
を、つくりて也 ○香染の麻の袈裟香染は下摺薄紅に黄を交ぜたる也丁子を以て染 ○稿席の上にわら
上の ○端然俗言の、ちや ○無量壽 經阿彌陀經也命は無量にて、はかり知 ○念珠の事 ○庫裏本堂にあら
住む所 ○いで俗の、さあ ○すはや驚く意也 ○輾びつあはて、たほ ○由來俗のちいれ ○狼籍狼は多く
て穢亂するが故に物の ○はつるを戦の終 ○修羅の衛阿修羅と、帝釋と權を争へる ○未下る刻今の午後
亂れたるを狼籍と云ふ ○劫火の爲の地獄の火を却火と云ふ、火災 ○ねぎ奉り祈り奉 ○流彈ながれ
○堂塔伽藍寺の本堂や塔 ○劫火の爲の地獄の火を却火と云ふ、火災 ○ねぎ奉り祈り奉 ○流彈ながれ
申過ぎたり午後四時 ○錮僧小坊 ○庭傳庭つゞき ○陪臣臣下の臣 ○芳志御深切と云 ○御引導の御
介錯引導は亡者を冥途に導くと云ふ式也、僧は人を引導 ○里正村の長にて、 ○罪業此世にて造り ○如法
の沐浴ゆかり通りの ○引導の式亡者を浄土へ導く所 ○埧采女信繁 ○あないひがひなき人々か
な嗚呼、云ひ甲斐の無い、 ○市の廳へや町奉行所 ○十念念佛、
つまらぬ人々であるよ

あ 尼法師

うの二

○制してや心を自分で ○卒爾突然、だしぬ ○いなとよ俗言の、イヤサ ○事もなげに何氣なき ○由
縁身よ ○朝まだきより ○短刀の栗形栗形は刀の鞘に付 ○さ、のたまふ上は然様に仰せら

○定にて事にても也 ○御譜代徳川代々の家系を云ふ、三 ○臨終の砌にいまは ○値遇相あふを云ふ
 ○引接の悲願 十悪人と云へども、阿彌陀佛の大慈悲心の ○攝取不捨の光明に黄泉の涙を攝取は
 極樂へをさめ取る事、不捨は、十悪人と雖も捨てざるの意、その慈悲の光りにて、亡者は、よ ○彌陀の淨土
 みぢの悲しみの涙をたらされてなり、即ち阿彌陀佛の本願によりて亡者の成佛するを云ふ ○導師死
 阿彌陀佛の住 ○中陰也 ○墓碣墓の、いしふ ○過去帳 記したる帳簿 ○ためらひしは躊躇す ○導師死
 まる淨土也 ○過言の、なか ○碩學 大學者 ○錫を飛し 僧侶の巡歴するを飛
 を引導す ○煩悩の雲を心の迷をさす ○俗言の、なか ○碩學 大學者 ○錫を飛し 僧侶の巡歴するを飛
 杖もふる ○をさす ○俗言の、なか ○碩學 大學者 ○錫を飛し 僧侶の巡歴するを飛

あ 安元の大火

鴨長明氏文

○往ぬる過ぎ ○安元の高倉天皇 ○かこよ 言と同日 ○戌の時午後八時 ○巽南 ○乾西 ○はてには終に ○
 朱雀門 ○塵灰ほこり ○吹きまよふ吹き荒れ ○するひろごり 先にて廣 ○あまねく凡 ○風にた
 へず風の爲に耐へ ○うつし心あらむや 現し心にて、俗の生きて居 ○まぐれて巻き込 ○辛くして漸
 切れずして ○さながららすつかり ○費いくばくぞ 損失は、 ○邊際を知らず 數限
 七珍萬寶 いろくの珍 ○さながららすつかり ○費いくばくぞ 損失は、 ○邊際を知らず 數限
 知ら ○いとなみ營 ○さこも 俗の、さ ○貨金 ○あぢきなくぞ 侍る 無味氣にて、面白

あ 熱海日記

藤原葛満氏文

○後の皐月 閏五 ○卯さがる程 夕の時を少し過ぎし程に ○ほがらくと 夜の明けかゝる状也元と益嘸
 ○なごやか 和を憐や ○時の間 片時の間に ○本牧地名 ○いづら 何れの意 ○木づこ 猿島の名に、ち
 をつとと ○ただはしり 直走りにて具 ○富津洲 ○磯かたよりて 磯の方によ ○御堂拜む程に 觀音
 堂を拜む ○八重雲 幾重も重 ○集へる ○つくづく 草の名、 ○え分かざりしを 見分け得ず ○涌き
 間に也 ○八重雲 幾重も重 ○集へる ○つくづく 草の名、 ○え分かざりしを 見分け得ず ○涌き
 出で ○嘴鳥の口 ○繪島 俗に江の ○寫さまほし 描きた ○赤澤豆 ○未午後 ○いちじろうちて ○早
 うそことば 早くも熱海は、 ○すて難かりし 見捨て難 ○いざ 催し促 ○風も靡けあへず 吹く風の勢も
 煙をば靡け ○迸出つ ○沸溢る ○たぎち落つるも 俗のたぎ ○かうばかりはあらじ 此程には
 得ざる也 ○露も涌出です 少しも涌 ○終夜通 ○いつはかりよりか 何時の世よ ○おひに
 意 ○覺ゆる思は ○露も涌出です 少しも涌 ○終夜通 ○いつはかりよりか 何時の世よ ○おひに
 たれば熱海と云へるを所の名 ○そこに日金山 ○干ぬか 秋かさばかり 秋であるとの ○み山路な
 ればなるべし 山ふかき道であ ○連山波濤の如く 連れる山が波の如 ○火打石也 ○煙ふきつ 煙草の
 つ也 ○やうやう也 漸く ○今も長閑に 今に至りても尙春の如く、ゆ ○鳴きかはす 彼方此方に聲を ○覺束

なけれど心配な ○尻しりかけ腰をか ○割籠わりかご ○静しづかなるに委まかせて銷せうす開静なるまゝに暑 ○うべも最
 ○ひたのぼり一途に上るなり ○石文いしよみ ○色濃いろこききぬ紫色の濃きに衣を着て ○柏あこめめあこめ、は賤女也、即ちあこ
一説に女人近 ○きたらむやうに着たる如 ○みな有つき月もち ○望もち日もち ○天あまそよりり高くそびゆ ○鎮しづめ ○思おも
身衣と見ゆ ひあがれる氣高く騰揚なる様にて鷹の縁 ○いかめしきも嚴格な ○途はるかに麓ふもとにて富士に比べ見れば遠か
 ○ゆほびかなるひろく ○久能くのうの御山みやま祭まつり所を ○つばらに見えわたりはつきりと見 ○つく
り庭箱には庭に ○利島としま ○青垣あはがき恒とこ也 ○おもひあへずなむ思はれ
心を通として、櫻は咲き出たたるならん、あのうるはしく、優なる様を見れば、と云ふ意なり、うらくは春の日

さの部

さ 櫻 (短歌)

○うらうらと、のさけきはるの、心より、
 ひほひいでたる、山ざくらばな。
 春の心は長閑けきものと云ふが、このうらくとして霞たてる朝の心などは實にも、のさかなるよ、其のさかなる
 心を通として、櫻は咲き出たたるならん、あのうるはしく、優なる様を見れば、と云ふ意なり、うらくは春の日
 の遅々たるさまなり、
 略してうらくとも云ふ

○世にあれば、ことしの春の、花も見つ。

嬉嬉しきものは、いのちなりけり

嗚呼、長命程うれしく喜はしきもの無し、古人が年々歳々花相似歳々年々人不同と云へりしが、世の中に
 生きて居ればこそ已も今年の春の花も見得る事であるとの意也世にあれば世になからへてあれば也

○大井川、かへらぬ水に、かげ見えて

ことしもさける、山ざくら花。

水は一たび逝ては又歸り來らぬものであるが、うの歸らぬ大井川の水の上に、花は影をうつして年々に咲く事よ、
 しかもその水はもとの水にてはなし、花は、うれを知りてか知らずしてか今年も例の如く水に影をうつして咲きけ
 るよと云へるにて花の可憐にして無心なる様目に見る
 様にて限り無き感あり大井川は嵐山の麓を流るる川也

○あはれあはれ、我に千年の、命あらば

ゆづらまほしき山ざくらかな。

あはれあはれは、嗚呼と云へる嘆詞を重ねたるにて、口語のあゝ見事なる花よと云ふ意若し我に千年の壽命があり
 しならば、それを花にゆづらふものを、彼の山櫻の見事に見ゆるも僅の間に忽ち散り果つるほど、花のうるは
 しきを見て愛惜の
 情を述べたる也

○よしの山、かすみの奥は、しらねども

見ゆるかざりは、さくらなり梟。

名に負へる吉野山は、さすかに花の多き事よ、見渡す限り花也、何所が限りとも分ちかぬる也、霞が彼方に棚引こめて居るがその霞の彼方は能くは知られども、見渡し所は、總て櫻の花のみなり、の意

さ 山家の興

中島廣足氏文

○さる方かた住その方にて山をかしう面白く也 ○さはひ柄にて事 ○竹のあみ戸竹を割りて、疎らにあみたる也 ○さしは垣をゆひ垣を造る也 ○調てう度ど具こ事ことそぎ簡略 ○たたずまひ有うつばめくを入る器にて、うつばの如 ○炊かしぐた ○まれまれたま ○あるじ設まけ應お ○蕨わらび ○つくづくし草筆頭 ○白酒はくしゆにこさながらなる云々は其ままたに別に ○そこはか其處此也 ○あくがれ行行 ○まだなく上も無く

さ 西光淨海を嘲る

平家物語文

○鞭むちを打うちて馬にと云ふ ○きつと也楮に ○西八條殿清盛也 ○やがてこそ歸かへり參まらめ其内歸りて ○悪あしき入道にふたうめ入道めは西光を ○すべかんなるぞするのであるぞと云 ○しや俗のしやつ、まやつ ○いましめて轉まし ○御壺みづはて内庭の内に ○大床おほひか椽へもなれる姿すがたやなり下りれる見 ○當家たうけ也 ○物履ものばきながら履物の ○なしたび玉成し ○大剛だいたうの者もの大勇者の意 ○耳みみにあたること俗の耳に ○聞かん

する所ところ聞きて居 ○立ち入りなり ○保延ほうえんの崇徳天皇 ○張本ちやうほんかし ○左右さうなう斬きるな俗の、むざむ ○糺きう問もんたとし ○河原かはら原はら也 ○刎はねよ ○痛いため問もんふ拷問す ○白はくじやう狀じやう申立の也

さ 西行法師の歌を評す

高崎正風氏文

○ことわり理にて、理窟の意也 ○宗むねとことし主旨 ○なれりしは成り來 ○行ぎやう誠かいじやう上人にん福田の名 ○貧道ひんだうて云ふ言葉也猶某とい ○古今ここん一人にん古今に一人より ○さなり也然り ○みちのべ道の ○ふりつみしりし也 ○み雪ゆき深ふが如し ○清きよたさがは山城 ○高潔こうけつと云ふまき ○調しらべ歌の ○歎なげけとてかなしめ ○月つきやはものを思おもはするは人に物思ものはする ○かこち不平を ○がほらし ○餘韻よるん言葉の外 ○己おのれ高崎氏自 ○あらむ方かた方ある ○したたか多おほき ○服部はつべ南なん郭くわく元喬と云 ○采きく二菊東籬下咲き出でたる菊花を東の方の ○悠然見ゆふせん南山悠然は物の追おらざる状、何も求むる所の無き身には山も花も見る物として會心 ○かへまほし取代へ ○とりつゝ採りな

きの部

き 漁村の夕暮

中島廣足氏文

○さることにて道理ある ○領りやう解かいことのわか

○あま海 ○住かばかり住居 ○あはれなるものはなしを引き起さしむるものは無き也 ○いと
 たよりなき便なる ○風もたまらぬ風も吹きた ○やがての意 ○失せぬべう失せてしま ○すさび
 なぐ ○ものからりながら ○何ごこち心持也 ○せまじあるう ○夕つ方夕 ○をのこ男 ○手がら
 み腕をく ○今日はいと遅くもあるかな 今日の子等の歸り ○まほり也 注目 ○うまご孫 ○ほこらし
 げ自慢ら ○さち多かりし漁の多くあり ○さかくしつと 彼此と舟なごを ○ののこる立騒 ○さはい
 へごろうは云ふ ○くぐつめくものたるものめくはらしきの也 ○かしがましくやかま ○のぞく
 やうもあらず見ること ○透きかげ家の透間 ○あらは荒けたる ○つゆまごころまれず少しも眠
 なりはひ業 ○おのがじしめい ○こわ高也 ○珍らしうもをかじうも 珍らしくもあり、おもし
 る也

木曾義仲の舊里を過ぐ 池原香輝氏文

○山岨のけはしき所を云ふ ○こくら多 ○大奈岐 ○山のたたずまひ山の有様なり、たえず
 ならず一通りなら ○花やかに日光の、うらう ○道すがら途 ○道ある御世と 木曾山の奥の不便なる所
 まで道のあると云へる

と、學の道の開け行くを寄せ
 て云へる也、とは成りとの也 ○さほふ競 ○預り知れる所領と ○故趾ふるま ○さくやかなる聊のさ
 意 ○御たらこの神の社の前 ○かうがうしさ 神々 ○礎 ○しばし時をうつして 其所に於て暫く ○な
 めげ禮無さ ○ものからものな

木曾路の絶景 池原香輝氏文

○さがしけなる嶮岨 ○さやさやとさやか ○目もあやなり 見る眼もあやしきの義なり ○沓掛地
 ○目くるめくらむ也 ○川ぐまて水際也 ○かたへ側 ○障ふる ○枝さしかへて 枝のさしか ○筏
 していかだ ○すさびさみ ○かけ橋の橋をいふ ○かけておよばん 思ひ掛ける及ばざると ○かたぐ
 な頑 ○あがたつかさ 令 ○魂消ゆる 驚く事にて、俗 ○わななくふる ○あらためて かけ改 ○奇
 しきめづら ○粗石 ○さながら 其まゝ、 ○潭水よどみ ○滑川 ○けうと 氣疎にて人氣少な ○目と
 まる目につ ○若苗の露ふきはらふ 若苗の葉末に結べる 露を吹きはらふ也 ○朝風に朝の風の吹 ○なべて 押なら ○蠶が
 ひ ○こりごり 新葉を摘み取るのとりと、思ひ思ひと云 ○きほふなるらむ 競ふて勵むの ○神戸坂 ○前
 裁庭 ○思ひよそへて、思ひ付く也 ○壘でり ○床並山 ○頼に急 ○ほのかなる幽邃 ○木こり 樵夫、
 山がつ

也 ○せき入れ堰入れ ○人のおもてよりおこり顔の前に高く ○雲は馬の頭にそひて生ず馬の立髪の邊に雲
 の立ち迷ふと云へるに ○まごひ立ちむる也 ○さる所ところとも思ひたらず然程に好き景色の所とも ○野馬やば深い
 九州の名勝也 ○ことごとしく仰山 ○いふべくや申して、よ ○ここの様さま此地の ○ここの序ついでにお
 ごろかすになむ今紀行を記す、ついでに此地の景色の好き事を述べて知らぬ人を驚し置かんの意

ゆの部

ゆ 雪の景色

林徳氏文

○めづるものは愛で賞するものであ ○韻致るんち情 ○めでこしなれど愛し來 ○六つの花雪はなの異 ○な
 つかき様に思はれが、めづらしき様に思はれて也 ○いと興きようあるものにこそ 大に面白味ある

ゆ 雪見の詞

藤井高尚氏文

○あかりさうじ明り障子にて ○かきたれてふる揺き垂れて降る ○かへでの園そののけしきこそと
 て楓園の景色こそ面 ○田づらのほそ道みち細道也 ○わくる分け ○たごたごして行く道の覺束なき義に
 白からめとて也 ○かぎのあづかり門の鍵をあづかり居 ○すびつ炭櫃にて ○かきのと
 づ ○かろうじて辛ふしてなり漸くにて ○かぎのあづかり門の意、門番也 ○すびつ炭櫃にて ○かきのと

の山やまの外 ○けぢめ別 ○いとけさやかなり最と氣亮かにて、一層 ○いながら稻がらに ○いひし
 らす云ひ様 ○あはれさも感情 ○から人ひとの中云々は王之飲の載氏を雪に訪へる故事を云ふ ○うかれ出いででも遊行に出 ○お
 もひしらるゝ、よるのさまになむ思ひ知らるゝ程の夜の景色であると云へる也

ゆ 夕立

藤井高尚氏文

○いみじう甚し ○またなくあつさの又となき程 ○午うまのとき正午 ○けしきづきて氣色付きて也夕
 立たての立のせんとする ○をち遠 ○まざらはしにまざらかしの俗言と同 ○さる心こころ夕立のす ○ほぐども反古 ○とりし
 たぐめ取り ○すのこ篋子 ○おごろおごろしう也 ○神かみさへ鳴神さへに ○ものおち物に怖そ ○
 わななき戦さふ ○とばかりのうち暫時の ○ほのめきほのに見ゆる意に ○さる然様

みの部

み 湊河の合戦

太平記文

○陣ぢんをへだてたり陣を立ち切られて也、味方 ○同じどう同意 ○左馬頭さまのかみ直 ○ござんなれ御座あ ○馳はせ雙
 びて馬を敵と馳 ○合あはぬ敵てさ敵也 ○機き精神也 ○仁にんを知らぬもの仁は、仁義の意にて ○死しを免まぬれん

とて刑戮にあひ服し、却て殺さるる也。○死を善道に守れるは善道に従ひて、○聖主後醍醐天皇、○將軍と左馬頭と尊氏と、○関を作りあげて也。○郎等家、○中黒の紋章、○二引、○兩足利の、○翻、○打なび、○返合はせ、引返して敵と戦ふ也。○求塚、○薄金、○諸證を合はせ、○徒立、○徒歩

しの部

し 叙事詩人としての巢林子

坪内雄藏氏文

○叙事詩人としての近松が特質、叙づる事を主とせる詩人としての、○泰西、○應用、○脚、○本書、○傀儡、○個人、○批判、○心、○秘訣、○蒐集、○劇詩、○謠曲、○狂言の粹を抜き、○要素、○常住の目的、○毀損、○介意、○節奏、○詛語、○衍字、○騰寫者の誤ならめ、○寫字の者の間違ひ、○杜撰、○澁面、○機轉、○本願とせり、○失、○俗、○元祿期、○木花開耶姫

し 城墟感懐

久米幹文氏文

○悉陀太子、○事蹟、○史的、○豫讓の古事、○史劇、○ものしつる、○たゞにやはとて、○かうがうしく、○ぬかづきはて、○ぬかづきはて、○ひきく、○ちめぐる、○祝部、○追手、○つばらなる、○西、○およびを指し、○つぎ、○俗言、○いみじき功績、○職、○原抄、○大みかご、○おのこの意、○仕へまつりに、○や、○城、○くまむとする、○田舎、○そのかみに

し 小楠公

本居豊穎氏録

北風つよく

ふきあれて

ますます寒き

よし野山

のこる一木も

今はとて

散りしかあはれ

若ざくら

北風つよくは、北朝の勢の強きにて、南風不競の意也、ふきあれば、吹荒れにて、吹荒む也吉野は、昔より深雪ふれる里と歌にも詠みて寒き所なるが北風の吹きすむ爲めに愈寒しと云へり、謂は益す南朝の衰へさせ給へるを歎き奉れる也、寒き北風に吹き折られて多くの木々は凋落し盡せるに、只僅に残れりし一木の花も、今は力なしとて散りし事か、それこそ殊に哀れなるよと嘆きしにて、若ざくらは小楠を喻へて云へる也

し 自然美

坪内雄藏氏文

○新眼光のつけどころ ○蘇人スコットラ ○感受心に感じ受 ○卓越たる ○神秘に奉仕する事を神秘と云ふ、奉仕は仕へる也 ○きらきらしくうるはしく、て ○あまねく意也 ○嶄新自あた ○そこなはれざるわらぬ等の意 ○承認ひく ○眉間心若くは ○珍らしきるまひ類ひ希れなる美しさ笑 ○自然美を愛するらむものは自然の、うるはしきを ○未曾有にて珍らしき也 ○宇宙の美天地の間の ○忽然たち ○溢美

の傾ほめ過ぎの様な ○英の詞壇の寥々たる時英の文學社會の、さびし ○え争ふまじき争ふ也 ○刺繡の手工の一也

し 詩歌論

高田早苗氏文

○曲節し ○情の韻文におけるはなほ智の散文におけるごとし 情が韻文に大切なるは恰も智力が散文に必要なると同じき也 ○分析する ○詩興感慨物に感じて詩歌の ○適麗するはしく ○いふべからむ申しても ○魚造の社會あらしき、世の中 ○天真を失ふを自然のまこ ○學者の輿論數の論也 ○泰西の碩學西洋の ○庇蔭おか ○毫刷筆や、 ○道健すこやか ○適切なるか ○柄整相容れざるものなり 物事の、くひ違ふて ○盛唐の詩支那の唐代の盛 ○神韻躍如面白味の目の前に ○繊細鄙弱して、いやしきを云ふ

し 主上笠置山を落ち給ふ

太平記文

○卿相雲客殿上 ○蹴 ○関の聲 ○十善の天子 十善の徳を備 ○田夫野人 田舎人、農夫な ○そことも知らず何れをみて ○夜の中 夜の明け ○たぎるのほかどらぬ也 ○おろそか末 ○御坐の褥 御座の ○羅毅絹織物也 ○ほしあへず 乾しもや ○たゆみ 足の弱りて、 ○現のゆめ 夢にして夢にあらず、夢の

○はらはらばら

○さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠れがもなし

さして行くはそれと志して行くと云へるさしと、笠といひ玉はん料にさすと寄せて枕詞に用ひさせ玉へるなり、心にそれと、さして行く笠置の山も賊の爲に攻められ餘義なくも其所を又さまよひ出で玉ひしより後は何れに身を寄すべさや、天の下には又身をよせ隠るゝ所もなしと嘆かせ玉へるにてあめが下は笠と云へる縁よりの雨と普天の下王土にあらずと云ふことなしと云へる、天の下とを寄せて詠ませ玉へる也此御製を拜するもの何人か涙に袖を絞らざる、あはれ其かみに生れ會ひ居たらむには、せめては御楯ともなり奉りてんものを、いかに大義没滅の世とは申せ畏しとも畏き極みならずや

いかにせむ頼む影とて立よれば

なほ袖ぬらす松のこしたつゆ

いかにせむ、何ぞ致したればよからふと途方に暮れられたる也、せめてはと此松陰こそは立寄れば、松さへも尙心なくてや露を落して袖をぬらすとて、此所も尙頼まれずと嘆かれしなり

○案内者地理に、く○皇居御座所を○隠れなく隠れされずして也○怖ろしげなる神々しき御○汝等心ある者ならば云々の御勅は汝等若し大義を思ひ人心あるものなれば今忠節を致せ、天運再び榮え○さしもすがの悪人○あとにつづける跡より續き来る所の也○松井が所存松井の○黙しける無言にて○うたてけれも也

たき事に○張輿僧俗一向内々の時之を用ふと○怪しげなる賤しげ○扶け乗せ無理に乗る也○張輿海人漢介に見ゆ粗末なる輿也○怪しげなる賤しげ○扶け乗せ無理に乗る也

し 秋後の山里

吉田兼好氏文

○神無月十月也神嘗祭を行○栗住野の山城國醍醐○あると、あ○遙かなる苦の細道を踏分けて遙に幽かなる昔生ひたる細き道を踏分け通ひて也、遙かは奥深き意也○住みなし住ひ○貧の雫かけひの○つゆ音のふづる音○閑闊棚笕語にて水を閑闊と云ふ、○あればなるべし有るから○かくても斯様に○あられぬるよ世に住まるゝ○あはれに兼好の心に○かなた方○柑子蜜柑の○たわゝに焼む程に也、柑子の多く○なり結ま也○廻りまはり○事さめて興がさ○此木無からましかば、と覺えしが好からふにと思ひしと也○あやし賤し○竹のあみ戸竹を疎に編みて垣の戸と成した○定かならねど分らねど○つややかなる艶やかにて美○狩衣元は獵場の服なれども後には略服に用おられたり胸腕仕立にして袖につゆ紐あり濃なる意也○狩衣元は獵場の服なれども後には略服に用おられたり胸腕仕立にして袖につゆ紐あり濃なる意也○差貫色の濃き差袴なり、差貫は袴○ゆゑづき何所かに事故のあるらしく見ゆ○さくやかなる童小童差貫の裾を括りてさし貫きたる也○具こてつれ○そぼちれ也○つらな○分けゆく稲葉の生ふ○えならす面白○すすび耽る○あはれと知るべき人もあらじ其の笛の曲を面白しと聞き○行かん方其人の○知らまほしく知り

思ふ〇見送りつゝ行けば兼好〇際籠〇惣門外構へ〇楊車の長柄を倚〇立てたる休め〇都よりは都にて見〇目とまると一まは、目〇下人〇しかじかの宮の宮様〇おはします頃〇おはします頃〇御佛事など候にや御佛事など勤め玉へ〇御堂〇さそはれ来る誘れ〇空たき物の香也〇身に〇心ちす身に染みて奥床〇寢殿の庫裡也〇廊下〇おひ風意用など衣服に、たき染めし香の匂ひ〇人の心づかひたし〇人目なき山里ともいはず云々人の見て居ぬ所故然様なる身だしなみなど為ざるか〇心の儘に〇草木の心〇野ら也〇置さあまる露露の多く草木の〇かこごがましく〇かこごかこごの様に也〇やみ水〇雲の往き來も早き心地しての山里故に山の端を往きかふ雲〇月の露れ曇る事定めなし〇陰晴の定らざるを云ふ、晴るかと思ればくもり、曇るかと思れば見えぬ思はるる也、山里の實景見る如き書き様也

し 白拍子琵琶法師 吉田兼好氏文

〇多〇久資〇伶人〇興ある事〇面白味〇〇磯の禪師〇白拍子也〇水子〇平絹にて造る、糊を用ひず水張に、〇鞆〇鞆ながら、滑り脱けんを防ぐ爲めに緒を帯の上に引〇ひき入れたれば着した〇この〇本縁〇來縁起也〇光行〇後鳥羽天皇の北面〇龜菊〇白拍子の〇稽古のほまれあり〇藝の上手〇藝男舞也

判あり〇樂府〇白氏文集の〇御論議の番所〇樂府中の、わからざる事を議論研究する〇七徳の舞〇禁暴、戢兵、安民、和衆、豐財の七徳〇心憂き事にして心に、うれたく面目〇下部までも男までも也〇不便にせさせ給ひければ目をかけ、いたは〇生佛〇盲人〇盲目〇山門の事〇比叡山延曆〇ゆゑしく〇雄々しく也、恐れみ謹まし〇蒲冠〇者頼

し 鹿の谷山莊の密謀 平家物語文

〇嘉應〇高倉天皇〇その仁人〇ひらにに也〇〇除目〇官位敘任の〇院内〇御所也〇成敗にも及ばす思〇徳大寺〇卿也〇花山〇院卿也〇左に移りて〇左大將に〇超越して〇右に加へられける〇右大將にな〇一の大納言〇大納言の筆〇〇優長〇立ちす〇家嫡家の〇ささやきはれられ〇世のならむ様成行〇子息所〇從子や家〇朝恩に誇れり〇朝恩の厚きに誇るにて即ち〇心つづかれけん〇心に成られ〇偏に〇天魔の所爲〇俗に云ふ悪魔に見入れられたる也〇平治にも〇同心〇の間〇徒然なし〇首をつぎ給へり〇命をつな〇軍兵を語らひ〇集め〇軍合戦〇ゆゆし〇城郭〇要害よき一個〇〇靜憲法印〇此の由〇平家討伐〇人あまた承はり候ひぬ〇多くの人が〇候

ひなんす 候ひなん
 ○大納言親 ○ささ 不意に也 ○立てられける 置かれたる也 ○瓶子器 ○かけて引きか ○猿
 散樂とも書く、武家に用ひられし樂にて猿樂
 樂は烏帽子直垂也と云へり、能樂の起原ならん ○つやつやくろく也 ○與力 同心徒黨 ○成雅 生といへり
 章綱 ○北面院の北

し 淨海入道の憤怒

平家物語文

○太政入道 盛 ○猶心ゆかず 満なる也 ○直垂 鎧ひたされに具足の ○腹巻 具足の一種にて、西宮抄裏
 を云ふと ○胸板 鎧の胸部に當る板の所也 ○せめしめ ○蛭巻 刀劍の飾也、銀にて纏へる ○貞能と召す 貞能と呼び
 見ゆ ○木蘭地 黄櫨地な ○保元 保元の ○見放ち 参らせ難かりしかごありしを也 ○先をかけた 先驅
 仕り ○入道 清盛自 ○隨分 俗に云ふ分 ○下賤の 不道人 無道なる人物 ○君のつかせ給ひて 遊ばされ
 し也 ○御結構こそ 御たく ○然るべからね 然かあるべからざる事也の意 ○此の後も 後來と ○これへま
 れ 此所へな ○内より矢を一つ射んずらん 防ぎ矢を射るであらふ、 ○其の用意せよ 其戰の用意せよ也 ○入道
 院方の奉公思ひ切つたり 事は思ひ切つたの意 ○させなが 着背長にして腹巻より長く ○世ははや
 かく候ふ 世の中の有様は最早斯 ○大臣 重 ○鎮西九州 ○只今 今ある事のおはすべき 目下然様なる ○

禪門 清盛を云ふ、禪門は佛
 ○物狂はしき じみたる ○椽に居こぼれ 椽に居る事の出來ずして椽の外ま
 ひこと ばいしにて、一 ○氣色ごもなる 有様で ○大文の指貫り 大形の織模様なる差袴な ○そば
 とりて 袴の裾を少し計り ○さやめき 清げに、さはや ○外の事にぞ見知られける まるで此の大騒ぎの
 様に見知ら ○ふしめ 正視し得 ○いさめばや 茲にては、俗の小言 ○内には心 ○五戒 五箇條の佛
 常 人間の守るべ ○面はゆう 面目なく ○素絹のなき絹 色 ○少しはづれて 襟の合せの少し計りは ○座
 上座の ○一向す たら ○はらはら 涙の、こぼ
 るる状也

し 子路が人となりをめづる

平田篤胤氏文

○仲由 孔子の門人 ○をくこき 雄々 ○ものかたり したたまじかばと思はるる人なるが 相見て
 交へたなれば如何に面白か ○孔子にはじめて逢ひける 時子路 ○南山 終南山とて ○不揉自直 弱から
 らんと思へる人であるが ○斬而用之 其竹を切てつ ○甚く ○悪言 言葉 ○そごろに 無端、な
 る意也

し 書籍を粗略に讀む人

平田篤胤氏文

○學のいろせ 學問上の兄弟に ○なにくれいろ ○玉かつま 本居氏 ○あんなれ あるなれにて、茲 ○云

し 新古今集

ひさま 云ふや否や 直ちに也 ○か が め げ ○一 一 ひ ら 杖 ○書 を も て あ つ か ふ は 經 文 を 取 り ぬ ○直 に む じ ろ に
置 く こ と な く 直 に 疊 の 上 に ○心 じ ら ひ して 注 意 ○さ は の 人 の 人 ○ や す か ん の れ ぐ ち ん も ○あ
ぢ き な き 無 味 氣 一 に て 吝 俗 の け ち ○え ある ま じ き 事 な り 事 也 ○志 あ つ か ら む 人 の 人

○夕月夜 ゆふつきよ 夕方方に暫く月 みちくらくら 満ち來る ○あじのわかば 芽出し蘆 ○こゆるしら浪 なみ 白浪のこゆ
多分夕潮の満ち來るので ○なごの海浦 うみ 越中の名子 ○霞のまより 霞の間 ○入用 いろうひ をあろふ 將に沈まんとす
あるふと思ひやれる也 ○なごの海浦 うみ 越中の名子 ○霞のまより 霞の間 ○入用 いろうひ をあろふ 將に沈まんとす
ふが如くに ○とめこかじ 認めて來 ○うごき うとうと ○をりにこそよれ うとうとしきと云へる事と時
見ゆる也 ○梅の花の盛りなるを餘所にして來らぬは 餘りにときを知 ○野邊 やい 春の野に出で ○思ふ おも ぢぢち 仲の善き友達とち
義也 ○ぞこ 何れを其 ○ゆき 遊び暮し ○花のやど 花見ん爲の宿を ○野邊 の うぐひ
す 野外の鶯よと呼びかけて鶯に宿を、 ○こそ 年 ○しをり 花見などに山に分け入る時、歸途の迷はん事を思
からむと云ひたるが面白き事也 ○かき かきわけて分ける ○い く へ 花の多く重 ○あとのし
櫻折の義又柴折 ○まだ 未だ見 ○羈族 きりぞ び ○かき かきわけて分ける ○い く へ 花の多く重 ○あとのし
の義なるべし ○まだ 未だ見 ○羈族 きりぞ び ○かき かきわけて分ける ○い く へ 花の多く重 ○あとのし
らくも ふりかへり見れば幾重もかさなれる花の ○ゆふ ゆふぐれきて見れば 夕方の様を ○いりあひの鐘 かね

に日没時の鐘の聲のうちににて いりあひひ日の入る間也 ○あふさ かや 蓬坂や、にて蓬 坂山やと同じ ○ふく からに 吹く故 ○あらし ぞかすむ
花の散る爲に嵐の、か ○せき 蓬坂の ○むかし 思ふ 昔を思ひ ○なみ だそへてぞ 涙をうへてぞ ○山は
すみて白く見ゆる也 ○窓 まど よりにこに 霧より西 ○つ まをまつ かな 雪間より月の、もれ ○心
ご ごさす 山ほどとさすの聲が ○な なき 無心にて煩惱心 ○身 み にも 我身 ○鳴 な たつ 澤の秋の夕ぐれ 意也 鳴立澤の秋の夕暮のさびしき景を見ればの
な なき 無心にて煩惱心 ○身 み にも 我身 ○鳴 な たつ 澤の秋の夕ぐれ 意也 鳴立澤の秋の夕暮のさびしき景を見ればの
りとするは後人の偽作なり、西行の鳴立澤と詠まれしは必ずしも大磯のほとりの、鳴立澤と今日人の云へる所に
はあらざるならん、爲久脚此地を過る時、こころをのみしと立澤と詠み置かば世に心なき人といはれん、などあり
委しくは拙著鳴立 ○今夜 こよひ たれ 今夜 ○す すぐ 吹風 ふかぜ と吹く風 ○身 み にしめて 身に占めてにて ○よ よ 野のた
澤考に載せたり ○今夜 こよひ たれ 今夜 ○す すぐ 吹風 ふかぜ と吹く風 ○身 み にしめて 身に占めてにて ○よ よ 野のた
け 吉野の ○物思 ものおも ふ 思ひに ○月 つき にまた 月を見 ○わ わが 身 み ひとつの 自身計りなり、外々 ○み み ねの 松風
の音が悲し ○雲 くも は みな 居りし雲也 ○松 まつ にのこ して 秋風のみを松の ○よ よ はる か 弱る ○有 あり 明 あけ 月 ごき 二十日
き き 也 ○山 やま おろ しの 風 かぜ 下 す 風也 ○難 な 波 は の 春 はる は 夢 ゆめ なれや 難波の春の、面白かりしは ○あ あ じ この かの
云ふ ○山 やま おろ しの 風 かぜ 下 す 風也 ○難 な 波 は の 春 はる は 夢 ゆめ なれや 難波の春の、面白かりしは ○あ あ じ この かの
ば ばに 秋 あき になれば蘆 あし の 枯 か ○風 かぜ わ た ら なり 寒 さ き 風 かぜ が 吹 き 渡 る ○た た へ たる 人 ひと の 耐 た へ 忍 び たる 人 ひと が 也 ○ま
り り 出 い づ る 水 みづ り たる が 如 く 寒 さ け ○夕 ゆふ ざ れば 夕 ゆふ ざ り づ か た に 成 なり ば 夕 ゆふ ざ り ば ○こ こ は 風 かぜ こ して 方 かた に 越 こ

て○野田の玉川の間にあり○かりくらし○獵に日を○眞柴にて眞木と云ふに同じ○誰もうれこきを
 誰人も、うれしきものを也○いろにも出でにけるかな喜しさを包み兼ねてや、花はそれぞ○ふちごろも喪服○あ
 だにも無情○まれにくる墓地○たえずや若のしたにきくらむ常に地下に聞て居ら○岩がね床
 岩を枕にして眠る○かたじきて片敷て也偏方の袖を○さやの中山遠江國○長月夜長月に○ゆふこえ
 床にて旅宿の意也○敷きて眠るを云ふ○秋風ぞふくに吹く意○まがり罷り越
 ぐれて夕方に初瀬山を○三輪のひばらに三輪山の檜○秋風が寒そう○まがり罷り越
 どしたけて年長けて○またこゆべこと又再び越え○おもひきや思はざり○いのちなりけり我
 は然か思はざりに、今再び越ゆる
 は全く壽命の爲業なりと云へる也

し 春秋の争ひ

室鳩巢氏文

○彌生三月を云ふ○けふこずば今日尋ねて来らざればの意也、古歌にけふこずば明日○ひとりごち
 獨り語○寔然足音の、ひ○まごころして酒宴を開く事也○數獻酒の幾度も○まらうご客○春の
 花ばかり春の花○めでたきもの愛き○花、紅葉といへど花紅葉と併べ○紅葉は花なき時に
 見ればこそあれ紅葉は諸木落ち盡して花の無き時に○言ひくたすべからず悪く云ふ○さながら其

の意にて恰も○春の山も忘れつべし春の山の花の佳き○義山唐の李○殺風景興を醒し景を損するを云
 と云ふに同じ○春の山も忘れつべしを忘るる位也○山有木、工則度之山の木は、大工が
 を背にして樵を起す、花下の囁道、花上に禪○心をよす好む○山有木、工則度之山の木は、大工が
 を晒すの類を殺風景と云ふと雜糅に見ゆ○伯仲の間にあるべし互にまさり、劣
 る也○賓有禮主則擇之賓客が禮儀を心得居る人であれば其の○所詮つま○翁室氏自○大津の
 宮の御宇の御代○大織冠足○錦をはれる秋はまされり○伯仲の間にあるべし互にまさり、劣
 るはちれ野邊毎に錦を○吉野の雪雪は花○龍田の錦錦は紅葉○伯仲の間にあるべし互にまさり、劣
 はれる秋はまされり○龍田の錦錦は紅葉○伯仲の間にあるべし互にまさり、劣
 と云ふ、魏の文帝の典論に徳殺の班○さはいへど然は申○艶陽桃李の節にさきだつべき時しな
 固に於ける伯仲の間のみ、とあり○さはいへど然は申○艶陽桃李の節にさきだつべき時しな
 ければづらうららとして、桃李の咲き出○詔名○武名○聲容聲や、か○盛りなるにどこのひたる事
 ければづらうららとして、桃李の咲き出○詔名○武名○聲容聲や、か○盛りなるにどこのひたる事
 ○捐讓相讓るの義に○優々する也○ゆたかなる方に勝れたり方の特長であるの意也○慄々
 意也○聖作たる樂也○天なり自然○所遇之時然爾物に、まさり劣りはなけれども其の逢遇する時の
 也○自得し難かりつるに○久しき感ひの惑也

し 自尊自卑の性

井上毅氏文

○證徴證據○高尚なる氣高○反動の天性自尊性に對して反動的○靈覺靈妙なる一種○謙徳自ら

くたる所 ○要素も ○映照する ○至善圓滿 缺點のなき ○感觸 事にふれて ○缺陷世界 缺點の多き
 の德行也 ○野文明 ○現存在する ○事實に徴するに 事柄に依りて考へ合せ見るに也 ○自尊自大 我身を
 上なく尊く偉大な ○性僻 ○自謙自屈 自らの身をへりくだり ○氣習 氣風 ○奇觀 さまじき ○此兩極 端の習癖
 二つの兩にて、自尊自大の癖と自謙自屈の癖とを云ふ也 ○偏傾 傾かたすぎたもの ○夙 昔 ○典雅 雅みやびた
 るもの ○莊重 重きを重んじて ○光線 ひかり ○眩惑 くらみ ○黄金世界 完全無缺の境界也 ○至知の神聖
 りたる尊き人 ○尙 尚 ○澆季 人情のうすり ○叔世 叔は季なり ○末運 運の下れるに ○自尊賤他 自國をのみ尊び
 他國を賤む ○冥界 冥に見ゆる幽界也 ○天堂 淨土 ○高麗の末世 ○模範 手本 ○追縱 倣倣
 後を追ふて ○兩斷 二史籍 ○淳朴 朴して ○機時 異常 ○贊歎 贊美 ○唱導 導出 ○决流 流るる水
 ○鬚髯 事 ○語部 古昔より傳り傳ふる事を ○錯綜 入り乱れ ○書紀 皇の條に見ゆ ○鎮西 九州 ○苦情
 ○牛女の祭り 牽牛星を祭るを也 ○國用 國家の費用 ○戸口 人口 ○凋亡 亡へる ○民心 民心 ○散離 離れ
 なるを云ふ ○錯亂 乱る ○光彩 ひかり ○冷眼 冷やかな ○立つからに立つ ○漲流 流るる勢の盛なるを云ふ
 ○永昌 唐の中宗の年號 ○逸勢 勢 ○避けて遠慮 ○銅燈臺 銘圓堂の前にあり ○丙を景に作り
 父の名を丙と云ふ故に丙の字を憚りて景と記せ

ひの部

美術の保護

三宅雪嶺氏文

也 ○迷路の中 那支拜崇の迷ひの中也 ○虚心 心を静かにむ ○歩を轉じて 其の精神の度 ○趨り ○驛路 驛路の意
 ○顯象 形あらはれ ○蓬萊洲 島の仙人 ○蒼々たるかの天 霄々としたる所 ○漠々たるこの土 大にして、限も知ら
 ○睥睨 睥睨 ○窺窺 窺うか ○懸軍萬里 遠方の國へ軍勢 ○異疆 絶域 風俗氣候の變りたる國 ○方策 ばかり ○趣味 其事物の風
 ○采丰 風采 風采にて、景仰 追慕 かしく思ふ也 ○敬肅 謹恪 つつしむ心也 ○彫刻 彫り ○振興 盛に ○敬仰
 様子と同じ ○閑問題 必要なら ○要素 組立つ ○風姿 様子、あ ○同化 同化種類に ○名工 妙手 上上手な人や、
 うやまひ ○殺伐的の時代 殺氣を含みて、優美ならざる時代 ○錚刀劍の緻精高 妙意匠の、氣高き也 ○堅牢 無雙 かなたき事な
 ○大伽藍 大寺 ○大堂塔 高き塔也 ○阿彌陀佛、毘盧遮那佛 釋迦如來の像也 ○昌平 太平 ○世態 人情 世の有様
 ○狷介 不羈 物事に、泥ま ○超絶 超絶 ○慨然 然いさぎほり ○流俗 俗中の人の中 ○豪邁 逸宕 人に勝れて
 氣象のつ ○瓢然 然心の軽き意 ○描出 描出 ○精査 検査 さまかたに、しら ○無我 無

欲人と自分と云へる心の隔 ○風潮や世のは ○破壊の氣風物事を、うちこは
欲てもなく欲もなき也 ○破壊の氣風物事を、うちこは

ひ 美術の保護 その二

○王朝藤原時代と世に稱ふる ○平安寧樂の都京都や奈良 ○叢源多く集ま
鐘 聲木魚の聲や ○雄麗宏 壯をくしく、うるは ○一色異采の異りたる ○雄視
寒草滿目蕭 條少煙、寒く枯れたる草な ○雄都の址の立派なる都會 ○千古絶調昔にも今にも無 ○阿
堵物へる意にて錢也 ○小成功の意 ○風潮の流行 ○長技するわだ ○特得にて、上手の意 ○冥助見
ぬ所の神佛 ○先天の性質の生れつき ○方策ばかり ○暗々裡人の知 ○祠宇やしろ ○參照はする ○散
佚ちりばら ○典型ひながた ○頌徳 表めぬる文也 ○篤志家志のあ
なる

ひ 人のすみか 鴨長明氏文

○行く川のながれ 晝夜のたへ間もな ○しかもそれで ○よごみ 水の流れずして ○うたかた泡 ○か
つ消えかつ結びて 消ては出来、出 ○久しくとどまる事なし 何時までも元の ○世の中にある人
此世に生き ○住みか宅 ○かくの如しの 彼の水上の泡 ○玉敷玉を敷き詰めたるが如き ○棟屋の ○蕨の
てある人也

る義にて瓦の魚鱗の ○あらしへる 家屋の美麗な ○たかきいやしき 高貴の人も ○まことかと尋れば
如く成るを云ふ也

云々は其住宅や住人を現實なる ○知らず 云々は下の文章を受くる格にて生れて來、死して去るは何の ○かり
ものかと思ふて見ればの意

のやどり 現世は泡末の如きものにして決して定住のものとは云ひが ○誰が爲に心を惱まし 我と云へる自
たければ眞に僅々五十年の、かりのやどりと云へる也

の泡の如く空なるものなれば誰の爲に住宅の ○何によりてか目を喜ばしむる 人は身外の諸物を現實有
美を競はんとして心を勞するのであるか也

心を喜ばせ慰め得ると思はるれども、山川國土草木悉皆空なる上に我又空なれば何を實有として心 ○そのある
を慰むるが目前の諸現境は凡て一種の幻影なるに過ぎざるにあらざるや、と佛説を以て立論せるなり

じの住かど無常を争ふさま 家の主人と家と互に生滅無常 ○いはば例へて ○あるは露落ちて花殘
を競争するが如き有様也

れり 云々は露が花より先に消えて花のみ残り居るが如きも、うれば ○花はしほみて露なほ消えず 云
永久に残り榮ゆるに非ず時を待たずして忽ち萎縮する也との意

は前と反對にて露の花より跡に残る事あれども、それも又暫くにして消ゆればうれども、夕方まで消えず ○物
してある者はあらざるも云ひて、形あるものは遅速こそあれ早晩消滅せすと云ふことなしと説きたる也

の心を知れりしより 物心づき ○不思議めづらしき、事
てから

ひ 百鳥譜 横井也右氏文

○はては終に ○小春の空十月頃 ○ふと口語の ○かいつれて 同じにの意 ○白鷗 ○おのれ静かな
るものなり 自らが静にし 居る者也 ○なべて凡 ○卵の花のくもり 四月頃に、卵の花くだしとて ○さだかに明

○深草山城園 ○すみやかにして せはしく、はやくして ○夜一夜 夜通 ○障子のかざり一面 ○さう過ぎて 急がして ○またさきもあへぬは 瞬も、爲し得ぬ ○あわたたしきか 忙しく急に見ゆる ○碁僧 碁を、過ぐる也 ○おもはずや 思はぬ ○淤泥 ぬか ○物にもかゝはらぬ 世間の事物に ○さばかり悟りたがへ を云 ○たるとは 然様に思ひ誤 ○青雲の心 こころ ○立身出世 ○賜 ○たちるにつれなくて 諛はぬものな ○飛ぶにも、居るにも極めて、けなげに男 ○前栽庭 前栽の、柿などに思を、つけ ○神のつかひ 鳥は熊野権現の御使と ○え思ひすてすや 前栽の、柿などに思を、つけ ○神のつかひ 鳥は熊野権現の御使と

もの部

も 師賢公の事跡 伊能頼則氏文

○道長公の流れの藤氏 御堂關白道長公の ○帶劍を許さる 宮中にて劍を佩く ○日嗣知ろしめして 天位を、つが ○經 ○承久の御無念を繼がせ給ひ 後鳥羽天皇に對し奉りて北條の大不敬せし御 ○御結 構御はか ○大事を謀らせ給ひけるに 北條御討伐の大事を御 ○議に隨ふ 提議に、し ○失ひ殺す ○さ たしける ○合期せず一致 ○衆徒 大衆にて ○南都奈 ○定め申しければ 評議を決し奏 ○公賢

卿 ○女房女 ○九重所 ○按察使 今の警視總監の ○公敏 ○衰龍の御衣 天皇の御 ○瑤輿 風蓋 ○擬し てにせ ○行粧 ほひ ○解脱法相 俗世界の業塵を、脱して佛門に入り法門の姿となれるを ○のぞきて取り去 堅甲勇威 ○満山 敷山 ○拳を握りて 勇み立て ○東使 鎌倉の ○仙躰 みる ○取集めてあはれにおぼしければ 何も彼も見る物の哀 ○思ふ事なくてぞ見まじ 心中に思物ひなど ○ありあけ月 有明の月にて二 ○志賀の浦浪 志賀の浦に打寄する波の ○防舍 寺 ○そこはかと なく ○たごらせたまふ 道をたごくと歩ませ玉 ○聞き定むるまではとをばしけるに や ○別業 別 ○素貞 ○あくがれ さまよひ ○山の下しばをりをりに 山下の枯 ○思ひかね 耐へ兼ね也、思の切 ○入にし山を立ちいでて 再び世の中 ○まよふ 迷ひ居 ○ただ君の ため ○外に何も思ひはなし 只 ○別る とも ○君すまで 大君のまじ ○憂き物 うきにて面 ○今は限 り ○雲の色に時雨雪 げは ○見えわかで 見分くる事の ○かき暮す くら ○こえんも知らず 今日我が死出の山を越 ○みやこ人 故里 ○猶さりと も ○かき暮す くら

り來る事と思へ ○志學の年の青年 ○榮辱の中に心をこごめ給はざりしかば人の、ほめそしりなどなるならん也 ○遠流の遠地に流罪 ○醜醜醜 ○車裂重き刑罰也 ○傷むかな ○諷詠に日をわ
 何に云ふとも只誠一筋を ○遠流の遠地に流罪 ○醜醜醜 ○車裂重き刑罰也 ○傷むかな ○諷詠に日をわ
 心とせられしを云ふ也 ○晴れぬ懐心の晴れ ○うち誦し也 ○憂國の徒國を憂ふ ○あはれ呼 ○心づ
 たる歌をよみ心を置 ○晴れぬ懐心の晴れ ○うち誦し也 ○憂國の徒國を憂ふ ○あはれ呼 ○心づ
 りて、日を送る ○晴れぬ懐心の晴れ ○うち誦し也 ○憂國の徒國を憂ふ ○あはれ呼 ○心づ
 くし心配 ○逆旅び ○千歳の哀の千歳の後まで ○花落こ ○諡 ○忠魂人の亡魂 ○眉目を開かせ給
 ひけんを 愁に、ひそみ居りし眉を

も 文字かく心得

本居宣長氏文

○ものを文字 ○おふな口語の、あ ○さるををりれ ○多かる多きあるにて ○あぢきなき無味氣にて
 ○常に書きかはす平日取り ○消息文の手紙 ○かしら傾けつゝ考へ込 ○かへさび返り ○さすが
 なめしき流石に無 ○よろづよりも外の事柄 ○一わたり也 ○理りはさることながら理屈は尤
 ○いふかひなく云ひ甲斐 ○おもなく面無くにて ○かたくな愚 ○なごて如何に ○いみじう甚く

せの部

せ 前出師表

阪正臣氏譯文

○亮 諸葛 ○中ぞら途 ○つかれかじけぬ疲弊 ○いみじく甚し ○みもとを守る帝城を ○まめな
 る忠實 ○いそしめる勤め ○大御稜威御威 ○はふらかし薄落、菲 ○府官府にて ○たむる直す也 ○
 たはわざたはれた ○をかす者す者 ○司役人 ○きため向ひ正 ○内にまれあれ ○やつこ選して
 云ふ詞、 ○さて口語の、 ○くばさ利 ○營の中陣 ○處得むこと 其職に適 ○かたらひ語り ○うれた
 奴也 ○田びと農 ○向肢り、私記に兩股是正相向故云三向肢一耳と見ゆ俗の腰を折りて也 ○あり經しを
 みながら ○かまけ感 ○いたづかむ勞せ ○よさし托 ○こるこあらはれずして 効績が現は ○かた
 來しを也 ○かまけ感 ○いたづかむ勞せ ○よさし托 ○こるこあらはれずして 効績が現は ○かた
 じけなく辱 ○おそろしく也 恐懼 ○まつろひ願 ○足らへぬれば 充分に成 ○中原中 ○をちなき身
 無二男氣一の意にて怯 ○攘ひ ○みとも供 ○つみなひ 日本記に誅又は ○御たま 神靈 ○筆のたち立
 弱なる身と云へる也 ○攘ひ ○みとも供 ○つみなひ 日本記に誅又は ○御たま 神靈 ○筆のたち立
 所にて、文字の
 書き方の意也

すの部

す 陶山小見山の夜打

太平記文

○陶山藤三 ○催促の意 ○若黨 ○御邊たち なた ○大剛勇 ○案ずる 考ふ ○源太景季 ○藤戸前

○案内者のしわざの案内をせしもの ○同じき四郎 同苗四郎に ○生食 ○いかにいはんや 況して也 ○いざや 發語也、さあ ○同じける 賛成し ○曼陀羅經文 ○翔け難き 飛び越 ○蒼苔 蒼苔 ○塀の際 ○いひがひなげ 俗語の、つ ○薦 ○げに尤 ○誰か候ふ 誰が居るか ○鎮守の前 里の、ま ○坊寺 ○須彌也 山 ○由旬 里也 ○物の具 胃 ○きたなき 見苦 ○様やある 口語の様なる事 ○いつの爲に惜む命をや 今死せずしては何時死せんとぞ惜む命であるか也

す 資氏の遠矢

太平記文

○紅下濃 裾濃にて、紅 ○澳 將軍を ○鞍備後の 尾の道 ○上差 鞍に一本二本さし添ふる矢也 ○搔直し 矢の羽の廣くなり ○鴈 射はづしたらむは 射損じた ○機をつめてぞ 氣を凝ら ○爬て ○かけ鳥 翔り行 ○射つるに 射たので ○弓杖に すがりて立つ也 ○三人張 三人がかりにて絃也 ○十五束 三伏 十五握と指を三本伏せたる程の ○篋中 篋は度にて、篋 ○草摺 腰甲 ○資氏 ○射返し てたび候へ 其矢を射返して給り候へ也

す 相摸の戯を見てよめる歌

本居豊頼氏詠

○名に負ひつけ ○そのれ 海某の ○稱へて 云ひ ○あれこそは 我こ ○健男 男 ○ところせく 所せ ○ほこらひ 誇り自慢 ○手ぢから 腕力 ○堅庭 堅き土 ○汗かきたりて 汗を、かき ○おそふら ひり 押觸なりと云ふ、らひの反り也一説に押しと云へ ○ひこづらひ 源氏に、ひきしらひ文ひさしるひと云ふ ○關の岩かご 相坂の關の岩所を相摸の兩關の身體のい ○ひむがし 東 ○あぐる 扇の風高みりとて多く 立つ足もなきにて 勢の屈するを云ふ

學中 四學年國文熟語詳解 終

明治三十六年十一月十三日印刷
明治三十六年十一月十六日發行

四學年國文熟語詳解

正價拾七錢

著作者 近藤正一

發行者 岩崎鐵次郎

東京市神田區鍋町二十一番地

印刷者 齋藤章達

東京市日本橋區兜町二番地



印刷所 東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町二番地

發兌

東京市神田區鍋町二十一番地
電話本局三〇六七番

大學館

文學博士小杉楹村先生題 ●早稻田大學講師赤堀又次郎先生序
前華族女學校講師近藤正一先生著

中一學年國文熟語詳解

正價十三錢
郵稅二錢

中二學年國文熟語詳解

正價十三錢
郵稅二錢

中三學年國文熟語詳解

正價十三錢
郵稅二錢

中四學年國文熟語詳解

正價十七錢
郵稅四錢

中五學年國文熟語詳解

印刷中

第一高等學校教授今井彦三郎先生序
千勝義重先生著

誤り易キ國文法

本書は國文法中最も誤り易き點に就き詳細に説明して受験者、獨學者の爲めに煩瑣なる研究を省かしたるなり、本書を一讀すれば國文法に通曉するに些の困難を感せず平易に國文を了解し解剖するを得。

河村北溟先生著

漢學自在 漢文句法詳解

本書は漢文の句法に就きて叮嚀親切に説明したれば漢文を作らんとするもの、和文を漢譯するもの、漢文を和譯するもの、白文に訓點を施すもの、總て漢學を學ばんと欲するものには座右に缺く可からざる珍書なり。

河村北溟先生編 二百四十頁

中 一學年漢文熟語詳解

本書は尋常中學校並に同程度の諸學校に現今採用せらるる教科書を始め参考書中の難文熟語を抜萃し意義音訓運用を解釋せるもの、本書中に掲載せる重なる諸書は左の如し

- ◎漢文教科書 秋山四郎編 卷一
- ◎新漢文讀本 伊藤 允美 共編 卷一
- ◎漢文新讀本 飯田御世 吉野 正男 共編 卷一
- ◎中學漢文讀本 弘文館編纂 卷一 卷二
- ◎漢文讀本 國語漢文同志會編纂 卷一 卷二
- ◎漢文讀本 國語漢文研究會編 卷一 卷二
- ◎中等漢文讀本 福山義春 共編 卷一 卷二
- ◎教科書 撰定中學漢文 卷一 卷二
- ◎「三學年」、「四學年」、「五學年」の漢文熟語詳解は目下印刷中

早稲田大學講師 赤堀又次郎先生序
前帝國大學講師 近藤正一先生編
前華族女學校講師

中 一學年國文熟語詳解

本書は尋常中學校並に同程度の諸學校に於て現今採用せらるる教科書を始め参考書中の難文熟語を抜萃し意義音訓運用を解釋せるもの、本書中に掲載せる重なる諸書は左の如し

- ◎中學國文讀本 卷一 卷二 弘文館編
- ◎中學國語讀本 卷一 卷二 落合直文編
- ◎中等國文讀本 卷一 卷二 關根正直編
- ◎中等國文 卷一 井上 頼國 共編 上下
- ◎中等國文讀本 卷一 卷二 落合直文編
- ◎「五學年」の國文熟語詳解は目下印刷中

侯爵西園寺公望君題字
阿 鹿門先生序 財田榮先生編

作文 熟語成句詳解

(版九)

正價金卅錢 ● 郵稅四錢 ● 紙數二百五十頁
因循○優柔不斷○乙夜之覽○暴虎馮河○馬耳東風○亡羊之歎○莫逆之友○破瓜之齡○塗炭之苦○等熟語數千を聚めて、之に精密の意義、文字の出處、故事來歴等を詳説して、之を「いろは」別に區別し、尙ほ索引に便なる爲め種類目錄をも付し、別引に便にして、文筆に従事する者の座右必須の要典なり。

文學士栗木田岡君序渡部幾石君著

美文 美辭麗句

(版四)

正價十五錢 ● 郵稅四錢 ● 紙數二百三十頁
季候(春夏秋冬)地理、天文、人品、品性、人情、人事に別ち更に百有餘の細目に分ち古今和漢の名著中より作文の資料となるべき美辭麗句を採擷せるものなり、文人は勿論青年學生が座右に缺く可からざるの寶典なり。

文學士宮本正貫先生序虎城山人編

作文 助字用法詳解

(版六)

價十五錢 ● 郵稅二錢
也、矣、焉。則、乃、即、輒、便、載就。既、已、業。反、還、却。順、回。等の助字數百を集め、これを決定、怪疑、發問、願望、禁止、命令、被令、分別、形狀、想像、發端、歎息、指示、接續、推致、關係、反動、假説、時刻、併列、分量、比題、反對、發誓等第二十五章に分類し用法運用に就て例題を引用して詳説す。

虎城山人編

和文漢譯秘訣

(版四)

價十五錢 ● 郵稅二錢
和語を漢語の語勢に變する練習法より復文十數例を擧て語句の轉例配置を一字一字詳説し又譯文の異同を識別し譯文の運用變化を會得せしむる爲め同一文の數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳説せり。

河村北溟先生著

作文 熟語故事辭典

正價金三十錢 ● 郵稅四錢 ● 紙數二百六十餘頁
本書は熟語成句詳解に漏れたる故事熟語を集めて猶廣く詩文小説戯曲中の新文字を加へたれば兩書は恰も車の兩輪の如く相共に離る可からず、讀者これに依て牛充棟の書卷を繕讀するの迂遠を免れ一朝にして漢學通たる可し、寔に作文修辭の好參考書たるを以て全國中學校の兩目錄に分ち索引の便に供せり。

河村北溟先生著

作文 麗句類纂

正價三十錢 ● 郵稅四錢 ● 紙數二百五十頁
文章を作るには多く古語を暗記し成句を皆誦せざる可からず和漢古今を論ぜず悉く採擷せり天文、地理、時令、官品、衣冠、家風、軍旅、交際、勳植の十八門に分ち更に之を細別して百五十餘種の部門とせり是れ需用の索引に便せんとしなり殊に文字は振假名付としれば、また辭書に依頼するの煩なし。

河村北溟先生編

作文 形容語疊語詳解

價三十錢 ● 郵稅四錢 ● 紙數二百七十餘頁
本書は形容語、疊語、駢語の三篇に分ち三篇共に更に天文、地理、人物、人品、人情行爲、事物、言語、吉凶、文學、政事、家國、衣食、器用、鳥獸、蟲魚、草木、花卉の部に細別し音訓と意義とを附したれば、作文を練習し漢文を學ぶもの、座右に缺くべからざるの良書なり。形容語の例、蒼然、一天地のありく、と見ゆる状を形容したる言葉、疊語の例、濟々、容貌の美しきを言ふ、駢語の例、神祇、天神を神と云ひ地神を祇と云ふ。(後漢書班固傳註)

河村北溟先生著

漢文 白文訓點解釋法

價四十錢 ● 郵稅六錢 ● 紙數四百餘頁
漢字、音訓、句讀、段落、訓點、復文、釋文、解釋の諸節、を總論とし、白文訓點、白文句讀、白文直釋、白文解釋を實地練習とし古今和漢の文章中模範とすべき名文を選抜し諸學校漢文試論問題答案高等學校海軍兵學校を始めとし十有餘校を網羅したり漢文の難澁を嘆するもの本書を一讀せば前日の愚を自ら笑ふに至る可し、寔に受験の好參考書。

堤達也先生著

國語漢文文典問答

價二十五錢▲郵稅四錢▲紙數二百十頁
著者國語漢文の文典研究に從ふ事數年其草稿積んで堆をなす此に於て青年學生の爲め適切必要なる數百ヶ條を採りて兵隊多何益、雖兵多何益、敢不吐露情實、不致吐露情實等の區別、則便乃即等の區別助字の使用法、國文のありては音韻の事、動詞助詞等の連結係結、歌文の解剖等青年學生の最も困難とする諸點に就き、細大漏さず百十八問答を設けて叮嚀親切に説明せり、受験者には無比の良書なり。

文學博士木村正辭先生序第一高等學校教授今井彦三郎先生序堤達也先生著

國語故事成語詳解

價四十錢▲郵稅六錢▲紙數三百九十二頁
我國古來故事熟語を説きたるもの、其材料極めて少し且つ近時國語の辭書の如きも單に熟語の解釋に止り、故事に關する事少し、著者これを概し博引旁證煩る務め、古今學者の説を參照し公平の判斷を以て故事熟語數千語を解釋す索引の煩を計りいろは目録とす、諸學校入學受験者檢定試験志願者等の座右の寶典。

文學博士小杉楓邨先生序並閱
多治見武雄先生著

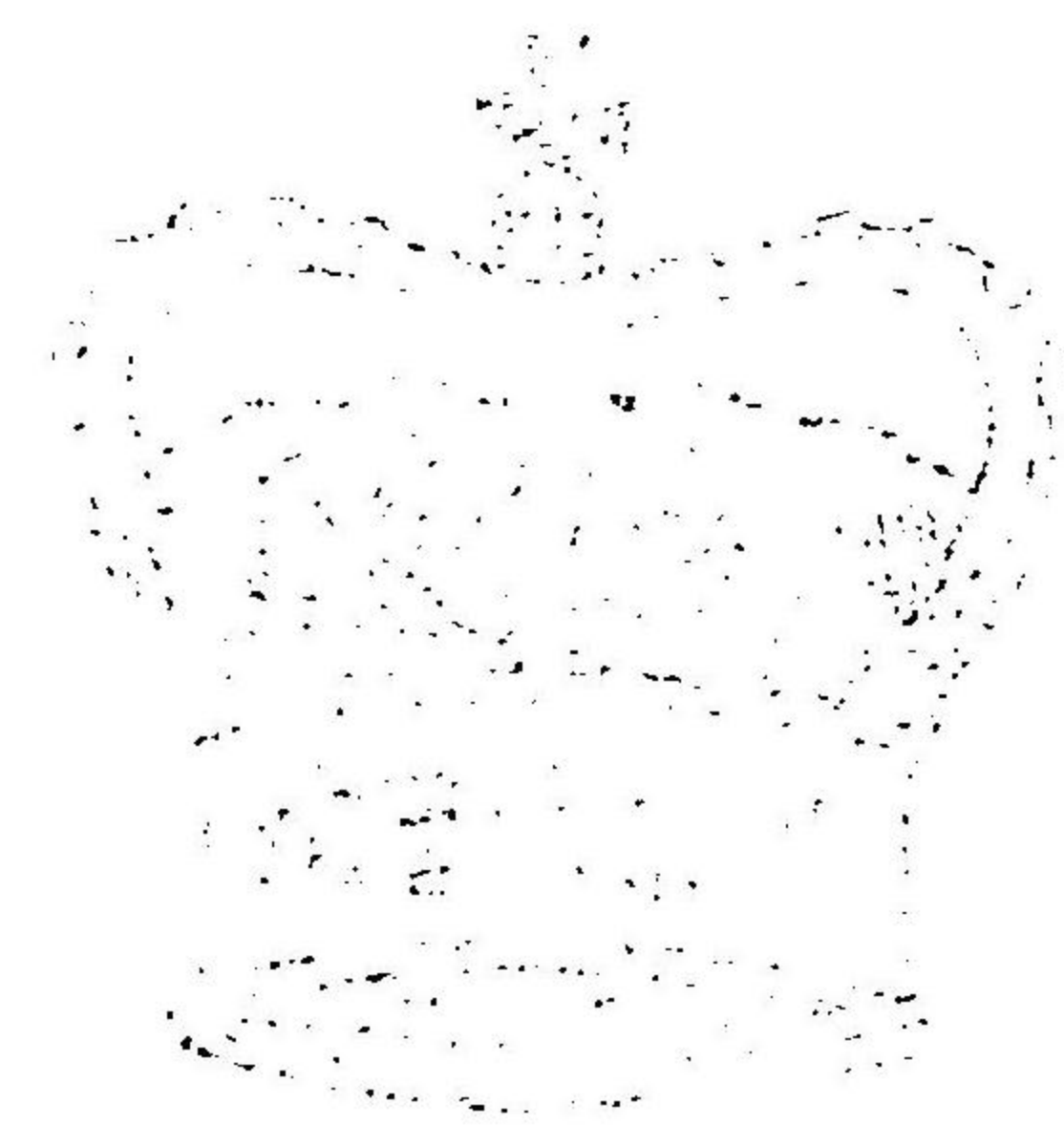
國文學書解題

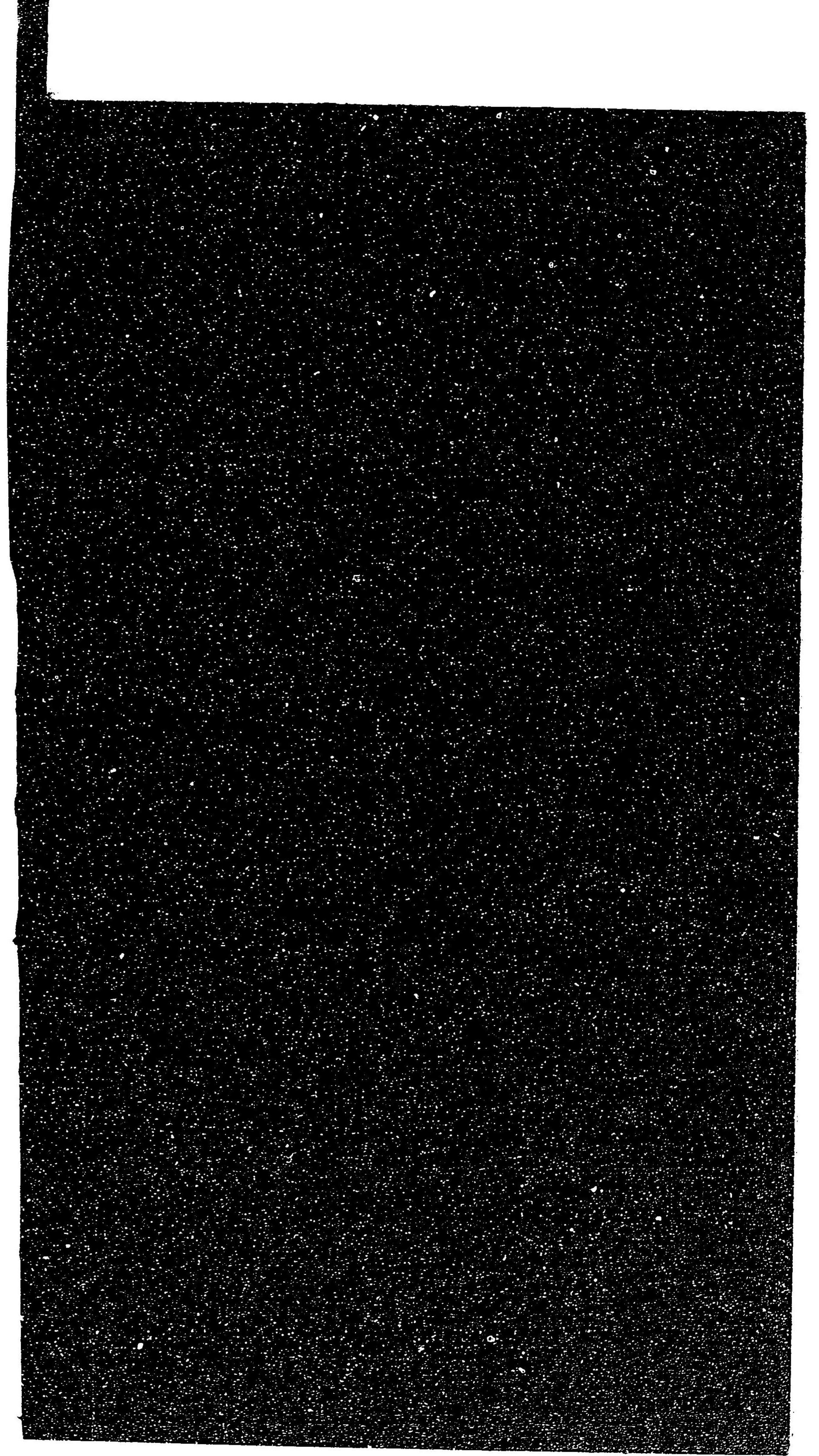
價二十五錢▲郵稅四錢
本書は、歴史、物語、隨筆、日記、紀行、歌集、雜書等に分類し、書目總計百數十種、日本古代より徳川時代に到る迄悉くこれを網羅し著書に就き簡明なる解題を試み参考書の良書と思はるるものを列挙し著者の略名を挙げたり、これ皆に受験諸學生の良書たるのみならず、また以て日本文學史と見るを得べし近時出版界稀に見る懇切の著書なり。

文學博士木村正辭先生題女子大學講師華族女學校講師井上賴圍先生序 前華族女學校講師近藤正一先生著

國語高等女學讀本詳解

價四十錢▲郵稅六錢▲紙數三百四十頁
本書は高等女學校生徒並びに女子學校生徒の教科用書並に參考用書中より意義の難難なる音訓の解し難き文字を摘記しこれに適當の音讀解釋を附したるものなり、今其讀本中の重なるもののみを列記せば、國語讀本、國分讀本、廣池讀本、明治書院讀本、中等國文讀本、國分讀本、廣池讀本、明治書院讀本、中等國文讀本等これなり、且つ作者名を一々記載して文字の出處と運用を覺らしむ目録をいろはに分類し索引の便に供す。





特22

646

中
学四学年国文熟語詳解

国立国会図書館